富士宮市文化財調査報告書　第14集

丸ヶ谷戸遺跡

株式会社ヤスダによる宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書　第14集

丸ヶ谷戸遺跡

株式会社ヤスダによる宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

富士宮市教育委員会

序

富士宮市は、富士山裾野の傾斜地にひろがる地であり、温暖な気候、風土は遠く原始の時代より人々の生活が営まれ、市内の随所にはそれら先人の足跡として、貴重な文化財が数多く残されております。

これらの文化財につきましては、文化財保護法等に基づき、積極的な保護、保存、さらにその活用を図り、地域の知的、文化的な生活環境の保全に努めております。しかしながら、近年における地域開発の進展は文化財、とりわけ埋蔵文化財に対して少なからず影響を与えつつあります。現在、この埋蔵文化財の取り扱いがもっとも大きな問題となっており、開発事業等の土地本来の利用との調整段階では、できる限り現状保存の方針で対処しておりますが、事業内容により、現状保存できないものに対しましては、発掘調査を実施して、記録保存の措置をとっております。

このたびの株式会社ヤスダによる宅地造成事業につきましても、関係諸機関との慎重な協議が重ねられ、現状保存が不可能との結論に達しました。そこで、関係機関と地元関係者及び、株式会社ヤスダのご理解とご協力のもとに、記録保存という形で後世につたえることとし、調査に至ったものです。そして、その成果は別記に報告のとおり、静岡県下初例の「前方後方型周溝墓」の検出をはじめといたしまして、広く周辺地域の原始、古代史解明への貴重な幾多の新資料を提供してくれました。

こうして遅々ではありますが、明らかにされつつある郷土の歴史は、単に学術的意義のみならず、今後の市民生活のなかに根付いた文化行政として、大切に生かされて行くべきであろうと思います。

ここに、富士宮市文化財調査報告書第14集「丸ヶ谷戸遺跡」を刊行して、多くの方々のご批判とご指導を承るとともに、最後になりましたが、埋蔵文化財の意義を理解され、本調査と本書の刊行にあたっての費用の負担等、格段のご配慮を賜りました株式会社ヤスダの関係各位、及び発掘調査に際し、多大なご協力をいただいた地元関係者等に対しまして、深く感謝の意を表します。

平成3年3月

富士宮市教育長　田　口　哲

例　　言

1．本書は静岡県富士宮市大岩字丸ヶ谷戸 741番地の１外に所在する「丸ヶ谷戸遺跡」の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は静岡県富士市吉原４丁目15-22 株式会社ヤスダ　代表取締役安田邦裕氏による宅地造成工事に伴うもので、平成元年９月20日に調査依頼を受けた富士宮市教育委員会が実施したものである。

3．発掘調査は平成元年12月11日より平成２年３月20日まで実施されて、以後、平成２年度に整理、報告書刊行作業が継続されて、平成３年３月20日に本書を刊行して本事業を完了した。

4．発掘調査の担当は、富士宮市教育委員会社会教育課主査馬飼野行雄、同主査渡井一信、同嘱託員山上英誉があたった。

5．発掘調査資料の整理は、馬飼野、山上が主体としてあたり、富士宮市教育委員会臨時職員芦川美智子、佐野重子、前嶋佳代、中山民子の協力を得た。

6．写真撮影は、馬飼野、山上があたった。

7．本書の執筆、編集は馬飼野、渡井、山上があたり、文責は文末に示している。

8．地形図、遺構実測図に記する高度は全て海抜高度をもって示している。

9．第１図に用いた地形図は、昭62、部公第3154号によって建設省国土地理院長の承認及び助言を得て、富士宮市役所が調整した富士宮市都市計画図を使用している。

10．土器観察表に記す色調は、破片面積のもっともひろい範囲を専有する色合いである。新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局）で補って判断している。

11．印刷、出版に関する事務は、富士宮市教育委員会社会教育課文化振興係があたった。

12．発掘調査に関する全ての資料は、富士宮市教育委員会で保管している。

13．発掘調査から報告書作成に至るまで、次の方々から御指導、御協力をいただいた。記して感謝する次第である。（敬称略）

赤塚次郎・石野博信・植松章八・大塚初重・加藤久美・加納俊介・栗野克己・佐藤達雄
坂口滋皓・志村　博・滝沢　亮・野崎　進・野村昭光・林原利明・久松義昭・藤岡孝司
前島　卓・松井一明・宮腰健司・渡井義彦

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境……（渡井　一信）…1
Ⅱ．発掘調査の経緯と経過……2
　1．発掘調査の経緯……（渡井　一信）…2
　2．発掘調査の経過……（馬飼野行雄）…3
Ⅲ．中世以降の遺構……（馬飼野行雄）…4
　1．土壙墓……4
　2．溝……5
　3．道……6
　4．土坑……7
　5．大型土坑……7
　6．竪穴状遺構……8
Ⅳ．竪穴住居跡……（馬飼野行雄）…9
Ⅴ．方形周溝墓……（馬飼野行雄）…12
Ⅵ．前方後方型周溝墓……（馬飼野行雄）…14
Ⅶ．土　器……（山上　英誉）…18
　1．弥生時代Ⅳ－4様式の様相……18
　2．器種分類……22
　3．文様……25
　4．成形と調整法……27
　5．土器の編年的位置……29
　6．竪穴住居跡02の遺物出土状況……35
　7．大廓式土器（古）の検討……37
Ⅷ．発掘調査の総括……（馬飼野行雄）…43

挿図目次

第1図　壺Dから壺Fへの変化……20
第2図　高坏の分類……21
第3図　市内発見のタタキ成形甕……28
第4図　泉遺跡出土土器……30
第5図　小型高坏Aの変化……33
第6図　富士市宇東川A遺跡第67号住居跡出土土器……41

図版目次

図－1　遺跡位置図（1:20,000）
図－2　周辺地形図（1:2,500）
図－3　発掘調査区域図
図－4　遺構全体図－1
図－5　遺構全体図－2
図－6　方形周溝墓実測図
図－7　前方後方型周溝墓実測図
図－8　竪穴住居跡01.02 実測図
図－9　土器実測図－1
図－10　土器実測図－2
図－11　土器実測図－3
図－12　土器実測図－4
図－13　土器拓影図
図－14　竪穴住居跡02土器出土状況図
図－15　竪穴住居跡02土器接合関係図-1
図－16　竪穴住居跡02土器接合関係図-2
図－17　竪穴住居跡02土器接合関係図-3
図－18　遺跡内土器接合関係図
図－19　上石敷遺跡K－1、K－4号
竪穴住居跡出土土器実測図

図版－1　丸ヶ谷戸遺跡
前方後方型周溝墓全景－1
図版－2　丸ヶ谷戸遺跡全景
図版－3　a．前方後方型周溝墓全景－2
b．方形周溝墓、竪穴住居跡01.02
（手前）全景－1
図版－4　a．前方後方型周溝墓土器出土状況
b．前方後方型周溝墓溝内礫床
図版－5　a．方形周溝墓、竪穴住居跡01全景-2
b．方形周溝墓、溝内土壙01.02全景
図版－6　a．竪穴住居跡01埋土状況
b．竪穴住居跡01床面状況
図版－7　a．竪穴住居跡02床面状況
b．竪穴住居跡02遺物出土状況
図版－8　土器－1
図版－9　土器－2
図版－10　土器－3
図版－11　土器－4

Ⅰ．遺跡の位置と環境

丸ヶ谷戸遺跡は、静岡県富士宮市大岩字丸ヶ谷戸741 番地の１に所在する（図－１）。ＪＲ身延線富士宮駅より、北東方向に直線距離にして、約２㎞の地点である。遺跡の周辺には、茶畑、水田などがひろがるが、のどかな田園風景の中にも、近年、市街化の波が徐々に押し寄せ始め、宅地化が進んでいる。

本遺跡は、富士山頂から連なる裾野斜面末端部の、幅50～70ｍの比較的幅の狭い舌状の台地を占地し、標高はおよそ170ｍを測る。台地の西端は滝沢川に接し、200ｍ程南流した地点で弓沢川に合流している。弓沢川は、さらに2.7㎞南下した源道寺地先で潤井川に合流する。潤井川は、富士山大沢に端を発し、上井出付近を起点として、上条、淀師を南下、大中里付近で東に転じ、富士市内を経て、田子の浦港に注いでいる。その形成する沖積地は、富士裾野の末端部を区画している。その対岸には、月の輪遺跡群が占地する星山丘陵がひろがっている。

本遺跡の所在する富士根地区は、古富士火山の噴出した集塊質泥流（古富士火山噴出物層）を基盤とし、その上部は新富士火山の火山性砂礫層が降下して、なだらかな丘陵地帯を形成している。この火山性砂礫層は極めて透水性に富むため、小泉、出水、滝ノ上などの地名が示すように、湧水地が数多くみられ、市内有数の富水地帯となっている。また、湧水地と舌状台地状の地形による地理的条件が動植物の繁殖をもたらしたであろうことは、箕輪遺跡、出水遺跡、滝ノ上遺跡、天間沢遺跡など、20箇所以上にもおよぶ縄文時代遺跡が、それぞれ標高100～200ｍの間に、0.5～1㎞程の距離を隔てて占地することからも容易に知れ、富士宮市内における遺跡密集地帯を形成している。

この富士根地区は、概ね弓沢川を境に、それより東側の富士裾野末端地域を指し、本遺跡はその西端部に位置しているが、ここでは本遺跡から１㎞ほどに近接する遺跡に目をむけてみると、そのすぐ東側には、本遺跡とは、ほとんど切れ目のない状況で峯石遺跡がひろがる。元々は、丸ヶ谷戸遺跡に含んで捉えられていた遺跡で、昭和53年の遺跡分布調査により、丸ヶ谷戸遺跡と峯石遺跡とに分割され、富士宮市遺跡地名表及び富士宮市遺跡分布図に登録された。富士宮市史上巻で、特殊な複合口縁部をもつ壺型土器として紹介された丸ヶ谷戸遺跡出土土器というのは、現在の峯石遺跡内出土のものである。さらに東側には、滝戸遺跡、天間沢遺跡とともに岳南三大遺跡として知られ、縄文時代中・後期の有力遺跡である箕輪遺跡がある。本遺跡の北側をみると、時田遺跡、辰野遺跡、宝田遺跡、峰ヶ谷戸遺跡などがあり、いずれも濃密な縄文土器、土師器の散布地となっている。南側には、大室遺跡、三ッ室遺跡、木ノ行寺遺跡、神祖遺跡、寺後遺跡、出水遺跡、出水西遺跡などが隙間なく分布している。また、これらに包含される中には、古墳時代後期の群集墳が確認されている。大室古墳、神祖１号墳、神祖２号墳、神祖３号墳等がそれで、とくに大室古墳は、基底径15～16ｍほどを測る市内最大規模の円墳で、本遺跡の谷ひとつを隔てた、300ｍほどに位置するものである。　　（渡井一信）

Ⅱ．発掘調査の経緯と経過

１．発掘調査の経緯

本発掘調査の起因となったのは、株式会社ヤスダによる宅地造成事業によるもので、対象地（2,246.16㎡）内に８区画の分譲を計画したものであった。

この計画は、平成元年７月７日付けで、開発行為予備審査依頼書として、富士宮市都市開発部都市計画課に提出され（受付番号富都 第261号）、同年７月13日に、富士宮市土地利用委員会幹事会現地調査が実施された。調査の結果、対象地は、富士宮市遺跡地名表及び富士宮市遺跡地図による「丸ヶ谷戸遺跡」内にあることが判明したため、都市計画課宛提出の「開発行為に関する予備審査結果書」において、起因者に対し、工事実施に当っての「埋蔵文化財発掘届」（文化財保護法第57条の２第１項）の提出とともに、埋蔵文化財の取扱いについての協議を求めた。

この後、平成元年８月３日付けで、株式会社ヤスダより「埋蔵文化財発掘届」が提出され（富教社第256号の２富士宮市教育委員会進達）、同時に対象地内の理蔵文化財発掘予備調査についての依頼がなされた（受付番号　富教社 第268号）。

以後、対象地内の埋蔵文化財の取扱いについて協議が重ねられ、富士宮市教育委員会は埋蔵文化財発掘予備調査を、平成元年８月23･24日に実施することをきめ、これに先立ち、平成元年８月10日付け、富教社第268号の２で、「埋蔵文化財発掘の通知」（文化財保護法第98条の２第１項）を文化庁長官宛に提出した。

調査は、対象地内に幅１ｍのトレンチを東西方向に５本設定して行われ、対象地北側一部を除くおよそ1,800 ㎡に、遺跡の包蔵が確認されたことを、平成元年９月５日に回答（富教社第268号の３）した。

この結果にもとづき、両者の具体的な取扱いについての検討を行い、工事着工以前に発掘調査を実施して、記録保存する方向で協議が進み、株式会社ヤスダからの委託を富士宮市が受け、富士宮市教育委員会が実施することになり、平成元年11月27日「丸ヶ谷戸遺跡埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」が締結され、これに基づき以下の発掘調査委託契約が交わされた。

平成元年度（平成元年12月９日締結）

１．委託業務の名称　丸ヶ谷戸遺跡埋蔵文化財発掘調査委託

２．委託期間　平成元年12月11日から平成２年３月20日まで

３．委託金額　金5,510,000 円

４．発掘調査対象地　富士宮市大岩字丸ヶ谷戸７４０－１外

平成２年度（平成２年４月２日締結）

１．委託業務の名称　丸ヶ谷戸遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書作成（整理作業）事業委託

２．委託期間　平成２年４月２日から平成３年３月20日まで

３．委託金額　金2,220,000円

４．発掘調査対象地　富士宮市大岩字丸ヶ谷戸７４０－１外

これより、富士宮市教育委員会は以下の体制で、平成元年12月11日より発掘調査を開始し、現場作業を平成３年３月20日に終了、平成２年４月２日より整理作業を実施し、平成３年３月20日、本報告書を刊行した。

調査主体　富士宮市教育委員会　教育長　田口　哲

発掘担当者　馬飼野行雄　富士宮市教育委員会社会教育課主査

渡井　一信　富士宮市教育委員会社会教育課主査

山上　英誉　富士宮市教育委員会嘱託員

発掘作業員　望月秀雄、天野秀男、神谷晃弘、勝俣利雄、渡辺保、天野一作、大平美奈子、中瀬小夜子、木内俊子、住吉和枝、戸塚英子、山崎芙美子、横山ヤスエ

望月香、勝俣秀子、太田川久子、高野たまゑ、桜井みわ、塩川とみ江

整理作業員　芦川美智子、佐野重子、前嶋佳代、中山民子　（渡井一信）

２．発掘調査の経過

発掘調査はまず、確認調査で弥生～古墳時代のほぼ単一の包含が予想され、表土が著しく攪拌され、移動が激しく、部分的には縄文時代の包含層まで掘削が及ぶことを知り、このことから調査の迅速、省力化を旨に表土攪拌土の除去を慎重にして重機に頼った。

表土除去後、調査区にＮ－30°26'20"－Ｅの10ｍグリッドを設定して、それに従い発掘調査を進めた。その呼称は発掘区短辺を北から南へＡ・Ｂ・Ｃ……、長辺を西から東へ１・２・３……として、具体的には北西接点をもってＡ－１、Ｂ－１等のグリッド名を呼称して、調査区にはＡ～Ｅ－１～８のおよそ24グリッドが設定された。そのうち、Ｃ・Ｄ－１～６グリッドで帯状となって、表土下の大沢ラピリ層が残るにすぎなかった。

以後、調査は各グリッド毎、精査を進め、調査区に拡がる中世以降の土壙墓、溝、道等の検出を終えた後、前方後方型周溝墓、方形周溝墓、竪穴住居跡２基を随時調査して、遺構、遺物の出土状況に応じた詳細な観察を行っていった。

なお、基本層序は地域に準じてなり（図－３）、富士山に近隣する条件から若干、堆積幅とスコリア粒の混入が多いことを特徴とする。以下、表土→大沢ラピリ（遺構確認面）→黒褐色土→茶褐色土（縄文中期包含層）→富士黒土→黄褐色ローム質土→古富士泥流で、周溝の掘削はこの礫層まで及んで、150cmの深さを測る。また、茶褐色土層内より加曽利Ｅ式土器の細片や打製石斧の露出をみるが、遺跡を形成するまでには至らないと判断された。　（馬飼野行雄）

Ⅲ．中世以降の遺構

1．土　壙　墓

調査区の全域（注１）に62基からなる土壙墓群が存在する。一般に土壙墓は円形と隅丸方形、方形、長方形（以下、方形）に大別され、それは埋葬される棺桶の形状差によることが知られている（注２）。本遺跡では６基の方形土壙墓を除いて全て円形土壙墓で占められ、これはおよそ富士岳南地域で実施される調査（注３）に共通している。しかし、方形土壙墓に「六道銭」、「灯明皿」、「火打石、火打鎌」などの伴葬遺物や、河原石などの偏平円礫を「枕石」に施す例（18、37）が目立つ反面、円形土壙墓は確認数に比して伴葬遺物が少ないために時期判断を鈍らしている場合が多い。なお、まれに円形土壙墓内を数個の自然礫で充填する例(14)もある。

本遺跡の伴葬遺物は少片の灯明皿（かわらけ）と銭貨13枚で、これには開元通宝(621、唐)３枚、咸平元宝(998、北宋)、景徳元宝(1004、北宋)、天聖元宝(1023、北宋)、景祐元宝(1034、北宋)、皇宋通宝（1039、北宋)、治平通宝(1064　、北宋)、熙寧元宝(1068、北宋)、元豊通宝(1078、北宋)、政和通宝(1111、北宋）２枚があり、このうち景祐、政和、咸平、皇宋、熙寧、天聖が六道銭として一重ねされるが、検出面が浅いため、明確な伴葬土壙墓を把握するまでには至らなかった。

これらの銭貨はいずれも唐、北宋よりの渡来銭で、皇朝銭の鋳銭停止(958)以後、寛文10年(1670)の渡来銭使用禁止令まで代用された通貨で、これに国内で私鋳したビタ（鐚）銭と呼ばれる粗悪な銭貨も加わり、千差万別、膨大な量で流通していたらしい。流入の多かったものの順にいうと、元豊、皇宋、熙寧、開元、元祐、永楽で、あとはぐっと落ちるという（注４）。

したがって、これらの銭貨の流通時に本遺跡の土壙墓の構築、いわゆる「墓原」の運用が予想されるが、洪武通宝(1368)、永楽通宝(1411)の明銭や、寛永通宝(1626)の流通のない時期であれば、その上限は中世でも比較的限定されてくる。しかし、それでも近世初頭を下らないであろうこの墓原に樽棺による直葬をくり返えす埋葬行為は火葬骨埋葬が一般化していく中世墳墓の有り方を受動することのない習俗が本地域に存在したのか、人道的、宗教的な問題も相まって遺構の取り扱いに比べて残された課題は多く、多角的な視野が必要となってこよう。

以下、本遺跡の土壙墓の法量を集計しておく。

	円形土壙墓56基	方形土壙墓６基
平均値	132.8 ×120.5 ×15.3	124.3 ×71.3×30.5（㎝）

規模別基数		重複基数	
～ 80	３基	２基	５個所
81 ～100	12基	３基	１個所
101 ～120	14基	５基	１個所
121 ～140	13基	６基	１個所
141 ～160	９基	８基	１個所

161 ～180　5基　　9基　1個所

181 ～200　3基

注1．壙底は第2層大沢ラピリ層から第3層黒褐色土層内にとどまるから、第4層茶褐色土層まで削平される前方後方型周溝墓後方部では削除されている可能性がたかい。

注2．植松章八　1976「特論、総括Ⅲ　土壙と溝 状遺構について」『陣馬上、平畦遺跡』長泉町教育委員会

注3．富士市教育委員会　1977『天間代山遺跡』

1981『横沢古墳、中原1号墳、伝法遺跡群（伝法A～E地区天間地区』

富士宮市教育委員会1981『月の輪遺跡群』

1981『月の輪遺跡群Ⅱ』

1982『代官屋敷遺跡』

1985『上石敷遺跡』

注4　青山礼志他1974『貨弊手帳』日本貨弊商協同組合

2．溝

調査区の中央南隅、E－3～E－5ポイント付近の調査区境に接して横走する溝01と、その南側に50～60cmほど離れて併走する溝02を見る。

溝01はE－4、5ライン中央部で確認される最少幅60cmを測り、それから幅員を除々に広げてN－45°－EでE－3ポイントにむかい、そこで最大幅200cmを測って湾曲しながらN－45°－Wで下る。この部分を道01と重複して内側の壁を失い、また逆にE－5ポイント辺では道02を切って、屈折、ないしは消滅するから、「枡」「鉤」状の角をもった溝が予想され、その、一辺はほぼ20mになる。このことから道02→本溝→道01・土壙墓群の新旧関係が捉えられ、埋土は若干のスコリア粒を含む黒色有機質土でしまりがなく、その堆積に時間的経過を感じずに土壙墓にも状況が似るから、それと離れた上限は考えられないであろう。

こうした溝が土壙墓群と同一検出面から発掘される例は前項であげる各遺跡からひろく多摩地区（注1）まで共通してなり、耕作地の「境界（道路を含めて）」、「根切り溝」、あるいは「段切りに伴う溝」など、開墾事業に関連する遺構である把握が一般的で「L」、「V」状の壁があるらしい。

本溝は「L」状に第2層大沢ラピリ層から第3層黒褐色土層まで掘り込まれ、溝底は南西に下る斜面に沿って内傾しながら、E－5→E－3ポイントさらに調査区外にむけて低くなり、E－3、4ポイント間で第2層より25cmの深さとなる。底面は雨水、または樹根による、小溝、小坑で細い凸凹を呈して、通路としての日常的使用の痕跡はなく、コンクリート状に堅固な第2層の壁面も鍬幅ほどの「鋸刃」状となって、開墾事業に関連する遺構とするに充分である。

とすれば『開墾事業』の停止、または終了後に、『墓原』の運用が開始されたのであり、つ

まり、開墾による「人」の生活領域の拡大に比例して、「墓」も周辺に拡散されていく、表裏一体の行為であれば、度重なる『重複関係』を有する遺構の表れ方も理解される。

開墾→停止・終了・放棄→墓原→荒廃（注２）→開墾

注１．東京都埋蔵文化財センター『多摩ニュータウン遺跡』各地点
金井、関山遺跡調査会　1990『東京都町田市金井、関山遺跡群』

注２．墓碑も曖昧に盛土された、いわゆる「土まんじゅう」による墓原の荒廃は、現代この地域の休耕地が数年で低木林と化している状況を実見すると、以外と早いかも知れない。

３．道

調査区を３等分するように、道01が３ラインに、道02が５ラインに沿って縦走する。

道01はＮ－40°－Ｗで調査区内をほぼ20㎜にわたって検出され、南隅で溝01と重複して、それより新しい。幅員はＤ－３、Ｅ－３間で240㎝、北隅が最大で310㎝を測り、検出面より深さ20㎝弱で「皿」状に窪む断面の両端の混スコリア土によって形成される「硬化面」で、その幅がおよそ250㎝である。この硬化面は幅50㎝、厚さ５㎝ほどで「樋」状となり、頻繁な使用（往来）をうかがわせ、左側面の地形がたかいためか、とくに顕著でほぼ連続してなり、右側面は硬度もゆるく散発的に南隅に残る。

このような道が降雨時に自然流路化することは知れ、道01も底面には雨水によって黄褐色粘質土層まで達する小坑や、小溝がうねって下っている。この流水に対して、溝01や、方形周溝墓に重複する南隅は黄褐色粘質土層が掘削されるため地盤がゆるく、土砂の流出が激しいこともあって「堰」状の石組みで補強されている。とくに左岸の溝01との重複部は拳大から人頭大の礫およそ100 個を川面にあわせて２～３段に積み、裏込めもするなどとくに丁寧で、右岸は散乱するが、それでも列状に配置された痕跡はうかがえて、また表土除去時に中央部付近の礫群を攪拌した事実をあわせると、護岸用の石組みが連続していた可能性もあり、こうした施設投資のあり方をみると、比較的、道01が往来頻度のたかい重要路線であった可能性もたかい。

河床や礫間には破損、風化の著しい中世陶器、土器36片が散在的にみられ、なかでは13世紀後半から14世紀の所産と思われる常滑窯系の大甕破片（注１）が目立ち、これに14世紀後半から15世紀初頭の中世土師質土器、いわゆる「かわらけ」（注２）の少片を散見すれば、土壙墓の埋葬銭貨に洪武通宝(1368)、永楽通宝(1408)の明銭がみられない事実も納得される。

道02はＥ－５ポイントからＮ－37°－Ｗで８ｍほど上って消失するが、これも後の開墾や、発掘調査の表土除去時に削除した可能性がたかく、連続した道を想定してもよさそうである。調査区南隅で溝01に重複されて、それより古いから、道02→溝01→道01の順となり、道02の廃道後、道01が新道として使用されたことが知れる。幅員は南隅で300㎝、消失部分で240 ㎝で、検出面から数㎝の浅い「皿」状の断面をもち、南半分では幅70～80㎝で浅く「わだち」状に窪む小溝が平行して３ｍほど確認される。この上部に混スコリア土で「樋」状に構築される幅30

～50㎝、厚さ5㎝ほどの「硬化面」が左側面では7ｍほど止切れなく続き、右側面は0.5ｍほどで溝01に切られる。この幅は150㎝である。底面はやはり雨水による小坑、小溝が目立つが土器、陶器などの遺物の散在はなかった。

これらの構造は調査区の東側にいわゆる「峰」をもつ幅広い富士山からの支脈を尾根伝いに上る同一条件を考慮しても、道01、道02の類似点は多く、それが基本的な道路構造で、また必然的な供用の結果でもあるかは判断されないが、ここで重要なことは道01が方形周溝墓東溝に、道02が前方後方型周溝墓西溝に沿って走る事実である。そして、その延長上に耕地、宅地境界や用水路、さらに方形周溝墓の南溝と西溝も耕地境界に一致して、それらが現況の区画構成に加わっていたならば13～14世紀頃には道01、道02がそれらを避るだけの「高まり」があったのかも知れない。

注１．杉崎章　1983『濁池古窯址群発掘調査報告書』常滑市教育委員会

注２．服部実喜　1985「鎌倉市域出土の中世土師質土器」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会

４．土　　坑

土壙墓より一回り規模を大きくもった土坑が、道01の西側、Ｅ－２～３ポイント間に３基がまとまって確認される。形状はいずれも不整で、隅丸長方形を意図しながら、孤状にちかい部分もあり、また、坑底も「皿」状から、それより深かったり、平坦面の意識のない構造を呈する。

重複関係は土坑02が土壙墓11、土坑03が土壙墓12を切って、いずれよりも新しく、出土遺物は皆無でありながら、本遺跡中でもっとも新しい段階の遺構である可能性がたかい。埋土も乾性のつよい黒色有機質土で限りなく現耕作土にちかく、３基とも道や溝による区画線に対して、平行、もしくは直角に長軸をもち、これが耕地の畝筋に一致して、埋納する対象物が定形した「形」ではなく、自在な「容量」を必要としたものであれば、農耕に関連した「貯蔵施設」を予想するに充分である。

計測値は以下である。

土坑01　Ｎ－27°－Ｅ　294 ×226 ×12（長軸×短軸×深さ、単位㎝、以下同じ）

土坑02　Ｎ－76°－Ｗ　283 ×164 × 9

土坑03　Ｎ－77°－Ｗ　290 ×211 ×21

５．大　型　土　坑

土坑よりも不整で規模の大きい大型の土坑が、道01の西側、Ｄ－２～３ポイント間に３基が確認され、大型土坑01が竪穴状遺構01、02を切って新しく、大型土坑03も大型土坑02と道01を切って新しく、大型土坑02が竪穴状遺構02と不明の重複関係を有する。形状の歪みは著しく、「下場」も不鮮明な「皿」状から「摺鉢」状で、前項の土坑同様に定形した形状よりも埋納す

る「容量」を必要としたものであろうが、埋土が人為的に短時間にされたり、道01出土と同じ常滑の甕破片や皿、卸皿、摺鉢などの日常什器の破片も少量みるから、それらとは異なった性格の施設となろうし、道01にほぼ並行した運用を考えねばならない。なお、大型土坑01、03 からは、凝灰岩質の「仕上げ砥」の半欠品も出土している。

計測値は以下である。

大型土坑01　N－71°－W　362 ×258 ×56（長軸×短軸×深さ、単位cm、以下同じ）

大型土坑02　――――――　230 ×－　× 8

大型土坑03　N－26°－E　286 ×200 ×17

（検出面ではいずれも300cmをこえる）

6．竪穴状遺構

D－2ポイント東側で大型土坑01に主体部分を大きく掘削されて竪穴状遺構01、02 の2基が検出される。この2基は重複する南西コーナーも土壙墓04に切られて、その関係は不明となるが、竪穴状遺構01が北壁でも土壙墓03に切られるなどして、方形周溝墓廃絶後、もっとも先行して構築された遺構である可能性がたかい。

構造は長方形が意図されるがはっきりせず、床面も壁から緩やかに下る「舟底」状で「掘り方」は認められないが、混スコリア土による「硬化面（貼り床？）」もあり、使用頻度のたかさがうかがえるとともに、空間利用を目的とした竪穴周囲の小坑からなる「上屋構造」が予想される。

こうした類似遺構は月の輪上遺跡（注）で、12世紀末葉の渥美、常滑窯系陶器片を伴って検出され、それは数基の掘立柱建物跡とともにある種の居住領域を備えていた。なお、そこでも円形土壙墓群が重複することは言うまでもない。本遺跡ではそうした居住領域は看取されないが、重複して検出される遺構の有り方と、運用時期に幅のない遺構の連続には何らかの因果関係を考えねばならないし、また、方形周溝墓北溝に一致してなる「棟向」は道01、02 の設置同様に、そこに方形の「高まり」が存在していた故か、方形周溝墓の構造論議にかかわる中世遺構の有り方が興味深い。

計測値は以下である。

竪穴状遺構01　N－18°－E　――×360×23（長軸×短軸×深さ、単位cm、以下同じ）

竪穴状遺構02　N－70°－W　――×311×30（長軸は500cm程が予想される。）

月の輪上竪穴10　N－6°－W　613×432×40

注．富士宮市教育委員会　1981『月の輪遺跡群Ⅱ』　（馬飼野孟雄）

Ⅳ．竪穴住居跡

竪穴住居跡01

調査区の西隅、Ｄ－１グリッドに検出される。それは方形周溝墓の中央部から北西に位置して、その埋土は大沢ラピリ層（スコリア）から褐色系土層が拳大から拇指大のブロック状で黒色系土層と攪拌されて充填されており、人為的に一気に埋められた状況が観察される。これが方形周溝墓の黄褐色ローム質土層まで達する溝底の掘削土であることは確かで、わずか１片の土器片しか出土しない事実が住居跡内の「片付け」を意味していれば、方形周溝墓造墓に際して「立ち退き」を余儀無くされたものであろう（注１）。

規模（床面で計測、以下同じ）は445×380㎝、床面積16.9㎡を測り、若干の胴張り隅丸長方形を呈して、棟向きはＮ－25°－Ｅでほぼ屋根筋に平行して、したがって北壁が深く60㎝、南壁が45㎝を検出面より測る。床面の構造は通例の如く、混スコリア土をもって５～15㎝ほどの厚さで「貼り床」が施されるが、「掘り方」には規制がみられずに凸凹で、むしろ中央部分が窪む（注２）。

柱穴は前列２坑が60～65㎝ほどの略方形で、しかも坑底から外方に斜めに二段掘りされて40㎝と深くなり特異で、後列２坑も径60㎝ほどの円、方の中間形で、35㎝前後の深さを測って、一様に大きく深い。柱間は190×240㎝（東西×南北）を測る。また、梯子穴が柱穴同様の規模で台形状の掘り方の底辺を壁側（壁より60㎝）にむけて穿たれ、さらに後列西柱穴と西壁間に径65㎝で、若干北側へ深く「椀」状に穿たれた小坑をみるが、これが、床面より穿たれたものかは判断できないでいる。

炉は中央北寄り（奥壁より200㎝）に70×65㎝の略円形で10㎝ほどの浅い「皿」状の掘り方をもって、それに50×30㎝、厚さ6㎝ほどの範囲で硬質の焼土が充満してなり、それを入口側より押さえ込むようにして40×15×10㎝を測る角礫が「炉石」として使用されている。他に薄く密度のない焼土が東壁寄りに60×30㎝ほどの範囲で、床面より数㎝浮いて散在するが、攪拌土中で埋め戻しの際の紛れ込みの可能性がつよい。

床面には他に前列東柱穴の内側に接して45×30㎝ほどの偏平礫が「台石」として設置され、梯子穴と南壁の狭い空間には50×30㎝の長円形で、深さ10㎝ほどの「椀」状に窪む小坑が穿たれ、それには径20㎝ほどの偏平円礫と15㎝ほどの「三角柱」状の小礫が補填されている。

そして、そこから東へ１メートルほどした、一般には「入口右側部」と称される空間に、径35×30㎝、深さ10㎝ほどの「椀」状の掘り方に、20×７㎝、厚さ３㎝ほどの「板」状の小礫を東側におき、頸部以上を「冠」状に残す甕（図－９、№１）の口縁部を下向きにあて、頸部の粘土帯が10㎝ほど欠ける部分を西側にむけて低く内傾させ、埋設している。いわゆる、土器の「埋設転用（注３）」で、「冠」状の空洞が必要とした「もの」の「収納、安置」を目的とした施設であることは確かで、頸部の割口の磨耗は使用頻度のたかさをうかがわせ、自ずから日常生活にかかわる度合のたかさをもあらわしている。

従来およそこの部分は「貯蔵穴」の有無が問われる空間であり、また、最近では南関東を中心とした事象から、ここに小礫や褐色土で築かれる台状の遺構の存在を、甑や手捏ねなどの非日常

的土器の出土と相俟って「祭壇状遺構（注４）」の可能性を説く向きもある。それに従えば、東南隅の壁際にへばり着く黄褐色砂質ブロック土による「台」状の施設は重要な意味をもち、さらに貯蔵穴の有り方も再考を促すならば、梯子下の空間や、北西隅の壁際の小坑にも注意がはらわれる。

竪穴住居跡02

調査区中央西寄り、Ｄ－３、４ポイント間に狭まって検出される。それは方形周溝墓東溝に西壁を２メートル弱で接近して並行に位置し、さらに北溝の延長線上に北壁の「辺」をあわせるなど、本住居跡の構築に際して、方形周溝墓の存在がかなり意識された位置関係をもってなる。また西壁（方形周溝墓東溝）に沿って中世に構築される道01が縦走して、壁上部から若干の床面が削取され、それに数基の中世土壙墓が埋土から床面にかけて掘削されるが掘り方まで達することなく、全体の形状は損なっていない。

規模は 881×823cm、床面積72.5㎡を測る大型住居跡で、形状は曲線を感ずることなく正方形にちかく、棟向きはＮ－27°－Ｅで竪穴住居跡01と同様に尾根筋に平行する。壁は西側の一部が前述の道01に削取されるものの、北東側が深く50cm、それから40～30cmほどで残存していき保存の状況は良好である。掘り方は中央部がたかくて外縁部にむかい深く掘り込められた、月の輪遺跡群掘り方分類Ａ類に属し、それに40～200cmを測る大小の柱穴、貯蔵穴などに判断されない浅い不整のいわゆる広義のピットが11穴認められて凸凹が著しい。床面は混スコリア土をもって中央部で浅く２～数cm、周縁が15cm前後から、南壁側に20cmと厚くなって「貼り床」がされる。また、壁際には幅20cm前後で周溝が巡り、北壁から西壁にかけて掘り方より10cmほどに深く掘り込まれて、東壁から南壁に浅くなっていき、南壁ではほとんどが残らないでいる。

柱穴は後列西柱穴が 130cmほどの掘り方（二段掘り上面）と一辺70cmの略方形の掘り方をもって大きく、東列柱穴も60～80cmの歪んだ上部掘り方と、前列西柱穴と同様の一辺45～50cmの略方形の掘り方が穿たれる。それらは一様に深く、前列西柱穴が60cm、他は80～ 100cmにちかい。柱間は後列柱間が 440cm、残り３辺が 490cmで、正面より「台形」状になる。なお、それぞれの柱穴には密度のない黒色粗粒土が径25～30cmの「円柱」状となって確認され、それは人為的な撤去のない自然風化した「柱痕」と判断され、また、坑底には径15～20cmで円形の「硬化面」の形成もみる。さらに、前列西柱穴の底面には胴部を欠いて「坏」状とした壺底部（図－９、No５）が安置され、建築儀礼に関する習俗の有り方も問われる。

炉は中央北寄り（奥壁より 330cm）に97×65cmの長円形で、25cmの深さの底面が平らな掘り方をもって、入口側に38×18×16cmの「三角柱」状の角礫を「炉石」として使用している。その前面には径75cmで深さ6cmの浅い「皿」状の掘り方も付されており、この両者をもって炉の施設とすべきか、また、これらの埋土には焼土の混入がなく、これを使用頻度の多少とするか、それとも１メートルほどした前庭部に75×25cmで細長く不整にひろがる密度のない焼土が、炉の「片付け」を意味するものか、判断できないでいる。月の輪平遺跡第81号住居跡では炉石前面に灰が蓄

積されている（注５）。

梯子穴は南壁より100cmほどで中央より東柱穴側に若干ずれて、径45cmの略円形で深さ30cmに穿たれ、また、その東側、いわゆる「入口右側部」から梯子下にちかい部分の南壁に接して、規模110×70cmの若干歪んだ隅丸長方形で、深さ31cmに「箱」状に穿たれた貯蔵穴が設置されるなど、本住居跡の基本的構造は何ら一般的な住居跡と変ることない。

しかし、床面全域に人為的な破壊を受けた土器の「散らばり様」は尋常ではないし、しかも、その大半が外来系土器で占められていたり（第Ⅶ章６項、竪穴住居跡02の遺物出土状況、図－14参照）、また、逸速く方形化された住居跡形状と、70㎡を超える床面積は近隣では沼津市大廓遺跡Ｂ住居跡（920×870cm）をみる以外（注６）、他に追随はなく（注７）、この住居跡の特異性を十分に物語る。

こうした、いわゆる「大型住居跡」が単なる「すまい」ではなく、集落のなかで特殊な役割りをもって（注８）、つまり居住空間をはるかに超えた床面積をもつ現象は、そこが居住者以外の多数の人員が集まり得る場所であり、共同体間の交流の場であるという解釈を重視して、その性格は対内的機能と対外的機能を果す二重構造をもち、その機能を主宰する住居（注９）とすれば、本住居跡の有り方は、そうした集落における機能を墓域内に移行していき、墓前でその機能を発揮し、その行為の実施、いいかえれば『祭祀』の挙行を目的としたものであり、前方後方型周溝墓や方形周溝墓の造墓と表裏一体の行動であったことはいうまでもないであろう。

注１．富士宮市の過去の調査で知られる200棟を下らない弥生後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡や、そのうち117棟が少なくとも６期の変遷をくり返す月の輪平遺跡の集落景観を逆転させてしまうような集落改造でも「埋め立て」される例はなく、おそらく竪穴住居跡01の「立ち退き」だけに止まらず、その属する「単位集団」そのものまで移動させているのであろう。

注２．植松章八1981「Ⅲ.住居址床面の二重構造について」『月の輪遺跡群』富士宮市教育委員会
それによれば、竪穴住居跡の床面構造について以下に分類されている。

Ａ類－床面プランの外縁部に巾70～80cm程の周濠状掘り込みをもって中央部を方台状に高く残す。

Ｂ類－床面プランの外縁部に巾30～50cm程に平坦を残して、その内側よりＡ類同様の掘り込みと方台状のたかまりを残す。

Ｃ類－床面プラン全域を舟底状、ないしは平坦な掘り込みをもつ。

注３．桐生直彦1989「住居址間土器接合資料の捉え方」『土曜考古』第13号

注４．小倉均1990「弥生時代から古墳時代にかけてみられる祭壇状遺構の研究」『埼玉考古』第27号

注５．富士宮市教育委員会1981『月の輪遺跡群』

注６．小野真一、笹津備洋1969「沼津市大廓発見の住居址と土器」『歴史科学』20東京歴史科学会

注７．床面積が50㎡内外の大型住居跡は月の輪平遺跡、沼津市藤井原、同目黒身遺跡に認められ、そのうち月の輪平遺跡では、大型住居跡１棟と５～６棟の一般的な住居跡から

なる単位集団が6期の変遷をくり返えすことが知れ、また、住居跡形状の方形化が計られるのは大型住居跡の消滅後、住居跡の均一化現象に伴って、月の輪平遺跡の最終段階時である。

馬飼野行雄1981「Ⅱ.月の輪平遺跡の集落構成」『月の輪遺跡群』富士宮市教育委員会

沼津市教育委員会1970『目黒身』

1978『藤井原遺跡発掘調査報告書Ⅰ（遺構）』

注8．石野博信1990『日本原始、古代住居の研究』吉川弘文館

注9．小久保徹1977「弥生時代の大形住居について」『埼玉考古』第17号

（馬飼野行雄）

Ⅴ．方形周溝墓

調査区の西隅、C・D・E－1・2・3グリッドにまたがって検出され、西側周溝のほぼ一辺とその肩部を調査区外におく。それは竪穴住居跡01を中央から北西にかけて重複するが、これを立ち退かせて、周溝の掘削土をもって一気に埋め戻している（竪穴住居跡01参照）。また、東側には2メートルほどに接して竪穴住居跡02が並行し、その北壁は周溝の延長線上に合わせられて、その構築に本墓の存在がかなり意識された位置関係をもってなる（竪穴住居跡02参照）。そして、なお、本墓の周溝内中層と竪穴住居跡02床面出土の土器片が接合関係にあり（後述）、この3基は竪穴住居跡01→方形周溝墓→竪穴住居跡02の変遷がたどれる。

全体像は北西側一帯を欠いて不明部分も多いが、北側周溝西端拡張部で「屈曲部（コーナー）」を確認して、若干、東西幅の短かい「方形部」が予想され、主軸をN－33°－Eにとる、直線のはっきりした、めりはりのある1,320cm×（≒1,250cm、以下、法量は確認面値）の略方形が描かれる。この方形部は確認面の第2層大沢ラピリ層以上をすでに削平されて、「盛土」、「主体部」の追求は不能となるが、方形部に重複して穿たれる「中世土壙墓」の壙底が大沢ラピリ層内に止まり、自然堆積面（遺構外）のそれが、大沢ラピリ層を貫いて、第3層黒褐色土層から第4層茶褐色土層まで達する事実をみると、その時にはある程度の「たかさ」を保っていたことが知れる。

周溝はおそらく全周して、「薬研堀」状に鋭く深く、「角」をはっきりさせて、黄褐色ローム層まで掘削される。とくに内壁の傾斜は70°強から垂直にちかく、外壁の一部緩慢な「ライン」とは比較にならない。以下、周溝細部の観察を進めるが、主軸方位の東側へのずれに伴って各辺の呼称に途惑い、ここからは便宜上、主軸に合わせた方位をもって、上辺から「北溝」、以下、側辺にまわって「東溝」、その屈曲部を「北東屈曲部」等と、他の南西各辺も同様に呼称していく。

南溝は内壁がとくに直線的で、東西両端の立ち上がりは垂直にちかく、比較的、角度をもつ外壁とつくる「逆台形」状の断面は鋭い。西端よりそのまま進んで中央付近に至り、幅240cm（以下、上幅を指す）、下幅140cm、深さ100cmほどを測って、弱く脹らんで「舟底」状となり、南東屈曲部手前で幅170cm、深さ80cmに狭まる。

なお、本墓より出土する遺物は全て土器で、南溝中央付近の中層以上に一定の集中をみるが、い

ずれも小破片で散在し、一括は判断されない。土器片はそれから南東屈曲部にむけて除々に点数を減らし、東溝、北溝ではまったく目立たなくなる。

東溝にまわり込んだ内壁は2メートルほどして内側に垂直ちかくに抉られ、その後も緩い蛇行をくり返しながら北東屈曲部手前2メートルで再度、抉られて外反する。このため、両端が弱く突出して特徴となるが、いずれにしても南北両辺の直線的な「ライン」とは比較にならないほどの違和をもつ。外壁はさらに様々で、南東屈曲部では溝底より10数cmたかく、幅70cmで4メートルにわたって「ソーセージ」状の張り出しが付され、ここで幅を250cmに拡げる。これは周溝下層の堆積後におそらく「楕円」状に拡張されて、その中央に100×70cm、深さ25cmほどの隅丸長方形土壙が方形部の頂点に対応して穿たれたもので、その平坦面に出土する小型高坏、及び手焙(てあぶり)形土器（図－11、No44）の破片が、竪穴住居跡02床面出土の同破片と接合関係にあるから、本墓造墓後に係わる祭祀のあり方も問われる。この後、東溝は幅を200cmにもどして北上し、中央に至って「構内土壙」2基を縦列させる（後述）。ここでも外壁は外側に脹らんで、その中段に弱い平坦面を作り出し、除々に狭まって北東屈曲部手前で下場を溝底に合わせる。それから内壁と並行して突出気味に北溝へまわり込み、ここで溝底がもっとも高まる。したがって、東溝ではここから地形なりに下って溝内土壙付近で深さ60cm、それを過ぎてから「段」状に掘削されて80cmに深くなり、南溝に連続して安定していく。

北東屈曲部から北溝中央付近までは中世遺構群に重複されて、周溝上面を北溝側で50cm、屈曲部側で20～30cmほどを欠く。しかし、それが直線的であったことは確かで、中央付近から西端にかけて幅180cm、下幅70cm、深さ120cmで作る「V」字状にもっとも近い「逆台形」状の断面は深くて鋭い。溝底は屈曲部手前の最高地よりするすると下り中央付近で「舟底」状となり、その西側の弱い段をもって北西屈曲部より下る傾斜を止めて、そこにも弱い「舟底」状の底面を連続させる。

以上の周溝の掘削土が方形部に盛られたであろうことは、黒色系スコリア含有土に黄色系ローム質土が攪拌されて方形部側から流入している土層観察からも明らかで、これを単純に方形部に均すとすれば（注1）、

周溝｛(上幅＋下幅）×深÷2｝×長さ＝方形部（縦×横）×　高さ　（確認面値、単位m）

｛(2.0＋1.1）×1.0÷2｝×56.0＝（13.2×13.0）×χ

86.8＝171.6×0.506

で、およそ50cmの高さ（χ）が得られ、竪穴住居跡01の埋め土（8.5m³）を引くとそれより－4cmになるが、それでも45cm以上の盛土は想定されて（注2）、構築時の表土を20cmとすれば、溝底より身丈ほどの「台」状の方形部が存在していたことになる（注3）。

溝内土壙

溝内土壙は東溝底面が中央南寄りから北溝にむけて「台」状にたかまった部分に、中央側から01、それから50cmほど北側に02が縦列して確認される。なお、両壙とも遺物の出土はない。

溝内土壙01は247×105cmを測る、北壁が若干、角張った隅丸長方形で、西壁は周溝内壁から直

接に下り、東壁は周溝外壁中段の弱い平坦面からほぼ垂直に30cmの深さで穿たれる。「舟底」状の壙底の中央両側には50cmほど離れて、内壁側に30×20cm、深さ20cm、外壁側に20×18cm、深さ30cmの1対の小坑をみる。土層観察すると、壙底より黄褐色系ブロック土が少量の黒色系粗粒土を混じえて不規則な互層をなし、土壙上面で黄褐色ブロック土の単一層が周溝外壁の弱い平坦面からこれを覆う。この上層には一連の周溝中層に堆積する栗色ブロックを混じえたスコリア混入黒褐色土をみるから、本壙が周溝下層の堆積後に構築されたことが知れ、また、その上層に再度、「帯」状に堆積する黄褐色ブロック土の互層は隣接する溝内土壙02の掘削土であることも予想される。

溝内土壙02は194×83cmを測る「小判」形で深さ25cmほどの「舟底」状の壙底をもつ。北壁に地山礫の露出をみて、中央付近には小礫2個が底面より若干浮いている。

この溝内土壙02の発見は周溝精査の段階で、土層観察はされないが、同壙01の状況をもってすれば、方形周溝墓→溝内土壙01→溝内土壙02がある時間差をもって順次、構築された可能性も指摘され、南東屈曲部の掘削行為（前述）とともに、方形周溝墓造墓以後に連綿と続く葬送儀礼や祭祀行為のあり方の一端を表出しているのかも知れない。

注1．周溝は「台形」に各溝を平均して、その容量を方形部に「四角柱」として盛っただけである。その計算方法については他に下記の2者によっても試みられている。

注2．伊藤敏行1986・1988「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究」Ⅰ・Ⅱ『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅳ・Ⅵ

「方形周溝墓の盛土は上述のように50cm程度のものであった可能性が強い。しかも全ての土を方台部へ盛ったとは限らないので、もっと低墳丘だったかも知れない。盛土が周溝土量でまかないきれないほどであったならば他の地点より土を運んできて盛るという行為が加わる。この場合は掘った土を単に積むというだけではなく、より進んだ行 為として理解されねばならない。そこにはあきらかに墓としての質的な飛躍が存在する。」

注3．一瀬和夫1985「方形周溝墓・方形台状墓そして古墳」『末永先生米壽記念獻呈論文集』

「⑭周溝底より墳丘頂の比高が人間の上半身の範囲の0.5～2.0メートルのものが多いことも、横積みの傍証となり、この土砂を掘削し、積み上げやすい範囲が低墳丘の一つの基準となりうるものと考えられる。」

（馬飼野行雄）

Ⅵ．前方後方型周溝墓

調査区の東半分、B～E－5～7グリッドのおよそ900㎡に前方部先端の周溝外壁のごく一部を除いてほぼ全形が確認される。西側に12メートル離れて竪穴住居跡02をみるが、北、東側とも15メートルほどの調査範囲には遺構がなく、完全に独立している。東側はそこで5メートルほどの比高をもって沖積湿地帯に下り、西側は方形周溝墓より25メートル先で弓沢川支流の滝沢川に没する。大きく言えば、富士山頂より「樹根」状に下ってきた丘陵が沖積地をむかえて、幅が100メートルほどに狭まった「三角形」状の頂点付近に、本墓、竪穴住居跡02、方形周溝墓の3基

が結果的に並列していたことになる。したがって、尾根筋に合わせて構築される本墓は、その主軸を自ずから富士山頂にむけ、N－40°－Eと磁北から大きくずれる。

また、この3基は本墓の周溝内中層出土の高坏破片が、方形周溝墓例と同様に竪穴住居跡02床面出土の同破片と接合関係にあり（図－18）、相前後して造墓され、また並存もしたであろう両墓に対して、竪穴住居跡02が『祭祀』の執行を担っていたであろうことはすでに指摘されている。

前方後方型周溝墓＝（並存可）＝方形周溝墓→竪穴住居跡02

規模は全長2,620㎝（以下、法量は確認面値）、後方部（長1,780㎝、幅1,630㎝）、前方部（長840㎝、くびれ部幅480㎝、先端幅650㎝）を測り、主軸にそって若干長い方形と台形で描出される「前方後方型」の輪郭は周溝の鋭角的な掘削によってはっきりと、めりはりをもってなり、その機械的なラインは「築造に際して、周溝の内側を規準にして周溝を掘り込んだ結果生じたものであろう（注1）。」とされる。したがって、外壁は墓形に相似しながらも丸味を帯びたり、伸縮したりするが、視感を乱すまでには至らず、あくまでも整然としている。以下、周溝細部の観察を進めるが、前述するように主軸方位が東側へ大きくずれるため、その呼称に途惑い、便宜上、方形周溝墓同様に主軸に合わせた上辺を「北溝」、側辺を「東溝」、その屈曲部を「北東屈曲部」等と呼称していきたい。

先ず、前方部の周溝は浅く狭いことを特徴とし、先端部西側が幅130㎝（以下、上幅を指す）ともっとも狭く、ここで深さ60㎝の弱い「舟底」状を呈する。そこから幅を220㎝に拡げて南東屈曲部へまわり込むが、地形の傾斜がきつくなり、外壁と溝底の比高が10～20㎝となってひろく不鮮明になる。―縄文中期包含層である第4層茶褐色土層が露呈し、打製石斧の露出も見る。―しかし、内壁沿いには深さ40㎝を測る、充分な周溝が巡って、いわゆる「通路」、「ブリッヂ」等による断絶はない。が、この部分、つまり「前方部左屈曲部（向って右側）」に通路をもつ例が北関東地方を中心に目立ったり（注2）、本墓ではその溝底の高まった平坦面より数㎝浮いて高坏の坏部2個体（図－12）が並べられたりする事実もあり、特異な位置関係として注目しておきたい。

それから周溝は400㎝でもっともひろく、地形の傾斜に応じながら、外壁は相変らずぼやけ気味に進み、後方部南東屈曲部（以下、後方部を省く）で、また、溝底との比高をなくす。反面、内壁はくびれ部で「「」にふられ、－したがって、後方部南側両頂点は直角をとらず、およそ100°に開く－、その淵は90㎝に深く鋭角的に掘削され、その肩部に前述の竪穴住居跡02床面出土の高坏破片と接合関係をもつ同破片の出土をみる。なお、ここから後、後方部を巡る周溝は黄褐色ローム質土層から古富士泥流上部層まで深く及ぶ。

南東屈曲部は方形周溝墓の「墳丘の対角線上となる四隅の掘削が不充分なものが多い（注3）」ように浅い。それから東溝に至って深度を70㎝に「箱」状となってほとんど平行に進み、中央付近から外壁下段が幅1メートル、長さ7メートルにわたって張り出され、北東屈曲部で溝底と同化する。ここが深さ40㎝となって、溝内の最高海抜点となるが、この一帯から前方部南東

側にかけて地形がたかく、それ故に開墾、耕作が深く及んで確認面自体が下るため、その深度が当初の数値よりかなり減らされていることを付記しておく。遺物は中央張り出し手前の中層内に底部を穿孔されたヒサゴ壺が破片となって2メートル四方に散在して出土する（図－12、No65）。

北溝は屈曲してすぐ、内壁肩部を3メートルほど根菜栽培によって攪乱されるが、あとはきれいに緩く内湾して、中央東寄りで幅330cmに弱く孤状に脹らむ外壁と作る平面形はおよそ「舟」形となる。溝底は地形に沿って除々に下り、北西屈曲部で深さ80cmとなり、中央付近には古富士泥流扇状地形の礫層が帯状に露呈して、これが不透水層であるため、降雨後には湧水をみる。そして中央西寄りの中層には『礫床』が築かれる（後述）。

北西屈曲部で幅を200cmに狭めた周溝は西溝に至ると幅も深さもますます拡げて、南西屈曲部手前で幅400cm、下幅240cm、深さ120cmを測り、一旦、内湾気味に進む内壁の鋭く垂直にちかい立ち上がりと、それに追随する外壁よりなる「逆台形」状の断面は圧巻である。この中央底面ちかくより高杯脚部（図－12、No61）が、屈曲部中層より胴部穿孔の小壷（図－12、No60）が口縁部を欠いて出土する。

それから、南西屈曲部で例の如く、幅300cmに狭まり、外壁下段の乱れから溝底も不安定になり、くびれ部外壁中段にはっきりした「テラス」様の段も残す。それに比して内壁はまったく機械的で、くびれ部では定規をあてたような鋭角的な掘削をみせ、その淵で130cmともっとも深くなる。後は傾斜も鈍くなり、幅も狭く浅くなって前方部先端に達して、これで一周する。

この周溝によって形作られる前方後方型周溝墓の「主体部」、「盛土」等の内部施設は前述するように頻繁な開墾事業によって土砂の移動が著しく、追求不能で、とくに後方部は高所にあって地境いを段切りされたり、第2層大沢ラピリ層はもとより、第3層黒褐色土層から第4層茶褐色土層までも削取され、おそらく旧表土からも30～40cmは減されよう。反面、前方部では第2層大沢ラピリ層の上面に同層の攪拌土が盛られる部分もあり、これらの状況を加味して、本墓に周溝の掘削土量分を大まかに均してみれば、

後方部周溝 {(上幅＋下幅)×深さ÷2}×長さ＝後方部（縦×横）×高さ（確認面値、単位m）

{(3.5＋2.5) ×0.9÷2} ×66.0 ＝(17.8×16.3) ×χ

178.2 ＝290.1×0.614

前方部周溝 {(上幅＋下幅)×深さ÷2}×長さ＝前方部{(くびれ部幅＋先端部幅)×長さ÷2}×高さ

{(2.5＋1.5) ×0.7÷2} ×23.0 ＝ {(4.8＋6.5) ×8.4÷2} ×χ

27.6＝47.5×0.581

で、後方部の盛土高（χ≒61cm）に対して、前方部が対等ちかい盛土高（χ≒58cm）を得るには現況の周溝の掘削土量で賄えることが知れる。とすれば、「図化された平面形」に盛土することを目的に周溝の掘削が行われた、とするのが妥当で、その盛土量に応じた掘削溝の広狭、深浅が「周溝」として描出された結果（注4）と理解しておきたい。

溝内礫床（図－７）

前方後方型周溝墓の後方部中心点よりおよそ磁北にむいた、北溝西側四半分、つまり屈曲部より３メートルほど東手前に周溝に沿って主軸をＮ－50°－Ｗにとり、280×110cmの規模を測る「礫床」をみる。それは周溝の中層に堆積するスコリア粒子の混入の著しい暗褐色土層を溝底より30cmの高さまで掘り窪めて、(350)×120cmの「舟底」状の掘り方を有し、周溝底面に露呈する古富士泥流上部に扇状地形を形成する礫群よりはるかに精選された、20～45cmの人頭大を一回り超えた丸味を帯びる偏平角礫で、先ず、弱い湾曲を呈するように床面を組んだ後、その度合に偏平面を合わせるようにして側石を置き、それをもって「割竹」様の礫床を構築している。覆土のスコリア混入暗褐色土中には少量の炭化粒の混在が認められるが遺物は皆無で、構築時期を判断されないが、本墓との有機的関係を断つまでの時間幅は考えられずに、おそらく、本墓周溝内中層出土土器をもって、竪穴住居跡02との関係を問われることになろう。

注１．須田勉1974『東間部多古墳群－上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ－』
早稲田大学出版部

注２．上総国分寺台遺跡調査団1974『東間部多古墳群』
同　　1975『諏訪台古墳群調査概要』
高崎市教育委員会1978『鈴ノ宮遺跡』
(財）千葉県文化財センター1978『佐倉市飯合作遺跡』
群馬県教育委員会1980『下郷』

注３．一瀬和夫1985「方形周溝墓・方形台状墓そして古墳」『末永先生米壽記念獻呈論文集』

注４．同上
『方形周溝墓というものは、その初期から周囲より一段高い「壇」的なまたは台状の墳丘というものに区画性の意義を見い出し、その区画内の上部平坦面というものに執着したと考えられる。（中略）その周溝という機能はそれに付随したものであったとすることができる。』

付、前方後方型周溝墓の企画（図－５）

「尋≒160cm」の使用のもとに（注）、主軸長16尋、後方部幅10尋、前方部先端幅４尋の基本設定から、後方部交点を頂点に前方部先端とつくる三角形側辺に、後方部側辺長11尋を「かね」に振り、くびれ部を作出する過程が推測される。また、方形周溝墓は８×８尋、竪穴住居跡02は５×５尋（柱間３尋）となる。

注．石部正志他1978「前方後円墳築造企画の基準と単位」『考古学ジャーナル６』No150
ニューサイエンス社

（馬飼野行雄）

Ⅶ．土　器

器種構成で前様式と大きな違いが認められる丸ヶ谷戸遺跡の土器群は、時代的な転換期に位置づけられる。それには「墓」という遺跡の特殊性を十分考慮しなければならないが、時間的な転換期の土器群として「様式」を成立しうるものと考えられる。一見してわかるように、各形式の系譜に地理的な差がみられる土器（外来系土器）の多さは丸ヶ谷戸遺跡の大きな特徴と言える。弥生時代後期の系譜を引く在来系土器と外来系土器の融合形態を理解することが丸ヶ谷戸遺跡の復原につながり、古墳時代初頭期のあり方の解明につながる。

２つの系統の存在は、器種構成に多様性を生み出し、形式的な細分を可能にする。器種としては、壺、甕、高坏、小型高坏、鉢、小型土器、手焙形土器が存在する。それぞれは更に器形として細分され多種類の器種を構成させ、弥生時代とは大きく異なる組成を示す。この器種構成上の大きな変化は、社会的な変化を反映させたものである。

１．弥生時代Ⅳ－４様式の様相

丸ヶ谷戸遺跡（大廓式土器（古）段階）の直前の状況を概観し、その相違点を浮き彫りにして見ようと思う（注１）。

Ⅳ－４様式の良好な資料は、沼津市北神馬土手遺跡１号住居址、滝戸遺跡第Ⅴ次調査13号住居址（注２）、月の輪上遺跡（Ｂ）溝状遺構20、同（Ａ）溝状遺跡01、沼津市二本松遺跡第１号方形周溝墓、同豆生田遺跡23号住居址などがあげられる。

この段階の器種構成を月の輪遺跡群の土器分類（表－１）（注８）に即して捉えてみると、構成を示す器種、器形は、大型壺Ｂ、壺Ｂａ、壺Ｃ、壺Ｄａ、壺Ｅａ、壺Ｅｃ、壺Ｅｄ、壺Ｆ、広頸壺Ｄ、無頸壺Ａ、無頸壺Ｂ、台付甕Ｃ、台付甕Ｄｂ、平底甕Ｃ、平底甕Ｄ、鉢形高坏Ａ、鉢形高坏Ｂ、高坏Ｄが認められ、さらに壺を中心としてこれらの影響を受けて成立した、小坩Ａ、小形土器Ｂ、小形土器Ｄなどの小形土器がその構成に加わる。この段階より明確にその出現が認められる器種は、大形壺Ｂ、壺Ｃ、壺Ｅｄ、壺Ｆ、鉢形高坏Ａ、鉢形高坏Ｂ、高坏Ｄである。

大形壺Ｂは、複合口縁をなし口径25㎝を越える壺Ｂを大形化したもので、口唇部内面に粘土帯を貼付する特徴的な器形を呈するものである。これは、静岡平野を中心として駿河湾地方で主体的に見られるもので、大廓式の段階に盛行し、奈良県纒向遺跡、長野県下蟹河原遺跡、神奈川県持田遺跡などでもその出土が認められる。形式的にはⅣ－４様式段階から大廓式段階にかけて、内面の粘土帯の断面が三角から四角へ変化し、棒状の貼付文が棒状の沈線へと変化を示す。沼津市北神馬土手遺跡１号住居址出土の大形壺は、口縁部破片ではあるが、相対的に低い頸部に４本１組で４箇所に棒状の貼付文を施し口唇部内面に断面三角形の粘土帯を貼付する大形の複合口縁が付くものである。共伴する資料は、壺Ｂ、壺Ｃ、壺Ｅｄ、台付甕Ｄｂなどで、弥生時代後期の中で形式変化を示す器形で占められ弥生時代後期の様相を呈する。大形壺Ｂは、おそ

	器種・器形	係系	備考
壺類	大型壺B（二重・複合・内面折返し）	駿河湾	
	壺　A（二重・二段）　a類（〈頸）	近畿→伊勢湾	大廓式
	b類（「頸）		
	B（二重・複合）　a類（〈頸）	駿河湾	
	b類（「頸）		壺Ａｂ類の影響
	C（二重・巾広い折返し）	不　明	大廓式
	D（二重・折り返し）　a類（〈頸）	駿河湾	○
	b類（短頸）		
	E（単純）　a類（〈頸）	駿河湾	○
	b類（短頸）		
	c類（〈頸）		
	F（単純・面とり）	駿河湾	
	小形壺A（二重・二段・胴部下位小孔）	近　畿	大廓式
	長頸壺　（単純・直）	近畿・伊勢湾	大廓式
	広頸壺D（二重・折返し）	駿河湾	
	E（単純）	駿河湾	
	無頸壺　（二重・折返し）	駿河湾	
甕類	大型台付甕　（単純・鉢形）	駿河湾	
	台付甕A（S字状）　a類（無花果形）	伊勢湾	○大廓式とその直前
	b類（球　形）		
	B（面とり）	伊勢湾？	大廓式（古）かその直前
	C（折返し）	伊勢湾	
	D（単純）　a類（無花果形）	駿河湾	○台付甕Ａａ類の影響
	b類（球　形）		
	平底甕A（S字状・凹み底）	琵琶湖	大廓式（古）かその直前
	B（つまみ上げ・凹み底）	近　畿	大廓式（古）かその直前
	C（折返し）	駿河湾	
	D（単純）	駿河湾	
	丸底甕　（内面肥厚）	近　畿	大廓式

表－1　月の輪遺跡群出土土器の分類基準　○が主体（注8）

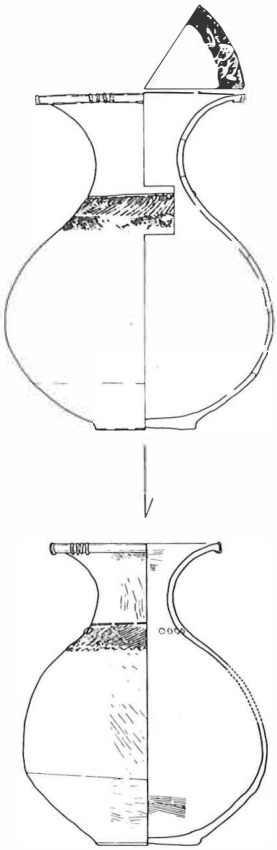
らくⅣ－4様式に出現したものと考えられ、北神馬土手遺跡1号住居址例をその段階のものとして考えている。

壺Cは、上記の沼津市北神馬土手遺跡1号住居址より良好な資料が出土しているが、その他に類例を見ないため、現状では形式的な位置づけは不可能である。ただ、北神馬土手1号住居址の器種構成よりⅣ－4様式のものとして捉えられる。

壺Ｅｃは、口縁部内面に粘土の巻き上げ時の痕跡（接合部分）に対応すると思われる弱い稜を二段形成するもので、口唇部を面取りするものが一般的である。文様は無文のものがほとん

どであるが、月の輪上遺跡溝状遺構20出土例のように口縁部内面、肩部にそれぞれ縄文が施されるものも見られる。壺Ｅｃは、この段階に出現するものであるが、駿河湾地方と隣接する東遠江地域では弥生時代後期の中で独自の形式的変化を示すものである（注３）。東遠江から搬入したものが、この段階において独自の変化を示し、在来のものと融合した形式をもつと思われるもので、赤塚の言う「受容土器」（注４）に相当するものであろう。壺Ｅｃは、この段階に一般的に出土しており、月の輪上遺跡溝状遺構20、沼津市北神馬土手遺跡１号住居址、同二本松遺跡第１号方形周溝墓、などで良好な類例が見られる。

壺Ｆは、口唇部をやや巾広に面取りすることで文様帯を形成することを特徴とする単純口縁の壺である。月の輪上遺跡溝状遺構20例のように面取り部分に棒状の貼付文を施すものなどは、弥生時代後期に出現する折り返し口縁壺（壺Ｄ）の棒状の貼付文を施すもの（注５）の系譜を引くもので胴部の形態、文様帯のあり方、文様など壺Ｄに準じる。単純口縁の壺（壺Ｅ）の中で捉えるより壺Ｄの形式的変化の中で出現したと捉えたほうが理解しやすく簡略化した壺Ｄの一形態と考えたい（第１図）。



第１図　壺Ｄから壺Ｆへの変化

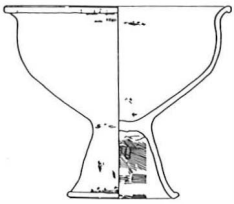
駿東地域において高坏は特徴的なあり方を示す。弥生時代中期後半に内面に凸帯をもつ高坏が函南町向原遺跡などで出土を知られているが、後期前半に入ると土器としての高坏は見られなくなる。後期前半の遺跡の相対的な数の少なさに起因している可能性も考えられるが現状では当該期の高坏の類例はないようである。弥生時代中期の櫛描文の文化圏から逸脱し、縄文の文化圏の移行する動きに呼応するものと考えられるが、相関関係など不明な点が多い。

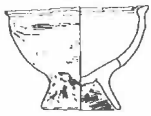
弥生時代後期後半に入ると志太平野を介在として東遠江にその故地がもとめられる鍔状口縁高坏が搬入品として散見されるようになる（注３）。管見では、韮山町山木遺跡、清水町矢崎遺跡、三島市手無遺跡、滝戸遺跡第Ⅴ次－第11号住居（注２）などで認められ、駿東地域に面的な広がりを見せている。この段階より駿河湾の媒介として、隣近する地域（東遠江地域・志太地域・富士川上流域）との交流が活発になる。遺跡の数自体も増加を示すようである。

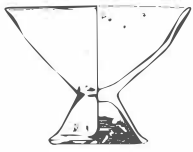
次の段階（Ⅳ－４様式）に入ると駿東地域で特徴的なあり方を示す鉢形高坏の出現を見る（第２図）。鉢形高坏Ａは折り返し口縁の鉢を付す高坏で、口径20～25cm程度のものである。鉢の部分は、その下半が直線的に外方へ開き、上半で直線気味に立ち上がるもので、口縁部で折り返し口縁を形成する。調整法は、ハケメ→ヘラミガキで壺の調整法と同一である。鉢形高坏Ｂは、口径約15cmのやや小ぶりのもので口縁部において小さな鍔状の平担面を形成する。鉢の部分はわずかに外反する底部から大きく内彎する体部へと展開するもので、台付甕の下半部

をそのまま利用した形態を示す。調整法は、鉢形高坏A同様ハケメ→ヘラミガキを行っている。鉢形高坏Aは、沼津市二本松遺跡第1号方形周溝墓、同御幸町遺跡ＳＤ－１にそれぞれ類例が認められる。また、鉢形高坏Bは、滝戸遺跡第Ⅴ次－第13号住居において認められる。

鉢形高坏Cは、鉢部が下半で直線的に開き上半部で角度を変じて外方へ開くもので、口縁部が緩かに外反するものである。また 鉢形高坏Cの脚台部端部には、折り返しを施すものもある。口径は約20㎝程度のもので沼津市御幸町遺跡ＳＤ－１、同ＳＴ－４、御殿場市永尾遺跡、韮山町山木遺跡に類例が見られる。鉢形高坏Cは、前段階に見られた鍔状口縁高坏をモデルとして在地で独自の意匠のもとに変容したものと考えられるもので、口縁部の外反や脚台部の折り返しは、鍔状口縁高坏の形態的残影として捉えられる。これも赤塚の言う「受容土器」の一つであろう（注４）。以上が駿東地域の高坏のあり方であるが、その出土数は、遺構、遺物の数の割に極めて少なく、主要な器種には成り得なかった様相を示す。


鉢形高坏A


鉢形高坏B


鉢形高坏C

第２図　高坏の分類

文様について

弥生時代後期では、その初頭部分において櫛描文を一部残すものの、縄文・横線文・Ｓ字状結節文・棒状、および円形の貼付文を主な文様として採用しそれぞれの組み合せにより施文されるのが一般的である。しかし、Ⅳ－４様式段階になるとその前段階に搬入していたであろう東遠江の壺や高坏（鍔状口縁）の文様を新たに採用し、その構成上に大きな変化が見られるようになる。特に顕著なのは、壺の文様として櫛による擬縄文が、在地の器形を呈する壺に採用されることである。その中には、同じ土器の中で縄文とクシによる擬縄文を併用するものも見られ多様な様相を示している。

甕のヘラミガキ技法

Ⅳ－４様式に特徴的な整形技法としてヘラ状工具によるミガキの技法が甕の一部に採用される。施される部位は、内面および外面の下位に限られ、ハケメ調整、ナデ調整と併用される。特に口縁部内面に施されるものが目立ち、横位のヘラミガキを丁寧に行うものが多い。ミガキの技法は、壺においては一般的であるが、甕については前段階にその系譜を辿れる技法ではない。他地域からの整形技法上の受容と扱えるべきであろう。

甕にヘラミガキの技法を採用するのは、台付甕において富士川上流域で当該期に盛行しており、甕の一形式を形成する（注６）。さらに富士川上流域（甲府盆地）に近接する諏訪地方や佐久地方に見られる平底甕を主要土器とする箱清水式土器の甕は、その整形技法としてヘラミガキを一般的に使用しており独自の状況を示している。

富士川上流域は、中山が言うように、「弥生時代後期後半期には、住吉式土器（遠江から駿河地方の後期後半の土器群と強い関連をもつ）と箱清水系土器を主体とする２つの土器文化圏が存在し、共存していたと考えられる。異なる両文化圏は、盆地において接触し、相互に交流を行っていた……」（注７）と捉えられる地域で、その関係から台付甕にヘラミガキの技法が、技法の交流として実現したものと考えられる。駿東地域に見られるそれは、富士川を媒介とした富士川上流域との土器製作技法上の交流の一端を物語っている。

弥生時代後期前半には、地域間の交流がほとんど認められなかった駿東地域も、その後期後半に入ると鍔状口縁高坏などに見られるように駿河湾や富士川を媒介とした小地域間の交流が明らかになる。その交流に基づく文化の受容は、壺Ｅｄ、鉢形高坏Ｃなどの「受容土器」を生み出すとともに、擬縄文や甕のヘラミガキ技法の採用へと繋がる。

以上がⅣ－４様式の概略である。このような状況が漸移的な形式的な変化のもと在来の土器を形作り、あくまでも弥生文化の中でそれらを物質文化として醸成させていった。このような状況のもとに成立している土器を「在来系土器」として扱い、その土器群をもつ社会を基盤として次段階に位置づけられる丸ヶ谷戸遺跡の土器群の中の「外来系土器」の概念が成り立つ。

２．器種分類

丸ヶ谷戸遺跡の出土土器を月の輪遺跡群の分類に即して形式分類する(注８)。

器種としては、壺、甕、高坏、鉢、小形土器、手焙形土器が認められる。９の台付甕以外は全体の器形を知り得るものはなく、ほとんどが破片資料である。そのため、推定に頼らざるを得ない部分が多い。そのことを前提として以下論を進めていく。当然の事ではあるが調査面積や発見遺構が限定されていることにより、当該期の形式内容を総べて網羅できるわけではない。欠落している器種の把握など様式として理解するには、各地域ごとの総合的な検討が必要であり、丸ヶ谷戸遺跡は、その一資料を呈示したにすぎない(図―９～図―13)。

甕

台付甕と平底甕が認められる。月の輪遺跡分類の、台付甕Ａ、台付甕Ｄ、に相当するものが丸ヶ谷戸遺跡でもみられる。また、新たに平底甕Ｅ、平底甕Ｆ、受口系口縁甕が確認された。

台付甕Ａ

いわゆるＳ字状口縁台付甕である。

台付甕Ｄ

単純口縁の台付甕。ゆるやかに外反する口縁部で平縁のものと刺突文を有するものが認められる。

平底甕Ｅ

平底の甕で、外面に右上りのタタキを施すもの。口縁部はおそらく「く」の字状に外反するものと思われる。

平底甕F

「く」の字状に外反する単純口縁の平底甕。胴部の最大径をその上位に持つ無花果形をしている。内面はヘラケズリによって整形されており特徴的である。

受口系口縁甕

口縁部のみの破片資料のため全体の器形は不明である。口縁部は内彎するものでその口唇部内面に不明瞭ながら面をもつものである。

壺

月の輪遺跡の分類では壺A～壺F、小形壺A、長頸壺、広頸壺D、広頸壺E、無頸壺が認められている。この内、丸ヶ谷戸遺跡では、壺A、壺B、壺D、壺E、広頸壺Eが認められ、新たに壺Gが確認された。

壺A

口縁が有段口縁をなすもの（二段口縁壺）。

壺Aは、よく知られているように頸部の形態により壺Aa類、壺Ab類に分けられる（注9）。

壺Aa

外彎しながら単純に開く形態の頸部に口縁部を付加する。

壺Ab

短く立ち上がる部分と屈折して外方に開く部分とに分けられる形態の頸部に口縁部を付加する。

壺B

口縁下位の外側に粘土帯の一部を重ね合わせて複合口縁をなすもの。

壺D

口唇部の外側に幅の狭い粘土帯をすべて重ね合わせて折り返し口縁を造るもの。

壺E

単純口縁の壺。口縁部の形態により多種に細分が可能である。丸ヶ谷戸遺跡では壺Ea類と壺Ee類の二種類が認められる。

壺Ea

緩やかに外反しながら開く口縁で、口唇部を丸く整形する。

壺Ee

単純口縁の中で口唇拡張壺と呼ばれるものである。本来は文様帯を形成するために口唇部を上下に肥厚させるものである。

壺G

単純口縁の壺の中で口縁部が内彎気味になるもので口唇部がわずかに外反するもの(ヒサゴ壺)。

広頸壺E

形式的な特徴に乏しいため器形にバラエティーが認められる。丸ヶ谷戸遺跡では、広頸壺Ea類、広頸壺Eb類がみられる。

広頸壺Ｅａ

広い頸部より短い口縁が外方へ開くもの。体部は球形をしている。

広頸壺Ｅｂ

外彎しながら広がる口縁部を有し、口唇部を丸くおさめるもの。器形は、平底甕Ｄに類似するものと思われ、互いに相関関係を有しているものと捉えられる壺。

鉢

月の輪遺跡の分類では鉢Ａ～鉢Ｄが認められている。丸ヶ谷戸遺跡では鉢Ｅ、鉢Ｆが新らたに確認された。

鉢Ｅ

無果花形の胴部に「く」の字状に外反した短い口縁部が付加されるもの。底部は凹みをもつ平底を呈する。

鉢Ｆ

内彎気味に外傾する体部をもち、口唇部で微妙に外反する。底部は小さな平底で出っ張り底を呈する。

高坏

月の輪遺跡の分類では、高坏Ａ～高坏Ｃが認められている。丸ヶ谷戸遺跡では、この中で高坏Ａの優良品の出土を見ている。また新たに高坏Ｄ、高坏Ｅ、高坏Ｆが認められた。

高坏Ａ

月の輪遺跡の分類で高坏Ａａ類とされたもので、坏部に段を形成する有段高坏（注４）である。

高坏Ｄ

内彎する坏部をもち口唇部内面をわずかに面取りする椀形高坏。口径が脚径より大きなもの。

高坏Ｅ

坏部に段を形成するもので、その上半部はやや外反気味に大きく広がる。高坏Ａに比べると坏部は浅い。

高坏Ｆ

坏部の下半部は直線的に開き、その上半部はやや内彎気味に開く。口唇部を、小さく内側に肥厚させる。

小形高坏

月の輪遺跡では小形高坏Ａ、小形高坏Ｂが認められている。高坏Ａを模倣した小形高坏Ｂは例外として、小形で脚径が口径を凌駕するものを基本とする。丸ヶ谷戸遺跡では、小型高坏Ａａ類が認められる。

小形高坏Ａａ

明確な段を坏部に形成するもので、垂直気味に内彎しながら立ち上がるものと外上方へ外反するものがある。

小坩、小形土器

丸ヶ谷戸遺跡では、小坩Bが認められる。また、新たに小形土器Fを設定する。

小坩B

胴部の最大径がその中位にあり球形をなす平底の壺。

小形土器F

受口系口縁甕の小形品で脚台部が付加される可能性がある。内彎しながら外傾する胴部から「く」の字に屈折する頸部をへて内彎気味に短く開く口縁部に展開する形態を示す。口縁部外面には、刺突文が加えられる。

手焙形土器

蔽部のみの資料のため全体の器形は不明である。蔽部は、鉢部の口径の割に器高の低いもので、その口縁部を幅広く拡張してやや凹状に面取りする。外面には刺突文を施す突帯を付す。

丸ヶ谷戸遺跡の出土土器と各器種との対応は以下の通りである。　　（　）は推定

台付甕A…16、77、78　　台付甕D…9～12、52、(71)、(74)、(86)

平底甕E…35、76、84、85　　平底甕F…33　　受口系口縁甕…63

壺Aa…(34)　　壺Ab…45、46、(34)　壺B…70、79、80　壺D…47、81、82　　壺Ea…48

壺Ee…59、(34)　　壺G…(51)、65、89　広頸壺Ea…(66)　　広頸壺Eb…1　鉢E…41

鉢F…55　　高坏A…21、53　　高坏D…25、26　　高坏E…22　　高坏F…54

小形高坏Aa…(27)、(28)、29、(88)　　小坩B…60　　小形土器F…62、87　　手焙形土器…44のほかに、手捏ね土器36、37、39、64、75や器形の不明確な32などが出土している。

3．文　様

文様（装飾）は、器種構成の変化に基づいて外来系と在来系、更に両者の融合形が存在する。文様の構成は、1種類のものと2種類以上ものが組み合わせて構成されるものが認められる。以下では、その文様の構成要素を取り上げ丸ケ谷戸遺跡における文様のパターンを具体化する（注10）。

Ⅰ縄文系

Ⅰa　羽状文

Ⅰb　斜状文

Ⅰc　結節文を付す羽状文

Ⅰd　結節文を付す斜状文

Ⅱ擬縄文系

クシ状工具による刺突文の一種で縄文的な効果を出すもの

Ⅱa　羽状文

Ⅱb　斜状文

Ⅲ線描文系

Ⅲａ　横線文

1条のものと多条のものが存在する。

Ⅲｂ　波状文

Ⅲｃ　扇状文

Ⅳ刺突文系

Ⅳａ　横線文

1条のものと多条のものが存在する。

Ⅳｂ　波線文

Ⅳｃ　刺突文

Ⅳｄ　押引刺突文

Ⅳｅ　(半截) 竹管文

Ⅳｆ　列点文

Ⅴ貼付文

Ⅴａ　円形付文

Ⅴｂ　棒状付文

Ⅵ突帯文

装飾効果を意識して粘土帯を貼付するもの

Ⅶ彩文

Ⅷ円孔

駿東地域で弥生時代後期～古墳時代初頭において頻繁に使用される文様には、上記のものが認められるが時間差によりその構成要素は大きく異なる。

在来系

在来の要素としては、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲａ、Ⅳａ、Ⅳｃ、Ⅳｅ、Ⅳｆ、Ⅴ、が明らかなものとして捉えられる。

丸ヶ谷戸遺跡の資料では、3、4、70、72、73、79、81、82、83が相当する。

3は、その文様がⅠｄ＋Ⅳｆ＋Ⅴａで構成されている。また、4はⅠｄ＋Ⅱｂ＋Ⅳａで構成される。Ⅰｄ、Ⅳａ、Ⅴａは弥生時代後期の中で普遍的に見られる主体的な文様要素である。Ⅱｂ、Ⅳｆは弥生時代後期後半において駿河湾の対岸に位置する東遠江～志太地域より駿河湾を媒介として搬入してきた文様要素であり弥生時代末期に壺の文様として顕在化している。3、4は系統の違いの見せる文様要素の融合形として捉えられるが前段階の中ですでに完成した文様構成だと思われる。

72は、Ⅴａ。73は、Ⅰｂ＋Ⅳｃ。79は、Ⅴｂ。81は、Ⅳｃ。82は、Ⅰｂ＋Ⅴａ。83は、Ⅰ＋Ⅲａをそれぞれ施す。いずれも弥生時代より継続される文様要素の組み合せである。70は、Ⅴｂの効果を有するⅣｃであるが、その出現や器形との関連など不明な点が多い。総体的にはⅤｂ

との時間差として捉えられ、Ⅴbの変容（省略化）形式として位置づけられる。丸ヶ谷戸遺跡の段階以降盛行するようである。

外来系

外来の文様要素は、その器形と整合性をもつ。そのため在来系土器に外来系の文様が施されることはない。丸ヶ谷戸遺跡で相当する資料は、21、23、27、28、29、34、41、44、56、59、62、63、65、67、87、88、89である。

21、23、56、67は高坏の脚台部にⅢa＋Ⅷが施される。27、28、88はⅢaと上方に肥厚させた脚端部にⅣcを組み合わせてさらにⅧを施す。29はⅢa＋Ⅷが施される。34、65、89は、Ⅲa＋Ⅳbで構成されるいわゆる「パレス文様」（注10）、と呼ばれる文様構成である。41は、Ⅳbが施される。44、59は、Ⅵに Ⅳcを組み合わせて施文する。63は、口縁部にⅣcを施す。62、87は口縁部にⅣcを施し体部上半にⅢaの効果を有するヨコハケを施している。両文様とも乱れが著しく63の例を含め文様としては形骸化しているが「受口文様」（注10）の意匠は留めているものと考えられる。

上記の類例の他にⅧのみが施される高坏の脚台部（24、26、30、31、58）が見られるが文様としては単純な構成のためその出現の系統はよくわからない。ただ丸ヶ谷戸遺跡段階に出現している事は確かである。そのことは、Ⅷを自生のものとするより外来系の文様要素の一要素として考えた方が妥当であることを示唆している。

4．成形と調整法

弥生時代以来の調整法としては、ナデ、ミガキ、ハケメ、（指頭による）オサエが代表的なものとして上げられる。丸ヶ谷戸遺跡では新たにケヅリ、タタキの技法が見られる。

甕のヘラミガキ技法

第1節で述べたように、富士川上流にその系譜が辿れると思われる技法で小地域間の交流が探れる一要素である甕のヘラミガキ技法は、丸ヶ谷戸遺跡出土資料の中にも認められる。平縁のもので内面にヘラミガキを施す71、74、刺突文を口唇部に施すもので内面をヘラミガキで調整する86がみられる。

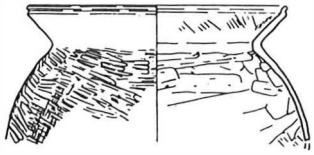
タタキ（第3図）

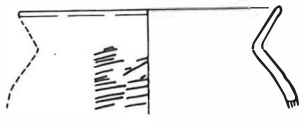
タタキの技法は、丸ケ谷戸遺跡の段階に出現する。潤井川流域において近年、同技法を施した甕の出土が散見されるようになっている。発見されているタタキにはa、b、cの3種が見られる。

a、bは搬入品に見られるもので、cは模倣品として在地で作られた製品に見られるものである。aは、タタキの条線が4本／cmのものでやや細かい。bは、その条線が2本／cmのもので密度が粗い。畿内においては、弥生時代Ⅴ期と庄内式期の間にタタキ目の平行条線に変化が表われる（注11）。Ⅴ期において2～3本／cmと粗かったものが庄内式期にはきわめて細かくなるといった変化を示すようである。aは庄内式のものであり、bはⅤ期（畿内第五様式）の

影響を受けたものであろう。そのことは、器形の面からも証明される。

cは、4本／cmのやや細かい条線からなるタタキで、右上りに施される。器面の成形はやや不完全で凹凸が目立つ。タタキ目の施し方も雑で、a、bに比べると不鮮明で浅い。明らかにa、bの模倣であろう。愛知県廻間遺跡のタタキ成形甕のタタキ目に類似するようであり、東海地方西部との関連も考えられるが、廻間遺跡の報文で述べられているように、まだその出自など不明な点が多い(注4)。





第3図　市内発見のタタキ成形甕

ケヅリ

前述のタタキのa種に伴う内面のヘラケヅリ整形に代表されるように丸ヶ谷戸遺跡の段階より調整法としてヘラケヅリが見られるようになる。それは、器形との相関関係を持ち外来系土器に限られる。33は、やや幅広のヘラケヅリが内面に施される。また、41は、幅の狭いヘラケヅリが内面の調整法として採用されその下半部に残り、その上半部をヘラケヅリ→ヘラナデの順で整形しているものである。

高坏脚台部成形の1例

棒状のものを中心に据え脚台部を成形したと思われる技法が見られる。それにより、脚台部の上位には、坏部の底部に向って細い穴が残る。出土土器の脚台部破片の中には、その穴が坏部まで貫通しているものも見られる。これは、脚台部の成形に大きく関わるもので、坏部中央に脚台部を挿入する形で接合するものと関連する。これには脚台部の上面をそのまま、坏部底面として利用しているものが多く、寺沢の言う『挿入付加法』(注12) に相当する。この技法は、脚台部を先に製作しておくことを前提としており、ある程度の乾きを経た後に坏部との接合が行われる。

脚台部は、板状の粘土の小円盤を基盤として倒立させて成形する。それは、外方へ開く脚台部を作成する段階で脚台部に中心軸を求め、さらに製作時の転倒を防ぐために植物質と思われる棒状のものを中央に立て、それを基準として成形しているものと思われる。脚台部の成形段階に貫通していた小穴については、坏部の成形時に小さな粘土魂で埋めこまれその底部を形成するようである。

この技法を採用している資料は、21、22、23、53、56、67、68、であり外来系土器に限られる。同一の技法でありながら、21、53と22といったその系譜の異なる土器にそれぞれ採用されていることは注目される。

台付甕脚台部折り返し技法

20の台付甕の脚台部のようにその内面端部に粘土帯（紐）を折り返す（貼付する）ものが見られる。S字状口縁台付甕以外の器種の技法としては特徴的である。この類例は、丸ヶ谷戸遺跡例以外にも上石敷遺跡、藤枝市稲ヶ谷遺跡12号住居址、長泉町下長窪上野遺跡第2号住居址、沼

津市雄鹿塚遺跡Aトレンチ9区などにも見られ、ある程度限定された時間幅の中で捉えられるもののようである。関東地方における脚台部折り返し技法の類例については三浦半島（神奈川県）とその対岸の安房地方（千葉県）で主体的な出土を見ている（注13)。本地域（駿河湾地方）との分布圏などの直接的な関係は不明であるが、年代的には近似したものがある。また、駿河湾地方および三浦半島・安房地方の類例を見ると法量にもバラエティーが認められ、丸ヶ谷戸遺跡例のような大型のものばかりではないようである。内面への折り返しが機能的に製作段階でどのように反映されるのか、甕部分の器形との関連も考慮して考えなければならない。さらにこれは、S字状口縁台付甕の出現以後に見られる技法なので、S字状口縁台付甕から借用した技法の可能性も考えられる。

5．土器の編年的位置

丸ヶ谷戸遺跡では、竪穴住居跡02を中心として良好な土器の出土を見ている。それらは、駿東地域において特に出土例の少なかった大廓式古段階の器種構成を具体化するものである。竪穴住居跡02から出土した土器の中で実測し得えたものは、45個体に及ぶ。竪穴住居跡02出土の土器は、ほとんどが破片資料のため全体個数は更にふえるが、器種構成の傾向は十分表現していると思われるので、実測図に掲載したものだけの各器種の比率を概算で見てみると以下のとおりになる。壺9個（20%)、台付甕13個（29%)、平底甕2個（4%)、高坏8個（18%)、小型高坏3個（7%)、鉢3個（7%)、手焙形土器1個（2%)、その他6個（13%)。前様式（弥生時代後期）と特に異なるのは、高坏、平底甕の占める比率が大幅に大きくなることや小型高坏や手焙形土器が新たにその器種構成に加わっていることである。これは、多形式に亘る外来系土器の搬入およびその模倣に起因している。

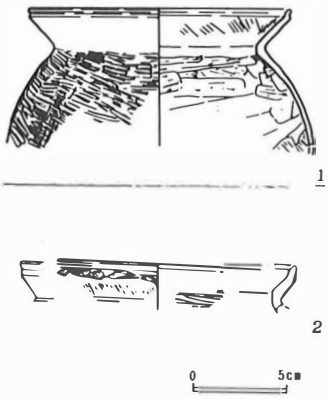
本節では、主要な器種を平底甕、壺、高坏、小形高坏、手焙型土器の順で概観し、その姿相を摑み、時空間的な位置づけを考えてみたい。

平底甕E

凹みをもつ底部のもの（平底甕B）と平底のものが存在する。丸ヶ谷戸遺跡例は、平底のもので右上りのタタキが施され内面をナデ調整する。平底甕B・Eは、畿内第五様式の系統を引くもので奈良県矢部遺跡で弥生形甕（注12）と呼ばれるものに相当し　庄内式期で庄内甕と併存することが確認されている（注12)。駿東地域において平底甕Eは、三島市中島下舞台遺跡、韮山町山木遺跡などでその類例が知られる。

平底甕Eと併存すると思われる庄内甕は 泉遺跡東トレンチ（注14）に類例が見られる（第4図－1)。この資料は、その口唇部を上に肥厚させる所謂「はねあげ口縁」の一種で、口唇部外面に横位の沈線が見られるものである。この土器の特徴を若干述べると以下のとおりになる。外面は左上りのタタキが施され、下位に縦位のハケメを加える。内面は、横位のヘラケヅリ調

整で仕上げ、器厚を薄くする。口縁部は、内外面とも横位のナデ調整で仕上げる。外面にはススが付着している。胎土は、石英、長石、金雲母を含み非常に緻密で焼成は非常に良好で色調は黄橙色を呈する。明らかに搬入品と思われるもので、庄内大和形甕（注12）に相当する。搬入品と思われる庄内甕は駿河湾地方以東で東京都亀山（あるいは飛鳥山）遺跡に類例があるのみである（注15）。



第４図　泉遺跡出土土器

平底甕Ｆ

内面ヘラケヅリ、外面ハケメ、口縁部ヨコナデの特徴的な調整を加える平底甕Ｆは、小さな平底で無花果形の胴部を呈する。口縁部は、やや「く」の字気味に丸く外反し、口唇部を丸く整形している。このような甕は、所謂「能登型」甕（注16）と呼ばれるものの影響を受けたもので、北陸系土器として捉えられる。「能登型」甕の主な分布範囲は、能登、越中、越後であり、さらに信濃の一部にまで及んでいる（注17）。器形としては、北陸地方東北部との強い関連をもったもので、石川県徳前Ｃ遺跡74～76ライン溝状遺構出土のものと類似し、白江式段階に比定される（注18）。ただ、胴部内面のヘラケヅリ整形の技法が北陸地方東北部では一般的でない点は注意される。平底甕Ｆは静岡県内でまだ類例を見ていない。

壺Ｅｅ

口唇部を下垂させて面を形成する壺Ｅｅは、頸部に突帯＋刺突文を貼付するもので特徴的である。口唇部を上下に肥厚させたり、頸部に突帯を付加する形式的要素は、伊勢湾地方で弥生時代中期より普遍的に見られる。特に壺Ｅｅに相当する口唇部を少し肥厚させる広口壺は、伊勢、三河地域で主体を占め、弥生時代後期の中で型式変化を示す（注19）。また、西遠江地域でも、量的には少ないものの弥生時代後期に型式変化を示すようである（注20）。口縁部の文様は、古い要素として櫛描文、刺突文を施すものがあるが、新しいものは頸部以下に限られ口縁部無文のものが目立つ傾向にある。

上記のように壺Ｅｅは、三河～西遠江地域にその主体を持ち、その関連のもとに模倣品として当地で製作されたものと類推される。駿河湾以東～関東地方では、パレス壺を含め頸部に突帯を貼付するものは散見されるものの、壺Ｅｅの類例は見い出せない。

壺Ｇ

所謂「ヒサゴ壺」にあたる壺Ｇは、胴部最大径がその下位に落ちるしもぶくれの体部に小さく凹む底部（51は壺Ｇの底部と思われる。）が付く器形を呈する。またその口縁部は、口唇部内面を面取りするものである。ヒサゴ壺の伊勢湾地方での型式変化を概観し壺Ｇとの関連を見てみると、形状としては、廻間５期以降に出現するもので「短頸ヒサゴ壺」に相当するものである。また、その消長は、廻間６期においてほとんど見られなくなるものらしく、限定した時間

幅で取り扱える型式と言える（注４）。尾張でのヒサゴ壺は、その文様として貝殻による連弧文や横線文を採用しているものが一部見られるものの無文のものが多いようである。丸ヶ谷戸遺跡例のようにヒサゴ壺に波線文＋横線文の組合せによる「パレス文様」を採用するものは、愛知県中狭間遺跡溝状遺構、岐阜県江東遺跡などで見られるものの伊勢湾地方では一般的でないようである。壺Ｇは駿河湾地方で、沼津市藤井原遺跡Ｄトレンチ溝状遺構、韮山町奈古谷宮原遺跡第Ⅷ方形周溝、同山木遺跡、伊東市内野町遺跡第一号住居址などで類例が見られる。また「パレス文様」が見られるものは、駿東地域に類例がなく南関東地方に多い（注21）。たとえば、神奈川県慶応義塾藤沢校地内遺跡（注22）、同三殿台遺跡104　Ａ号住居址、東京都宇津木向原遺跡４区７号住居跡、埼玉県平林寺遺跡11号住居跡に類例があり、淵源地の伊勢湾地方より多彩な文様構成を示す傾向にある。

高坏A

近年、伊勢湾地方における欠山様式～元屋敷様式の編年を考える上でその各器部の数値が統計的な変化を示すため、型式変化の基準としてよく取り上げられる器種である（注23、注24、注25）。駿東地域で、丸ヶ谷戸遺跡のように外来系土器として高坏Ａを受容しているが伊勢湾地方での型式変化を直接的にそのまま採用できない。むしろ、受容した段階が重要であり、大廓式土器の中でどのような型式変化を示したかを探るべきである。

21は53に比べて坏部の外傾が強まり、浅く大きく開く傾向を示している。また、23、56のように脚台部が外反するものや67のように脚台部が内彎する可能性をもつものが認められ、それぞれ型式差として捉えられ、相対的には、53→21・67→23、56の変化を示すようである。しかし、これがそれぞれ時間差として扱えるかどうかは、「周溝墓」という遺構の特殊性や出土地点の面的な位置などに制限され一概に決められない。また、高坏Ａの淵源地である伊勢湾地方で高坏Ａは漸移的な型式変化を示すが、高坏の坏部の深さの差や、脚台部の内彎傾向の差は、ある程度の範囲をもって共伴する（注4）。丸ヶ谷戸遺跡における高坏Ａの形式的な情報だけでは、53→21という時間差とする可能性を残すものの同一段階の型式として現状では扱うのが妥当であろう。

駿東地域で高坏Ａの出土は、上石敷遺跡Ｋ－４号竪穴住居跡、韮山町奈古谷宮原遺跡第Ⅳ号周溝で認められる。また、関東地方南部の神奈川県三殿台遺跡104　Ａ号住居跡、東京都下山遺跡環濠Ｅ区などに見られる類例も同型式として捉えられる。

高坏E

丸ヶ谷戸遺跡では、坏部に段を形成し、口縁部が外反しながら開く高坏Ｅを確認している。これは、奈良県纒向遺跡において高坏Ａ３（注26）、同矢部遺跡において高坏Ｂ４（注12）とされているもので畿内で通有の器形である。このようにその出自を畿内に求められる高坏Ｅは、愛知県廻間遺跡ＳＢ55に類例が認められるものの関東・東海地方での類例は極めて少ない。

丸ヶ谷戸遺跡出土の高坏Ｅは、纒向遺跡東田地区南溝（南部）中層に同一型式と思われるものが出土しており、寺沢編年庄内２式期あたりがあてられる。高坏Ｅは、35などの平底甕Ｅと

ともに畿内との関連を考える上で注目される。また、36の手捏ね土器は畿内系高坏の器形を模倣している可能性を持つもので、中実の円筒状の脚台部を呈している。

高坏F

第2図に見られるように駿東地域の弥生時代後期の高坏（鉢形高坏）は、口唇部をわずかに外反させることを特徴とする。高坏Fのように口縁部を内彎させるだけで椀状に成形する高坏は、弥生時代後期の中に現在その系譜を辿れない。駿東地域では、沼津市八兵衛洞遺跡B－38号住居址、長泉町下長窪上野遺跡第16住居址、沼津市尾ノ上遺跡などにその類例が知られる。これらは、丸ヶ谷戸遺跡を含む各類例の間に、それぞれ若干形態差が認められ今後、型式（形式）細分される可能性を持つものである。

弥生時代後期の中で主要器種として高坏が存在する中部高地では、椀形の高坏が普遍的に認められ、弥生時代中～後期の中で独自の型式変化を示す。高坏Fは、この中部高地の椀形高坏を源流としておそらく成立したものと思われる。それは、前述した平底甕Fの移動に同調した動きを示すもので、富士川を媒介とした佐久、諏訪地方との関係の中に搬入・摸倣が行われたものと思われる。

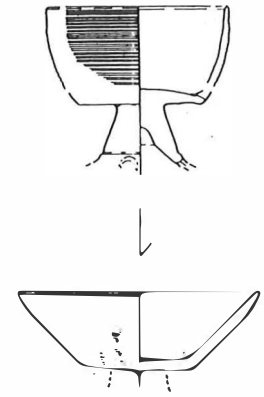
丸ヶ谷戸遺跡の高坏Fは、長野県戸坂遺跡環濠に類例が見られる（注27）。

小型高坏A a

小型高坏A aは、脚台部および坏部のそれぞれの形態にバラエティーがあり複雑な型式が成り立つ（注8）。丸ヶ谷戸遺跡出土の小型高坏A aは、坏部が垂直気味に立ち上がるもので、脚台部をその上半部でエンタシス風に内彎させながら開き、下半部で大きく外方へ開く形態を示し、上半部と下半部の間には、小さな段を作り穿孔を施すものである。これは、伊勢湾地方の影響のもとに成立したものであるが、その特徴的な脚台部の類例は、愛知県朝日遺跡、同廻間遺跡ＳＺ02、同中狭間遺跡溝状遺構に見られる。特に朝日遺跡、中狭間遺跡例は、有段の坏を形成し、連孤文、波線文、横線文、で装飾されるなど、丸ヶ谷戸遺跡のものと共通する要素が多い点は、注目される。ただ、文様の複雑さや坏部の内彎傾向は、やや中狭間遺跡例が古相であることを示し、脚台部の形状などの類似は、朝日遺跡例が丸ヶ谷戸遺跡例と同一型式であることを示している。

小型高坏Aの脚台部は、27、28のように直線的に開き、その端部を肥厚させ、文様を施すものと57のごとく外反しながら開き文様を施さないものがあり、やや複雑な様相を呈している。それは、有段の坏部と椀状の坏部との相関関係にも起因しているもので、前述のように一系統の型式変化では理解できない器形と言える。ただ、丸ヶ谷戸遺跡例は、朝日遺跡に見られるように27、28と29が同一型式で扱えそうで相関関係を見い出せる資料である。また、有段の坏部の総体的な型式変化は、丸ヶ谷戸例→月の輪上遺跡A地区第2号住居址例（第5図）の変化、つまり深く内彎傾向の強いものから外傾して浅い形状の坏部を作る形状への変化を示している。これは有段高坏の型式変化と同調するもので、伊勢湾地方と同一の変化として捉えられる。

小型高坏Aの脚台部である27、28のような横線文あるいは「パレス文様」を施す小型高坏Aの類例は、月の輪平遺跡第90号住居址、神奈川県千代南原遺跡第Ⅳ地点1号土壙に見られる。また、関東地方では、千葉県小田部古墳の出土例に代表されるように文様を施す例は多い（注28）。



第5図　小型高坏Aの変化

小型土器Fと受口系口縁甕

口縁部が内彎しながら外傾し、頸部に明瞭な屈曲を設ける受口状の口縁部をもつ甕が認められる。受口系口縁甕は、本来近江地方をその分布の主体としているものとされ、一元的に近江型甕として扱われていたが、伊勢～尾張における独自の型式変化も近江地方の関連を踏まえて検討され始めている（注4）。

駿河湾地方では、受口系口縁甕の出土が極めて少なく泉遺跡に見られる程度である（第4図－2）。また、いずれの資料とも伊勢～尾張の類例とは型式差が見られ口唇部の面取りや口縁部外面の刺突文に代表されるように形骸化したもので占められる。外来系土器として受容し、さらに変容が見られる受口系口縁甕は、その小型品（小型土器F）も認められる。小型土器Fは、おそらく台付甕になるようであり、愛知県見晴台遺跡第1次ＪＳ区出土資料をその祖形とするようである。

手焙形土器

その器形の特殊性により古くから注目された器種である（注29）。駿東地域では、小山町王子ヶ池遺跡、清水町矢崎遺跡の類例が知られている。しかし、いずれも出土状況が悪く、明確な共伴遺物や属する遺構などがなく、時間的属性やその性格など不明な点の多い資料であった。

丸ヶ谷戸遺跡例は、装飾として突帯文＋刺突文を施す点で矢崎遺跡例と類似し、岐阜県小山観音北遺跡例などとその全体の形状の上での類似点が多い。

手焙形土器は、畿内第Ⅴ様式に出現し、畿内地方を中心として庄内式期に盛行するもので、広く瀬戸内地方～関東地方までその分布を示している（注30）。丸ヶ谷戸遺跡例は、矢部遺跡における形式分類の手焙形土器Cに相当し、同遺跡の報文で述べているように、丿川鍾性のやや強いもので、伊勢湾地方以東で製作された可能性をもつものである。型式的には、寺沢編年の庄内2式（注12）段階のもので、矢部遺跡分類手焙形土器Dに相当する王子ヶ池遺跡例より古相を呈する。

手焙形土器の機能については、大阪府鷹塚山遺跡A号住居跡の出土例などから祭祀性の強いものであると指摘されている（注30）。しかし、その出土状況は、丸ヶ谷戸遺跡や愛知県廻間遺跡ＳＺ01のように周溝墓の墓前祭祀に伴うものや三重県蔵持黒田遺跡H24地区テラス状遺構や各遺跡の竪穴住居出土例のように集落内祭祀に伴うものなどが見られ多様で複雑な状況を示している。手焙形土器という器種に対する潜在的な認識は一元的なものの可能性はあるが、その使用方法は、各々の祭祀形態により多岐に亘るようである。

以上、外来系土器の中で全体の器形がある程度把握できる特徴的なものについて概略を述べてきたが、それら以外にも甕A、壺A、鉢E、鉢Fなどがそれぞれ認められる。甕A、鉢E、鉢Fは、伊勢湾地方がその故地であろうし、壺Aは、畿内を中心として第五様式以来通有のものである。また丸ケ谷

戸遺跡では小型器台が確認されていない。限定された調査地点に起因する可能性も考えられるが、竪穴住居跡02の器種構成よりそれがまだ主要器種に成り得ていないものと現状では考えている。

在来系土器は、その主体が貯蔵形態、煮沸形態を示す日常品に限られそうである。特に煮沸土器である台付甕Dの出土が目立つ。

注1．筆者は現在、弥生時代後期を1様式（第Ⅳ様式）として考え、その中を4つの小様式に細分して捉えている。弥生時代末期は弥生時代Ⅳ－4様式に相当する。

注2．1987年に富士宮市教育委員会により発掘調査が実施されている。調査報告書は未刊。

注3．中嶋郁夫1988「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」転機2号

注4．赤塚 次郎1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

注5．壺Dは、弥生時代後期の中で口唇部に棒状付文が貼付されるものとされないものがその前半段階（弥生時代Ⅳ-1・2様式）より存在し、同調した型式変化をその中で示す。

注6．櫛形町教育委員会1985『六科丘遺跡』櫛形町文化財調査報告No3においてヘラミガキ整形の甕の良好な資料の出土を見ている。

注7．中山誠二1986「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集Ⅰ』山梨県考古学協会

注8．加納俊介、湯川悦夫1981「月の輪遺跡群出土の土器」『月の輪遺跡群』富士宮市教育委員会
加納俊介1981「駿河湾東部の弥生土器編年のための覚書」『月の輪遺跡群Ⅱ—月の輪上遺跡（B地区）—』富士宮市教育委員会
加納俊介1981「弥生土器研究のための覚書」『考古学基礎論3』考古学談話会
加納俊介1982「大廓式土器補考」『月の輪遺跡群Ⅲ—月の輪平遺跡（第6次調査）—月の輪上遺跡（C地区）—』富士宮市教育委員会

注9．佐原真1968「畿内地方」『弥生式土器集成・本編2』

注10．外来系の文様については、注4の報文における分類基準を参考にしている。

注11．都出比呂志1986「タタキ技法」『弥生文化の研究3弥生土器Ⅰ』雄山閣

注12．寺沢薫1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊、奈良県立橿原考古学研究所

注13．小金井靖1983「弥生式土器について」『杉田大谷遺跡』杉田大谷遺跡調査団

注14．1984年に富士宮市教育委員会が発掘調査を実施している。報告書は未刊。

注15．小川貴司、谷川章雄、寺田良喜、比田井克仁1983「東京都北区の埋もれた考古資料—故五十嵐重作氏の収集資料を中心に—」『考古学雑誌』第69巻第1号

注16．田嶋明人1986「古墳出現期の土器群と「月影式」土器」『シンポジウム「月影式」土器について報告編』石川考古学研究会

注17．坂井秀弥1986「越後における月影式併行期とその前後の土器」『シンポジウム「月影式」土器について報告編』石川考古学研究会

注18．湯尻修平1986「能登、邑知溝帯における「月影式」併行期の土器群」『シンポジウム「月影式」土器について報告編』石川考古学研究会

注19．鈴木敏則1988「山中様式三河型（寄道様式）」『三河考古』創刊号

注20．佐藤由紀男1989「弥生時代後期から古墳時代前期の土器について」『山の神遺跡』(財)浜松市文化協会

注21. 比田井克仁1985「外来系土器の展開―古墳時代前期の東京を中心として―」『古代』第78、79合併号

注22. 調査担当者の岡本孝之氏の御好意により実見させていただいた。

注23. 鈴木敏則1987「欠山様式とその前後―西遠型―」『欠山式土器とその前後―研究、報告編』

注24. 宮腰健司1987「尾張における「欠山式土器」とその前後」『欠山式土器とその前後―研究、報告編』

注25. 贄元洋1990「欠山・元屋敷様式の高坏の分類」『三河考古』第3号

注26. 関川尚功1976「纒向遺跡の古代土師器―纒向1～4式の設定」『纒向』桜井市教育委員会

注27. 福島邦男1990「遺跡の分布」『赤い土器を追う』佐久考古6号

注28. 小川貴司1983「特別展図録　三～四世紀の東国―揺れ動く謎の時代―」八王子市郷土資料館

注29. 静岡県1930『静岡県史』第1巻

注30. 江谷寛1971「手焙形土器の再検討」『古代学研究』第59号

6．竪穴住居跡02の遺物出土状況（図－14～図－18）

竪穴住居跡02からは、床面を中心として大量の破砕された土器の出土を見ている。竪穴住居跡02は、第Ⅳ章で述べたようにその西側で中世の溝によって一部を破壊されている。そのため遺物全体の遺構内における平面的分布に片寄りが見られ、住居の西側に遺物の見られない空間が存在する。また、東側にも遺物の空白部分が見られるが、これは当初から遺物の存在しない空間で竪穴住居跡02と直接的な関係を持っている。

出土遺物は、住居の炉や貯蔵穴を含む中央主軸周辺を主体とする平面的な分布を示す。特に、入口部付近、貯蔵穴周辺、炉の北側区域での出土が目立つ。垂直分布では、東コーナーにややまとまって見られる一群の中で覆土の上位から出土している一部を除いて、ほとんどが床面直上からの出土である。

竪穴住居跡02の中で接合関係を示す遺物は、広い範囲に散らばっているものと狭い範囲で接合関係を示すものがある。その接合関係では、21、22、29の高坏、小型高坏が復雑な状況を示し、住居全体に亘ってその分布を見せている。また、3、10、12もやや広範囲に亘る接合関係を示す。そのため竪穴住居内の各々の遺物出土地点は、その器種に規制された「容器の場」（注1）などを認める法則性は見られず無造作な投棄による出土を示している。

丸ヶ谷戸遺跡で確認している遺構間の土器の接合資料は、竪穴住居跡02と方形周溝墓、前方後方型周溝墓の各々の間で認められるものである（図－18）。竪穴住居跡02と方形周溝墓との間では27の小型高坏脚台部破片と、44の手焙形土器蔽部分がそれぞれ認められた。27は方形周溝墓東溝覆土上層と竪穴住居跡02の貯蔵穴内の出土土器の接合例、44は、方形周溝墓南東屈曲部覆土上層と竪穴住居跡02の貯蔵穴周辺に広がる土器の接合例である。竪穴住居跡02と前方後方型周溝墓との間では21の有段高坏が接合関係を有している。21は竪穴住居跡02の床面に広い範囲で散らばって出土しているものと前方後方型周溝墓東側くびれ部覆土上層出土の土器の接合例である。両周溝墓の土器はいづれも1破片であり、その破片数および遺存している部分は、竪穴住居跡02側に主体を持つ。また、遺構間の接合関係を示す土器は、いづれも外来系土器に限られる。

破砕された土器の多量の出土は、居住空間としての住居の機能を停止させる。丸ケ谷戸遺跡竪穴住居跡02のように墓域という遺跡の特殊性に関連して施行された墓前祭祀に関わった遺構ではその中で行われた儀礼の終了を意味する。竪穴住居跡02と前方後方型周溝墓、方形周溝墓との関係は、相互の土器の接合関係より、竪穴住居跡02が前方後方型周溝墓、方形周溝墓の各々と同時あるいはそれより新しい段階に構築されたものと捉えられる（注２）。そして、竪穴住居跡02は、その床面に破砕された土器が廃棄された段階まで機能していたものと考えられる。また、その期間は同時に前方後方型周溝墓、方形周溝墓の各々の溝が、竪穴住居跡02と接合関係をもつ土器が出土している垂直位置まで埋まる時間でもある。

前方後方型周溝墓においては、愛知県廻間遺跡ＳＺ01の実証例（注３）のように数年間に亘り墓前祭祀が方形周溝墓などと同様実施されている。丸ケ谷戸遺跡では、前方後方型周溝墓の土器の出土数が限定されており、継続的な墓前祭祀の状況は把握できないが、竪穴住居跡02の機能については、第Ⅳ章で述べたように、方形周溝墓、前方後方型周溝墓の両周溝墓に関わる墓前祭祀を施行した施設として考えられ、一般住居とは隔絶した墓域の施設と容易に捉えられる。

竪穴住居跡02の遺物の出土状況は、桐生の分類による破損遺棄（注２、注４）に相当するが、儀礼的な行為に伴う具体例として重要性を持つ。居住機能を停止させてしまう破砕した土器のばらまき行為は、儀礼（墓前祭祀）の終了を意味するとともに、ばらまかれた土器群の一括性を示すものと思われる。そのため竪穴住居跡02内の接合関係（図－15～図－17）は、床面直上出土の遺物の間で成り立ち、各器種間の接合関係に規則性を持たない状況を示している。

『墓前祭祀の実施 → 墓前祭祀の終了に伴う土器の破砕とその遺棄』と言った一連の行為が祭祀の施行期間中、継続的に遺跡内で取り行われていたかは不明であるが、墓前祭祀の終了時に実施されたことは、ほぼ解明された。また、遺構間の土器の接合関係は、両周溝墓に対する祭祀行為の結果であり、「破損遺棄」が墓前祭祀の対称遺構（前方後方型周溝墓、方形周溝墓）に対して行われたことを物語る。さらにこのことは、前方後方型周溝墓と方形周溝墓との間に隔絶した階層差が存在しなかったことを意味しており、両周溝墓に共有の儀礼が行われていた可能性を示唆している。そして共同体の首長霊信仰に基づく墓前祭祀行為の結果としての遺物のあり方は、前方後方型周溝墓と方形周溝墓との間に同時性をもった有機的な関係が存在していたことを示している。

注１．石野博信　1984　「古代住居の日常容器」『橿原考古学研究所論集』第六
注２．桐生直彦　1987　「遺物出土状態の分析に関する覚書―カマド出現前の住居址を中心として―」『貝塚』38
注３．赤塚次郎　1990　『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
注４．桐生直彦　1984　「カマドを有する住居址を中心とした遺物の出土状態について（素描）」『神奈川考古』第19号

7．大廓式土器（古）の検討

丸ヶ谷戸遺跡では、系統の異なる土器の多彩な出土を大きな特徴とする。それは、弥生時代後期には見られなかった現象であり、社会的な変化に呼応した動きとして重要な意味を持つ。本節では、伊勢湾地方の土器の影響を受け出す段階から本地方（駿河湾地方）で小型丸底土器が器種構成に加わる直前までを大廓式土器（古）としてその内容を概観して見たい。駿東地域は、弥生時代後期に縄文を主文様とする土器文化を形成していた地域であり、大廓式土器段階になるとその中に伊勢湾地方を中心とした西方からの土器の流入が見られるようになる。伊勢湾地方、畿内地方に対する立場は、あくまでも土器を文化とした受容する立場であり、その受容の多少により遺跡の間での様相を大きく異にする。そのため外来系土器の影響が顕著に見られる遺跡と弥生時代の伝統を色濃く残す遺跡の両者が見られ、状況を複雑にしている。特に後者に関しては、弥生時代後期との識別が非常に困難であり慎重な検討を必要とする。

以下では、駿東地域における外来系土器のあり方に主眼をおき、大廓式土器（古）について段階的に検討してみたい。

編年試案

1段階

丸ヶ谷戸遺跡において、前方後方型周溝墓、方形周溝墓の造墓活動が行われた段階を1段階とする。現状では、この段階の良好な資料にめぐまれていないが、上石敷遺跡K－1号竪穴住居跡、同K－4竪穴住居跡（第－19図）、沼津市八兵衛洞遺跡B－38号住居址、同C－9号住居址が相当するものと思われる。出土土器には、甕、高坏、小型高坏、鉢、がある。甕は平縁で刺突文を施さない台付甕D2が盛行し、やや出土数は少ないようであるが平底甕D2も見られる。また、台付甕D1も台付甕D2と併存するが徐々に出土比率を低くしていく。台付甕Dは、球形のものと胴部の張りの弱い長胴のものが見られる。この段階より新たに外反する口縁部の端部外面を削って面取りする甕Bが出現する。

高坏は、高坏Aが現われる。口径23㎝前後の大ぶりで坏部が深いものである。坏部はやや内彎気味に開き口唇部の面取りがほとんど見られないものと、面取りを行う両者が見られる。脚台部は、内彎しながら開き円孔を施す。また、高坏Fもこの段階より出現するようである。この段階の高坏Fは、その坏部のやや広い底部から直線的に開く口縁部を形成する。脚台部はやや内彎しながら直線的に開くものと脚台部端部が外反するものとが認められる。

小型高坏は、小型高坏Ａｂが二形式認められる。1つは、矢部遺跡における分類の高坏E2に相当するものである（注1）。これは、深い半球状の椀形の坏部を形成するもので、やや短めの脚台部が付くもののようである。もう一つは、廻間遺跡の形式分類の椀形高坏B2に相当するもの（注2）で口唇部内面を面取りした半球状の椀形の坏部とわずかに外方へ開く柱状の脚台部が見られるものである。これは、作りが非常に丁寧で、細かいヘラミガキで整形して仕上げている。

鉢は、胴部の張りのやや弱い鉢Eが見られる。これには平底のものと凹み底のものがある。凹み底のものは、平底甕Bと同様に畿内第五様式の技法を借用しているものであるが、内外面ともハケメ調整で仕上げている点が特徴的である。

壺は、良好な共伴関係を示すものがなく不明な点が多いが、基本的には、弥生時代後期の各形式を踏襲するものと思われる。ただ、壺Dの中で、口唇部内面を面取りするものが出現する。その出自は、西遠江地域の西遠型欠山様式の中で盛行する口縁部内面の整形技法(注3)に求められそうであるが、本来、文様帯を作るための面取りであるべきところが駿東地域の場合、円形の貼付文が施される程度で無文のものが多く、形骸化したものが目立ちやや様相を異にする。また、この段階より壺Eの口縁部付近に小さな円孔を2～4個1組として等間隔に2～3ヶ所施すものが見られるようになる。

1段階は、高坏Aと小型高坏A bの出現を画期とするが、その組成に小型器台は加わっていないようである。

2段階

丸ヶ谷戸遺跡竪穴住居跡02、南部谷戸遺跡第12号住居跡、上石敷遺跡M－1溝状遺構の資料をもって代表させる。

各形式内容については、丸ヶ谷戸遺跡の土器群で充分表わしていると思われるので再述しないが、丸ヶ谷戸遺跡で見られない器種では、大型壺B、壺Ec、台付甕B、平底甕B、小型高坏A bなどが確実にこの段階の形式になっているものと思われる。また、駿東地域特有の鉢形高坏がこの段階で消失しているようである。

2段階は、高坏A、高坏D、小型高坏A a、壺Gなどに代表されるように伊勢湾地方からの影響が顕在化し、外来系土器の6割以上を占めるようになる。

3段階

神奈川県千代南原遺跡第Ⅳ地点の良好な資料をもって代表させる。その他伊東市内野町第1号住居址、長泉町下長窪上野遺跡第12住居址、沼津市目黒身遺跡第9号住居址、同大廓遺跡B住居址などがこの段階のものと思われる。

甕は、台付甕A、台付甕B、台付甕C、台付甕D、平底甕Dが見られる。台付甕Aは、この段階より顕在化しており出土数もふえ、台付甕A aと胴部が球形を呈する台付甕A bが認められるのをはじめとして多種の型式差を示し、受容地域としての変容がすすんだ状況を表わしている。技法的には、内面のヨコハケや口唇部の面取りなど赤塚分類のB類(注2)の特徴を備えたものがみられる。また、この段階より口縁部が「く」の字状に屈曲する台付甕D3が出現する。

壺は、大型壺B、壺A、壺B、壺D、壺E、壺G、小型壺Aが見られる。壺A、小型壺Aは、第2節で述べた通り二形式が認められこの段階以後顕在化する。この段階の壺A、小型壺Aは加飾性が強い。また、壺B bが出現するようであるが総体的な出土数が少なく出自など不明な部分が多い。壺D、壺Eは、前段階から漸移的な型式変化をし、短頸化、胴部の球形化がすすみ「く」の字ぎみの頸部を形成するものが見られるようになる。壺Gは、短頸のもので胴部最

大径を下位にもつしもぶくれ状の形状で、底部が凹みをもつ丸底のものが見られる。口縁部および胴部の文様は欠落する。２段階より見られた壺Ｇは、この段階をもって消失する。

高坏は、高坏Ａ、高坏Ｄ、高坏Ｆ、小型高坏Ａａ、小型高坏Ｂが認められる。高坏Ａは、坏部が浅くなり、口縁部の内彎の弱いものがふえる。また、脚台部は、横線文が欠落し、外反する形状のものが多い。高坏Ｆは、脚台部が直線的に開くものとその端部が外反するものが前段階同様認められる。坏部は内彎傾向が強まり椀状を呈する。小型高坏Ａａは、坏部が浅くなり口縁部の外傾が目立つようになる。その脚台部は、柱状部がほとんどなくなり、坏部から直接大きく広がるものが多い。また、坏部、脚台部の文様は欠落する。高坏Ａを模倣した小型高坏Ｂがこの段階より出現する。

鉢は、鉢Ｅがみられる。鉢Ｅは、やや大型化し、胴部が無花果形のものと球形のものの２種類が認められるようになる。また、口縁部は頸部の屈曲が弱まり垂直ぎみに立ち上がる。

３段階の大きな特徴は、新たに小型器台が明確に出現することである。小型器台は、器台Ａ、器台Ｂ、と器台Ｃが見られる。器受部の底部と口縁部との境界に明瞭な稜をつくる器台Ａは、器受部が深くまだヘラケヅリ整形の見られない器台Ａａが主体で、口縁部が垂直気味に立ち上がるものと外傾するものが見られ、いくつかの形態が存在するようである。脚台部は直線的に開くものと外反するものが認められる。器台Ｂは、器受部が直線的に開き、その口唇部を面取りするものが見られる。それは、まだ、端部の短いはねあげが見られない初源的な形状を示すもので、脚台部も内彎の傾向が強い。また、器受部が内彎気味に広がって小皿状となる器台Ｃが見られる。

３段階は、各形式にやや型式差が認められ将来的に更に細分される可能性をもつ。それには、小型器台と小型丸底土器の組成や小型丸底土器の代用形態などの問題を含め、駿東地域の良好な資料の蓄積を持って再検討する必要がある。

丸ヶ谷戸遺跡の時代的位置づけ

前述したように大廓式土器（古）の中では、１・２段階と３段階の間に器種構成上大きな画期がみられ、遺跡の立地にも大きな影響を及ぼしているようである。大廓式土器（古）の１・２段階の遺跡の中で外来系土器を顕著に保有するものは、駿東地域でも狩野川中流域田方平野の南部（山木遺跡、奈古谷遺跡）と潤井川中流域の富士山南西麓、星山丘陵など（月の輪遺跡群、滝戸遺跡、泉遺跡、上石敷遺跡、丸ヶ谷戸遺跡）で主体的に見られ局地的な分布を示す。その反面、愛鷹山麓～箱根山麓では弥生時代の伝統を色濃く残す八兵衛洞遺跡などの遺跡が継続的に営まれている。分布の差の要因は不明であるが、この段階の外来系土器の流入が面的なものではなかったものと理解される。

また、潤井川流域と狩野川流域では地形的な相違が顕著で共通した立地条件とはならない点も注意される。

１、２段階は、高坏Ａ、小型高坏Ａ、壺Ｇなどの型式的な特徴および器種構成より、廻間Ⅱ

式期の前半（注２）と考えられる。また、畿内との併行関係は、高坏Ｅ、平底甕Ｅ、手焙形土器などの特色のある器種より、纒向遺跡東田地区南溝中層段階、寺沢編年庄内２～３式期（注１）と捉えられるものと思われる。

大廓式土器（古）の３段階は、目黒身遺跡、内野町遺跡に見られるように外来系土器を持つ遺跡が平野部を中心として面的な広がりを見せて分布するようになる。外来系土器の主体は、あくまでも伊勢湾地方の影響が窺えるものが主体であるが、その移動は前段階より活発なものであったようである。

３段階は、赤塚が述べているように廻間Ⅱ式期後半～廻間Ⅲ式前半（注２）があてられ、寺沢編年の布留０式期（注１）ぐらいが併行するものと思われる。この段階の動き（併行関係）は、大廓遺跡Ｂ住居址出土の駿河湾地方特有の大型壺Ｂと同型式のものが布留０式期のものとされる纒向遺跡辻地区土坑４下層で出土していることに象徴される。また、関東地方の併行関係では滝沢の言うⅡ期（注４）に相当する。尚、１・２段階が赤塚の言う第１次拡散期に相当し、３段階が第２次拡散期に相当するものと思われる（注２）。

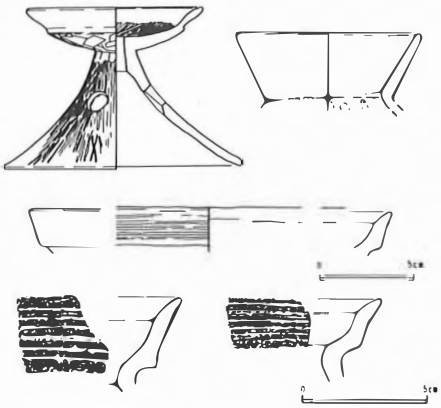
土器の受容

丸ヶ谷戸遺跡の土器は、外来系土器の受容を大きな特徴とするが、その故地は、伊勢湾地方、畿内地方（大和）、北陸地方と多岐に亘り、その動きも一系統ではないようである。北陸系の平底甕Ｆは、北陸地方東北部のものとして中部高地を南下し、さらに富士川を媒介として搬入した可能性がある。中部高地との関係は、１段階のものと思われる上石敷遺跡Ｋ－７号竪穴住居跡、沼津市雄鹿塚遺跡Ａトレンチ６区の箱清水系土器によりその交流が想定され、中部高地と駿河湾地方とを結ぶルートはすでに１段階で成立しているものと思われる。それが２段階における北陸系土器の波及経路としては、容易に捉らえられ、日本を縦断する動きがあったものと理解される。北陸系土器は、丸ヶ谷戸遺跡のほかに駿河湾地方では、藤枝市稲ケ谷８号住居址、富士市宇東川Ａ遺跡67号住居址（第６図）（注５）、沼津市藤井原遺跡Ｂトレンチ４区において、所謂「５」字状有段口縁甕が見られ、北陸～中部高地のものと思われる蓋が沼津市目黒身遺跡第９号住居址、韮山町奈古谷宮原遺跡第Ⅰ号溝、伊豆長岡町鳥井前遺跡第８号住居址で出土している。

「５」字状有段口縁は、加賀地方で主体的に出土を示し、加賀→近江・伊勢湾地方→駿河の経路を辿って波及するものらしい（注６）。そしてその移動は、伊勢湾地方の土器群と同調し連動した動きを示す。このように駿河湾地方において北陸系土器は、出自に二元性が認められ、波及経路に二系統が見られ、多彩な交流を物語るものとなっている。

一方、畿内系土器は太平洋沿岸を東海道沿いに波及したことで大過ないが、平底甕Ｆ、高坏Ｆの移動に見られるように東山道を径由した可能性も考えられる。それが直接的なものかどうか不明な部分が多いが、両径路の中間地点に位置する伊勢湾地方は、多かれ少なかれ畿内系土器の移動に影響を及ぼしていたものと思われる。伊勢湾地方では特に愛知県伊保遺跡柵口地区溝

状遺構、同高木遺跡10号周溝墓下溝状遺構、同本神遺跡壕状遺構、同中狭間遺跡溝状遺構などの矢作川流域（西三河）の諸遺跡において畿内系土器が顕著な出土を示している。また、同地域の遺跡では、北陸系土器、東海東部系土器の出土も目立ち注目される（注７）。それは、この地域を介在として畿内系土器や加賀地方をその出自とする北陸系土器が駿河湾地方に移動した可能性も充分考えられるものである。丸ヶ谷戸遺跡竪穴住居跡02と中狭間遺跡溝状遺構の土器との間で器種構成上類似点が多く、中狭間遺跡の類例がやや古相を呈する点は、その動きを傍証しているものと思われる。



第６図　富士市宇東川Ａ遺跡第67号住居跡出土土器

大廓式土器（古）段階は、土器の「搬出」、「搬入」およびそれに伴う「模倣」が顕在化し、広範囲の地域間交流が始まる。その内容は高坏Ａ、小型高坏Ａに代表されるように伊勢湾地方との関連が強い。しかし、外来系土器として畿内系土器、北陸系土器などの搬入は、その交流が一元的でないことを物語っている。大廓式土器（古）段階は、搬入（模倣）する土器群に系統的な重層性が見られ、ある程度の範囲を有する面的な交流がすでに開始された段階と理解される。それは、背後の政治的な力を想定させるものであり、時代の大きな画期の存在が窺えるものである。

注１．寺沢薫　1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第49冊
　　奈良県立橿原考古学研究所

注２．赤塚次郎　1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

注３．鈴木敏則　1985「欠山式の地域性」『転機』創刊号

注４．滝沢亮　1984「神奈川県」『古墳時代土器の研究』

注５．宇東川遺跡は、富士市教育委員会により現在調査が継続中である。この遺跡は縄文時代～平安時代まで見られる複合遺跡で非常に遺構の重複が著しい状況にある。そのため各々の遺物の出土地点と遺構の関係は容易には理解し難い。第６図は富士市教育委員会の御好意により掲示させていただくものであるが、今後遺物の所属遺構などに変更の可能性があるものであり、正式な報告書刊行時にその正確なデータが呈示されるものと思われる。

注６．比田井克仁　1987「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第83号

注７．川崎みどり　1987「三河における「欠山式土器」とその前後」『欠山式土器とその前後―研究、報告編』

その他の引用文献

愛知県考古学談話会　1986『欠山式土器とその前後　第3回東海埋蔵文化財研究会』
伊豆長岡町教育委員会　1981『鳥井前遺跡』
小田原市教育委員会　1987『千代南原遺跡第Ⅳ地点』
小野真一、笹津備祥　1969「沼津市大廓発見の住居址と土器」『歴史科学』第20輯
小野真一、秋本真澄、藪下浩、原茂光、1978「北伊豆函南町向原遺跡発掘調査報告」駿豆考古13
小出義治　1990「伊豆半島における古式土師器」『土師器と祭祀』雄山閣
桜井市教育委員会　1977『纒向』
杉山治夫　1979「北神馬土手遺跡とその遺物」沼津市歴史民俗資料館紀要3
逗子市教育委員会　1975『持田遺跡発掘調査報告』
駿豆考古学会　1979『駿豆地方弥生式土器集成』
瀬川裕市郎・山内昭二・小野真一　1979「二本松遺跡の土器と方形周溝墓」沼津市歴史民俗資料館紀要2
世田谷区教育委員会　1982『下山遺跡Ⅰ』
長泉町教育委員会　1979『下長窪上野遺跡』
名張市遺跡調査会　1978『蔵持黒田遺跡』名張市文化財調査報告第1冊
韮山町　1979『韮山町史　第1巻　考古篇』
韮山町　1979『韮山町史　第2巻　考古篇』
沼津市教育委員会　1970『目黒身』
沼津市教育委員会　1978『藤井原遺跡発掘調査報告書Ⅰ　遺構編』
沼津市教育委員会　1979『御幸町遺跡第1次発掘調査概報』
沼津市教育委員会　1981『八兵衛洞遺跡群発掘調査報告書』
沼津市教育委員会　1989『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』
沼津市教育委員会　1989『豆生田遺跡発掘調査報告書』
藤枝市教育委員会　1980『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―縄文、弥生時代編―』
富士宮市教育委員会　1981『月の輪遺跡群』
富士宮市教育委員会　1981『月の輪遺跡群Ⅱ―月の輪上遺跡（B地区）―』
富士宮市教育委員会　1985『上石敷遺跡』
藤森栄一　1939「信濃下蟹河原における土師器の一様式」考古学10－11
三島市教育委員会　1983『中島下舞台遺跡』

（山上英誉）

Ⅷ. 発掘調査の総括

方形周溝墓の「台と溝」

富士山麓から南東に連なる愛鷹、箱根山麓に旧態依然として並ぶ方形周溝墓群（注１）のなかに「本地域の瓜生堂遺跡第２号方形周溝墓（注２）」とでも言うべき方形周溝墓が愛鷹山麓、沼津市尾上Ⅲ橋遺跡（注３）に発見された。以下、第１号墓の詳細な観察の結果を報文にしたがうと、「平面プランは南北が長い整然とした長方形を呈し、規模は、基底部で17×13ｍ、周溝外側で21×16.4ｍを計測し、かなり大規模な方形周溝墓である。墳丘構築にあたって、まず富士黒土層あるいは休場ローム層まで一旦掘削し、その上に盛土を施しており、最大で１ｍを越す盛土が認められた。（中略）また、断面図にみる通り周堤を確認することができた。これは周溝に沿って土を盛り、内部を一旦凹地状にして、更に盛土したものと思われる。墳頂は東南側に地山が傾斜しているため、東方からみるとかなりの比高を感じることができ、差は1,3～1,5ｍ程にもなる。（中略）主体部の構築順序は、第２層目の暗褐色土を盛った段階で土壙掘り方を設け、棺を中央に安置した後に、墳丘全体を盛土で被覆し、埋納したもので、（中略）周溝内の各所から大廓式土器の破片が多数発見されているが、ほとんどが溝底からやや浮いた状態」である。

この事実は「方形周溝墓が本来、平面における区画割を主眼としている以上、封土（盛土）の存在は二次的なものとも考えられるが、視点をかえてみるならば、今日大多数の方形周溝墓より主体部の検出をみていない事実からして、何らかの封土（盛土）が存在していたことが推察される。しかも、主体部の埋葬施設はその封土（盛土）上もしくは封土中に置かれていた可能性が高いと思われる（注４）。」予察を裏付け、今日では一部に盛土の存在を否定する（注５）むきもあるものの、大方は盛土を肯定するに至っている。

そして、この後、「台」をもった方形周溝墓の「呼称」に及び（注６）、最終的には「結果としての溝か、目的としての溝か（注７）」として東西対抗（注８）の様相を呈し、その解決策をいずれもこの東海地方に求めている場合が多い。

それでは先ず、なぜ、「台」のない方形周溝墓の発見が相次いだのか、それはすでに占地条件に起因する指摘（注８ａ）がある。昭和39年、東京都八王子市宇津木遺跡で命名をみた「方形周溝墓（注９）」は昭和40年代に至り、列島改造ブームとともに爆発的な勢いで発見され、事実、本地域の方形周溝墓もこの時期の発見が圧倒する。そして、その占地は宇津木遺跡がそうであったように、山麓より「樹根」状に沖積地に没する幅広い台地、つまり「舌状台地」なる考古学用語がもっとも適切な地形条件下にあり、その台地のいわゆる「根方」、「根小屋」等と称される中、近世集落の背後が、近世に至り行きづまった生産性から絶好の開墾の奨励地であったことも確かで、また、そこに時代をこえて、高速道路建設や宅造開発が集中していったのも周知される。以下、その発掘調査に及ぶ時、すでに表土中に拡散してしまった「攪拌土である盛土」の確認は至難の技で、当時の平面的な発掘調査結果は至極当然の成り行きだったかも知れない。

したがって、開墾の及ばない「周辺の丘陵と異なり、平坦部の少なく痩せた尾根（沼津市尾上Ⅲ橋遺跡）」や、「洪水・氾濫―冠水―湛水という一連の常襲地帯の現在の水田より約３～４ｍ下（静岡市川合遺跡、注10）」に保存されていた方形周溝墓や墳丘墓（川合遺跡２基）が、一時の経済の低迷をこえて、より高く、より低くむかう開発と背中合せに、現在、その実態を表出しつつあることは、かつて我々の発掘調査の大半が縄文中期の大遺跡であったのに対して、最近では一段上の山麓の縄文早期遺跡であったり、低湿地で相次ぐ水田跡の発見等からも経験している。

反面、周溝は掘削行為をもってなるため、その行為の結果（痕跡）も如実に反映され、形態分類の格好の題材となって、「東日本の方形周溝墓は四隅が切れて陸橋となるもの→隅が１～２ヶ所切れているもの→周囲全体を溝がめぐるもの（注７）」への変遷が一般化されつつあり、事実、弥生中期に至ると「四隅が切れて陸橋となるもの」が、清水市能島遺跡（注11）以西、遠江天竜川流域を中心に土器棺墓と相俟みえながら発展をみていく（注12）。この時、本地域（駿東、伊豆）は文化が希薄で、その発見もないが、箱根をこえて横浜市歳勝土遺跡（注13）を代表に関東地方一円に隆盛を極めていく。以下、後期後半をむかえてやっと、本市滝戸遺跡が、それから東にむけて沼津市二本松遺跡、韮山町神崎遺跡→沼津市目黒身遺跡、韮山町奈古谷宮原遺跡が並ぶ（注１）。これが前述の「隅が１～２ヶ所切れているもの」にあたるのか、いずれも「辺」まで欠いている場合が多い。この後、「古墳時代に入るとほとんどが―四周溝のめぐる型―となる（注４）」が、傾向は充分指摘されながら、依然として「隅が１～２ヶ所切れているもの」、「辺を欠くもの」が本市南部谷戸遺跡をはじめとして残るのも事実である。

これを、「周溝については明瞭に墳丘裾を一周する例が以外と少なく、一周溝でさえ安定した形状を呈しておらず、また、墳丘の対角線上となる四隅の掘削が不充分なものが多く、一辺の溝内において中央部分が深い傾向にある。」指摘があるならば、「一辺ないし二辺の溝の存在しないタイプが、旧地形の掘削位置、または後世の削平の差異といったような条件的なものとしてとらえることが可能である。」だけでなく、よほど「掘り込みが深くなり、後世の削平をのりこえて明瞭な周溝を存在づけ（以上、注８ａ）」ない限り、全周すべき周溝が四隅が切れたりしてとらえられる危険性もはらんで、その形態分類には不安が付きまとうのである。

とにかく、周溝の「四隅の切れるもの」が次第に一般的でなくなり、「四周溝のめぐるもの」の実態に接するとき、その平・立面形の膨張に比例する掘削土量は必要不可欠のものであり、逆に前者の主体部残存例をその「薄さ」に求められると妙に納得されるのである。

さらに、この周溝を詳細に観察して、その掘削の意義と祭祀行為との関連を解く試みもなされ、一例を拾えば、一様でない周溝にみせる僅かな傾向である四隅のたかまりに対して「階段状施設」の意義を説き、「そこは溝内の入口であり、溝が埋没することは入口としての機能が必要でなくなることと同時に、周溝内諸施設、周溝内儀礼の終了を意味し、入口部での土器の供献、投棄はその最終儀礼行為であった。」とする。そこで本遺跡における両墓をみるが、いずれ

の行為も周溝中層の埋没後に挙行されたもので、その時、すでに埋没下の「段」、「台」、「掘り込み」等に因果関係を求めるには不利で、それより、いとも簡単に埋没を許し、また、それを待っていたかのように開始される各種の祭祀行為をみる時、「掘った土を盛って」残る痕跡にまで及ぶ意義の追求がなくとも、「溝内祭祀」に対する関心の度合は充分に知れる。しかし、その行為の挙行を「人為的な埋めもどし」で対処するのは、「関東地方の方形周溝墓は溝による区画が第一義である。」から逸脱しかねないし、「土器の出土状況も多様で一定の規則性は看取できない（注、以上８ｂ）。」ような、依然と続く暗中模索のなかで、空間的な精神行動の実体を痕跡として規則性まで求めるにはいまだに限界があり、唯一、呈示される事実は周溝内壁が描出する「形」へのこだわりであろう。

前方後方型周溝墓の「形と存在」

こうして、弥生時代の伝統的な墓制の形となった「方」形は、その最終段階をむかえて「前方後方」形を加えることは周知される。そして、ここで「前方後方型周溝墓」の所以たる、方形周溝墓に付された「前方部」に注がれる視点は、先ず、「地上と天界とを結ぶ通廊（注14）」にその起因を求めて、周溝の断絶箇所を抽出することから始め、「使用した資料の大半は、墳丘を失った小規模な古墳が多い（方形周溝墓も含む、注15）」という不利な条件にありながら、前辺中央断絶例の「開口型」から「前方後方型」の集成が精力的に行われ、分類、系列化が計られていく、いわゆる田中分類がされる。―そして、このあたりから観察の視点が周溝内壁で描出される「前方後方」形に移って、方形周溝墓にみせた周溝内面への執着が薄れていくのも致し方ないことである。―　それから、さらにこれを助勢して「方形周溝墓の一辺の中央に通路をつくって、それがだんだん発達し、やがてここは通路ではない、通るなということで、張り出しを大きくして、そこにもたくさん土を盛って入ってこられないようにするという流れがあるようです（注16）。」と、前方後円墳の「前方部は後円部に至る通路である解釈（注17）」のひとつに協調して、これを先導していくのである。しかし、前方後円墳の起源論にも「これという方向性を見いだしかねているのが現状である（注18）」ように、「通路」に関しては、占地、ならびに保存条件でいかようにも変化してなる「周溝の遺存の有り方」に散漫的であった従来の平面的な発掘調査の「産物」、つまり、それが「陸橋、ブリッヂ」状と表現した、方形周溝墓の内と外を同一面でつなぐ周溝の断絶箇所を指しているならば、定型化された「前方後方型周溝墓」にも同様の箇所は認められるし、さらに、今日の造墓当初より「立体的」な方形周溝墓では、なお、説明不足は歪めず、依然としてその発生の「継起」は模糊したまま今日に至っている、とするのが妥当であろう。

また、この時すでに具現化された前方後方型周溝墓を見据えて、「東国の前方後方墳の分布する地域には東海系土器を出土する遺跡が多く、実際に東海系土器を出土する前方後方墳が多い。これらを総体的に、そして古墳時代初頭の政治状況を考えた時、前方後方墳は東海地方西部を中心とする地域から派遣された将軍の墓とするのが妥当であり、前方後方型周溝墓は在地

化した兵士や農民によって造営されたものと考える（注19）。」と、在野の具体相まで語られるに至り、その淵源地では「この時期（Ｓ字甕Ｂ類）人々は漂泊し、東国へ広く濃美平野の土器が拡散する。そして、それは従来までにないより広い地域との関係、どのような集団、体制とも結合できるし、その成立には包摂的な従属関係を見る必要はない（注20）。」と、性急な結論の引き出しを和らげながら、その発見を近い将来に見透していたのである。

そして、濃美平野に廻間様式の開始とともに造墓される、愛知県清洲町廻間遺跡の「前方後方型墳丘墓」ＳＺ01や、小規模で集団化する同土田遺跡の「方形開口型」の墳丘墓をみる時（注21）、この従来より段階的な発展過程として捉えられていた造墓変遷（田中分類）が、廻間Ⅰ式前半期のなかで予想以上の速度で完成していて、その速度に廻間、土田遺跡を縦列するには窮屈で、むしろ横列的な配置をもって、そこに指導者達と集落構成内の小単位集団別の、つまり「階層別の造営地」の存在を位置付け、さらに廻間ＳＺ01の墓前祭のあり方から、廻間Ⅰ式期に継続してⅡ式期に中断、改めてⅢ式期に急きょとり行われて遺跡の終焉をむかえる「祭祀の継続から断続と断絶」を実証するのである。そして、その祭場が造墓時の墓外から、終焉に至る時、すでに埋没中の周溝内（溝内土壙、礫床の追従埋葬も含む)から、墓内に移動する過程に、通路の必然性はないことを知らされるのである。

こうして、濃美平野で廻間ＳＺ01の墓前祭が断続している時、つまり廻間Ⅱ式期にここを淵源地として土器が東日本をはじめ、外縁各地にむけて移動を開始する「第１次拡散期」をむかえ、この動向が、地理、ならびに人文環境とも直接的な距離関係にある本地域の、典型的な「在地」然として経営される一連の遺跡に及んで、そのひとつである本遺跡に「造営地」を求めて、前方後方型周溝墓、方形周溝墓、さらに、この祭祀を司る竪穴住居跡02の創立をみるのである。ここで、この丸ヶ谷戸の地が「指導者達の墓域」に選抜された理由を知る由はないが、既存の竪穴住居跡01にみせる撤退のあとが、およそ交戦的な痕跡のない、余裕ある片付けのもとに「納得された行為」である時、おそらくこれが属した小単位集団から集落全体にまで及ぶ移住を促すことのできる背景には、「どのような集団、体制とも結合できる」、外来系土器と在来系土器の融合の表出そのものであり、外来系土器に占める微かな畿内や、北陸から中部高地の土器の混在は第１次拡散期における「各々の外、在来の融合」の集合も意味して、この土器の移動と集合に置き換えられる「人間の集散（注22)」による集合体の丸ヶ谷戸遺跡における「廻間ＳＺ01の笵型」の作出にはどこにも包摂的な従属関係はみあたらないのである。

それから、この頃になると濃美平野ではさらに巨大な墳墓の出現によって、前述の階層別造営地の関係が、より高度に象徴化された造営地と伝統的な造営形態が残っていく、両極化現象が捉えられ、もし、この巨大な墳墓を前方後円形を呈した「纒向石塚」に指し、その発生を契機にして、濃美平野に「前方後方墳」の出現を示唆しているならば、廻間Ⅱ式後半からⅢ式期に至る「第2次拡散期」に付帯する「畿内の情報」として、その底辺の諸々の情報まで秘めて、

先発のそれよりは確実にひとつ増えていったはずである。そして、この距離的な時間差を除々につめながら、—この情報が先発にたどる道程でみせる中継の様相はそれぞれに詳しいが—、これが関東平野をこえて福島県宮東、男壇遺跡（注23）にたどり着いた時には、すでに波長をなくした多重な情報だけが「一面化」した姿をみせるのであろう。

つまり、淵源地の濃美平野より常に「一波、万波を呼ぶ」堰堤状に位置する駿河湾奥部沿岸地方に先ず、前方後方型周溝墓を創立し、大廓式土器を成立させる、伝統的な「前方後方」形の系譜の定着は、4世紀後半に至って、より高度に象徴化された前方後方墳、富士市浅間古墳（全長100m）を誕生させ、着実にその動向を反影させていくのである。しかし、この後、5世紀初頭に同東坂古墳（全長60m）の前方後円墳の出現以来（注24）、その復活はないように、この一世代限りの前方後方墳の造墓こそが、土器の拡散以来、東国にむけて一歩先んじて情報を提供してきた濃美平野の「文化」の定着と伝統の最終的な主張であり、その時以来、何時も一歩、背後に潜んでいた畿内の影響（前方後円系）がある時点をもって強大な「政治」的勢力と化した時、それらに覆い被さっていく姿を「前方後方」形の伝統のない静岡平野の谷津山古墳（全長110m）の創立で知り、そして、この状景が外縁に投影されているはずである。

注1．富士宮市教育委員会　1981「南部谷戸遺跡」『月の輪遺跡群』
　　〃　　1983『滝戸遺跡』第Ⅳ次概報
　　沼津市教育委員会　1978『二本松遺跡』
　　〃　　1970『目黒身』
　　韮山町役場　1980「田方郡韮山町奈古谷遺跡、同神崎遺跡」『韮山町史』第Ⅱ巻
注2．瓜生堂遺跡調査会　1981『瓜生堂遺跡』Ⅲ
注3．石川治夫　1983「沼津市尾上Ⅲ橋遺跡発掘調査略報」『駿豆考古』第24号
注4．山岸良二　1981『方形周溝墓』考古学ライブラリー8　ニューサイエンス社
注5．松本完　1984「横浜市道高速2号線埋蔵文化財調査報告書No6遺跡—Ⅳ　1983年度」同発掘調査団
注6．「台」をもった方形周溝墓の「呼称」については本紙掲載参考文献にて詳細に紹介されており、また、そのことを目的としていないので、それらを参照していただきたい。
注7．桑原隆博　1989「周溝墓」『考古学ジャーナル3』No302 ニューサイエンス社
注8a．一瀬和夫　1985「方形周溝墓・方形台状墓　そして古墳」『末永先生米壽記念献呈論文集』
　8b．伊藤敏行　1986、1988「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究」Ⅰ・Ⅱ『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅳ・Ⅵ
注9．大場磐雄　1973『宇津木遺跡とその周辺』中央高速道八王子地区遺跡調査団
注10．（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1989『川合遺跡（遺構編）』
注11．（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1989『能島遺跡（本文編）』
注12．佐藤由紀男　1990「遠江」『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』第7回東海埋蔵文化財研究会
注13．横浜市埋蔵文化財調査委員会　1975『歳勝土遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅴ

注14. 大塚初重　1985「東国古墳発生論」『論集　日本原史』論集日本原史刊行会編
注15. 田中新史　1984「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号早稲田大学考古学会
注16. 石野博信　1986「古墳の出現」『東アジアの古代文化」48号　大和書房
注17. 石野博信　白石太一郎1986「対論出現期の古墳をめぐって」『東アジアの古代文化』48号大和書房
注18. 岩崎卓也　1990『古墳の時代』教育社
注19. 高橋一夫　1985「前方後方墳の性格」『土曜考古』第10号　土曜考古学研究会
注20. 赤塚次郎　1988「東海の前方後方墳」『古代』第86号　早稲田大学考古学会
注21. 赤塚次郎　1990『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
注22. 岩崎卓也　1984「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学Ⅲ』長野県考古学会
注23. 和田　聡　1990「会津坂下町宮東、中西、男壇遺跡略報」『第32回福島県考古学会大会発表要旨』
注24. 植松章八　1988「駿河、伊豆における大型・古式古墳とその地域性をめぐって」『考古学叢考』下巻　吉川弘文館

（馬飼野行雄）

図　　版

第１表　遺跡地名表

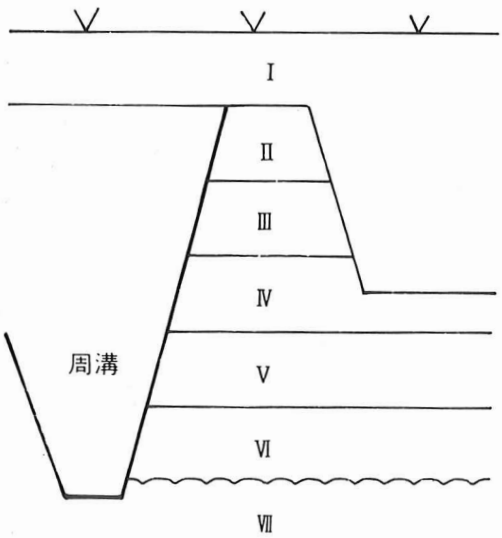
番号	遺跡名	所在地	時代	地形	地目	遺跡の状況・遺構・遺物
13	小泉向原	小泉向原	縄文	台地端部	畑・宅地	土器（縄文中期）、石鏃
16	寺後	小泉寺後	縄文	台地上	畑	土器（縄文中期）
18	上宿（旧下宿）	小泉上宿	縄文 古墳	台地上	畑・宅地	土器（縄文早・中期）、石槍、石鏃、石斧、土師器
19	寺内	小泉寺内	縄文 古墳	台地端部	水田・畑	土器（縄文前～中期）、打製石斧、石鏃、土師器
20	大室（矢ノ下）	小泉大室矢ノ下	縄文 古墳	台地上	畑・宅地	土器（縄文中～後期）、土師器
21	小泉中村	小泉中村	縄文 古墳	台地端部	水田・畑・宅地	土器（縄文中～後期）、土師器
22	三ッ室	小泉三ッ室	縄文 古墳	台地上	水田・畑・宅地	土器（縄文前期）、土師器、須恵器
23	木ノ行寺	小泉木ノ行寺	縄文 古墳	台地上	水田・畑・宅地	土器（縄文中期）、石鏃、土師器
25	石敷	小泉石敷	古墳	台地上	水田・畑・宅地	土師器
26	向田	小泉向田	古墳	扇状地	水田・畑	土師器
27	中沢	小泉中沢	古墳	台地端部	水田・畑・宅地	土師器、須恵器
28	大室古墳	小泉大室	古墳	台地上	原野・畑	円墳（後期）、須恵器
29	神祖１号墳（山ノ神古墳）	小泉神祖	古墳	台地端部	原野	円墳（後期）、須恵器
30	神祖２号墳	小泉神祖	古墳	台地端部	原野	直刀、鉄鏃、須恵器
31	神祖３号墳	小泉神祖	古墳	台地端部	宅地	馬具、直刀
32	寺内山ノ神	小泉寺内	古墳	台地端部	原野・宅地	円墳、須恵器
34	虚空蔵塚	小泉石敷	古墳	台地端部	原野	円墳（後期）
35	箕輪（A）	大岩箕輪	縄文 古墳	山腹 台地上	畑・宅地・墓地	土器（縄文中・後期）、石棒、石鏃、打製石斧、磨製石斧、石匙、石皿、土偶、土師器
36	箕輪（B）	大岩箕輪	縄文 古墳	台地上	水田・畑、宅地	土器（縄文早・中～後期）、石皿、石棒、打製石斧、磨製石斧、凹石、硬玉（鰹節型）、石鏃、注口土器、土師器
37	出水	大岩出水	縄文 古墳	台地上	畑	土器（縄文前期）、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧磨石、凹石、滑石製玉、砥石、土師器
38	峯石	大岩峯石	縄文 古墳	台地上	畑・宅地・茶畑	土器（縄文前・中～後期）、石鏃、石匙、打製石斧、土師器
39	丸ケ谷戸	大岩丸ケ谷戸	縄文 古墳	台地上	畑・宅地	土器（縄文中～後期）、磨製石斧、土師器
40	辰野	大岩辰野	縄文 古墳	山腹 台地上	水田・畑・宅地	土器（縄文中～後・晩期）、打製石斧、石鏃、石錐、土師器
41	時田	大岩時田	縄文 古墳	台地上	畑・墓地	土器（縄文中～後期）、土師器
42	宝田（元大岩）	大岩宝田	縄文	台地上	畑・宅地	土器（縄文中～後期）、石槍、石棒、石臼
43	峰ケ谷戸	大岩峰ケ谷戸	縄文 古墳	山腹 台地上	畑・宅地	土器（縄文前～中期）、石鏃、打製石斧、土師器
44	出水東	大岩出水	古墳	台地上	畑・宅地 工場用地	土師器
45	出水西	大岩出水	古墳	台地端部 台地上	水田・畑	土師器
76	浅間神社	大宮元城町	縄文 古墳	台地上	山林・宅地 社寺境内	土器（縄文早期）、土師器、有孔石鏃
77	羽衣町	大宮羽衣町	弥生 古墳	平地 台地端部	宅地・工場用地	土器（弥生後期）、土師器
78	城山	大宮城山	古墳	台地上	宅地	土師器
80	二ノ宮	大宮二ノ宮	古墳	台地上	畑・宅地	土師器、須恵器
82	西町	大宮西町	古墳	台地上	畑・宅地	土師器
102	坊地	黒田坊地	縄文 古墳	台地上	畑・宅地	土器（縄文早・中期）、土師器
104	野中中村	黒田中村（野中）	縄文 古墳	台地上	畑・宅地	土器（縄文中期）、土師器
105	泉	黒田　泉（野中）	縄文 古墳	台地上	水田・畑・宅地	土器（縄文後期）、石鏃、打製石斧、土師器
106	南部谷戸	黒田南部谷戸	先土器 縄文 古墳	台地端部 台地上	畑・宅地	有舌尖頭器、土器（縄文早・前・中期）、土師器、勾玉 有孔石鏃、ガラス玉
107	月の輪平	黒田月の輪	先土器 縄文 古墳	台地上	山林	土器（縄文早期）、ガラス玉
108	滝戸	野中滝戸	縄文 古墳	台地上	畑・宅地	土器（縄文早・中・後・晩期）、石皿、石棒、石錘、石鏃土偶、打製石斧、硬玉製勾玉、土師器

図－1　遺跡位置図(1:20,000)

第２表　遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	地形	地目	遺跡の状況・遺構・遺物
109	野中向原	野中向原	縄文 古墳	山腹	畑・宅地	土器（縄文中～後期） 打製石斧、石鏃、土師器
111	五反田	黒田五反田	縄文 古墳	台地上	水田・畑・宅地	土器（縄文中期）、石鏃、石匙、石槍、土師器、有孔石鏃 石小刀
112	月の輪上	黒田月の輪	縄文 古墳	台地上	畑・宅地	土器（縄文早・前・中期）、石鏃、磨石、土師器
113	奥山地	黒田奥山地	縄文 古墳	山腹 台地上	山林・畑・宅地	土器（縄文早・前期）、磨石、石鏃、打製石斧、土師器
114	田中	黒田田中	弥生	平地	水田・畑・宅地	土器（弥生後期）
116	坊地南	黒田坊地	古墳	台地上	山林・畑	土師器
117	月の輪下	黒田月の輪	古墳 江戸	台地端部	宅地	土師器
118	塚本古墳	黒田実手田	古墳	台地上	宅地	円墳
119	月の輪法印塚	黒田月の輪	古墳	台地上	宅地・学校用地	円墳、大刀身、須恵器
126	上石敷	小泉石敷	先土器 縄文 古墳 歴史	台地上	畑・宅地	有舌尖頭器、縄文土器、石器、土師器、刀子
127	大宮城	大宮城山	歴史	台地端部	公園・学校・宅地	陶器、カワラケ、石臼、大宮神田山輪
138	若の宮	大宮若の宮	古墳 歴史	台地上	畑・宅地	土師器・須恵器
146	金井坂	小泉金井坂	縄文	台地上	畑・宅地	土器
149	下ケ谷戸	黒田下ケ谷戸	弥生 古墳	台地上	畑・水田	土器（弥生後期～古墳初頭）
150	杉林	黒田杉林	弥生 古墳	台地上	畑	土器（弥生～古墳）

図－2　周辺地形図(1:2,500)



Ⅰ　表土層(含スコリア黒色有機質土層)

Ⅱ　大沢ラピリ層(スコリア粒子が密のため，乾燥すると灰褐色を呈する。いわゆる富士マサ層)

Ⅲ　黒褐色土層(少量のスコリア粒子を含み上部より下部に向うにしたがい，褐色が強くなる)

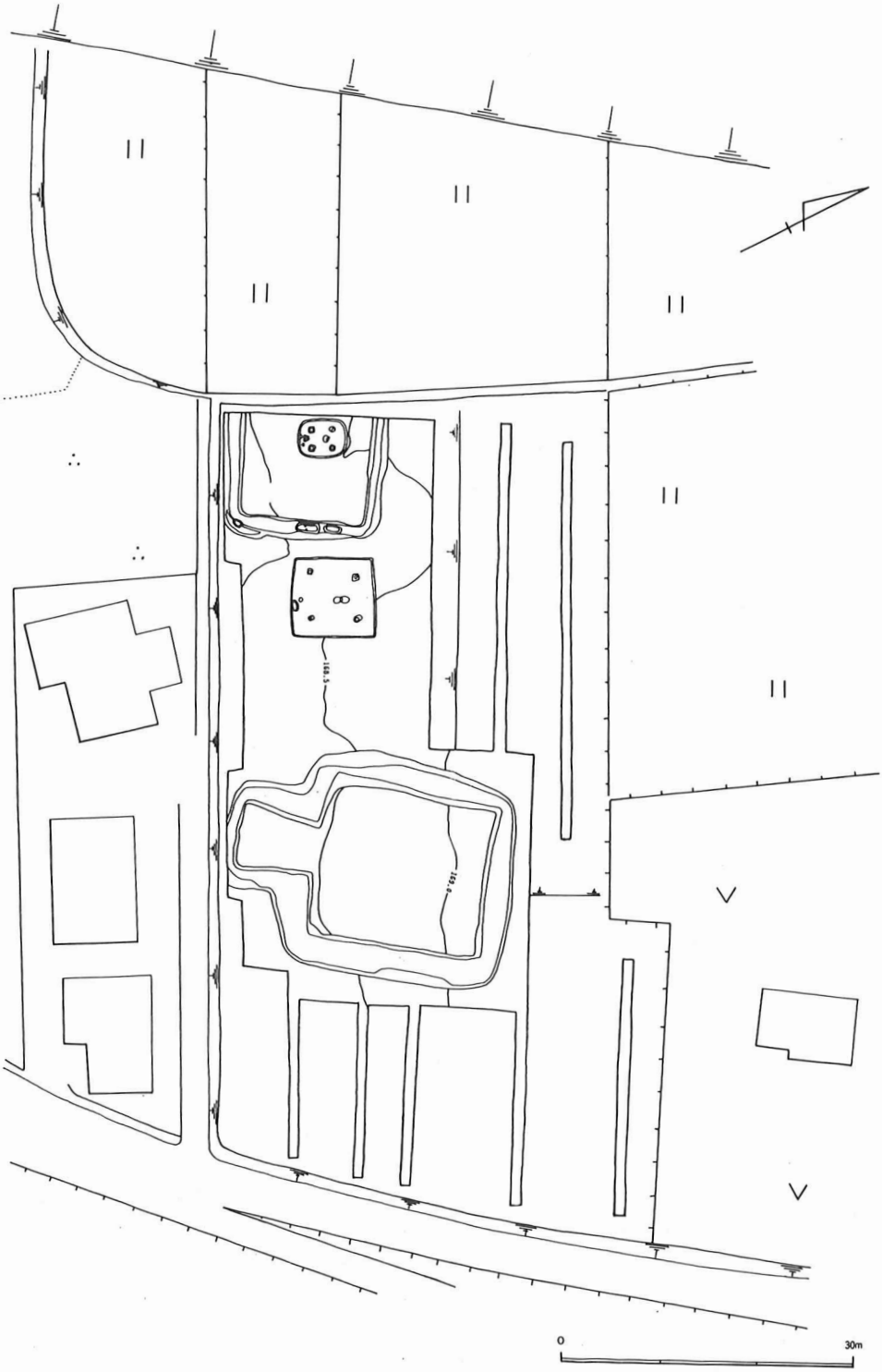
Ⅳ　茶褐色土層(いわゆる栗色土層に比定される)

Ⅴ　富士黒土層(大粒のスコリア粒子含有黒色バンド層)

Ⅵ　黄褐色粘質土層(非常に粘性が強い)

Ⅶ　古富士泥流上扇状地堆積物上部層(岩盤層)

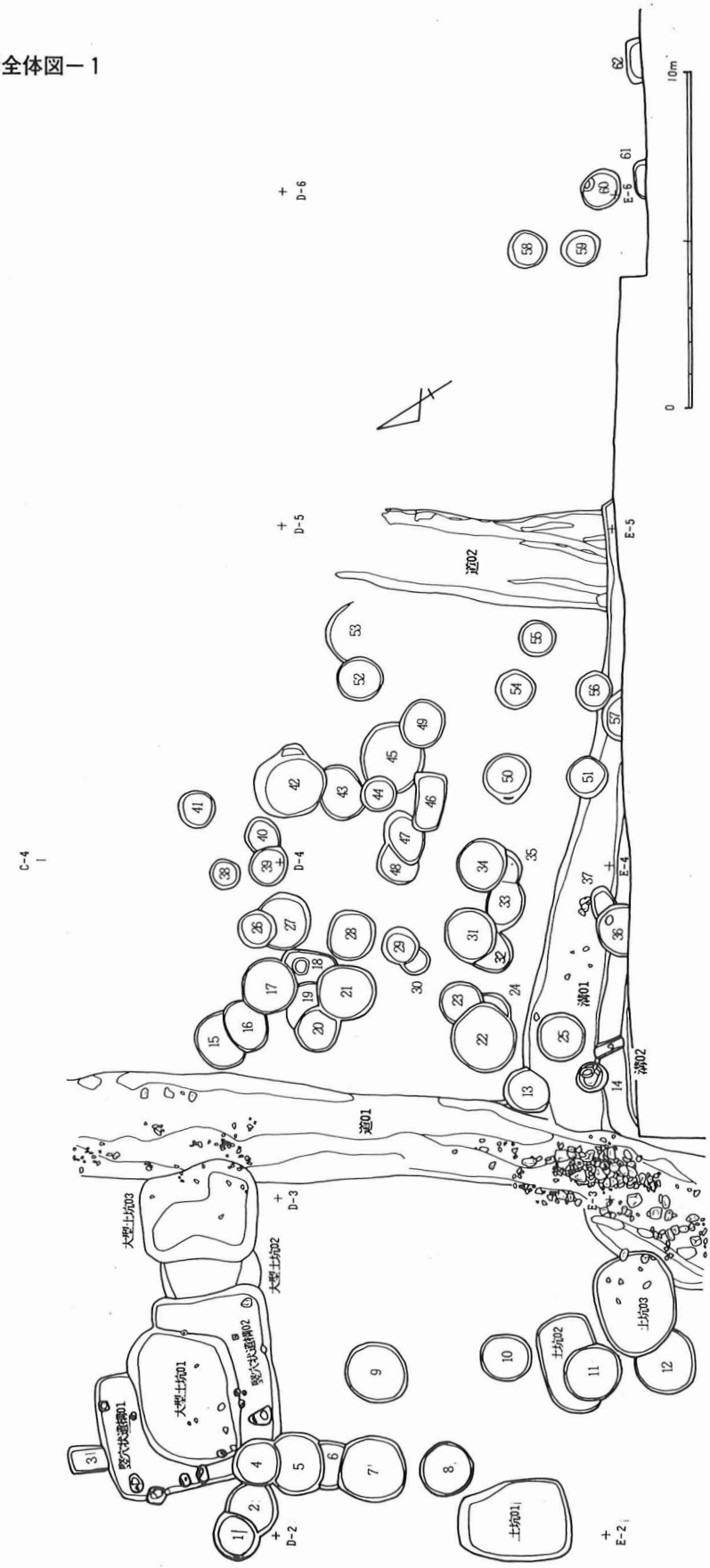
図－3　発掘調査区域図

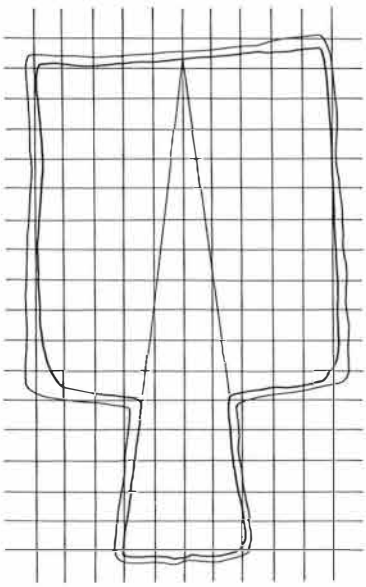


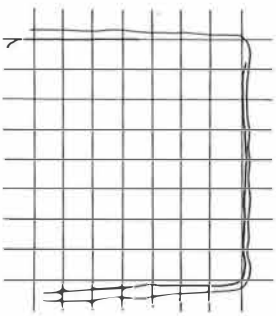
第3表　土坑計測表

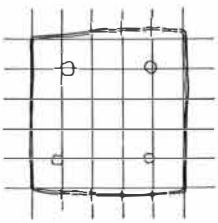
番号	形状	規　模	深	新　(→)　旧	番号	形状	規　模	深	新　(→)　旧
01	円形	120 × 106	23	01→02	32	円形	－×115	8	32←31
02	円形	(140) × 136	7	02←01・04	33	円形	135 ×106	9	不明 33←31　33－34　33→35
03	方形	(120) × 60	18	03→竪穴状遺構01	34	円形	147 ×139	30	34→35
04	円形	126 × 125	24	04→02・竪穴状遺構01 05・竪穴状遺構02	35	円形	－ ×－	9	35←33・34
05	円形	173×(160)	18	05←04　05→06	36	円形	138 ×－	10	36→37　36→溝01
06	円形	127 × －	16	06←05・07	37	方形	70 ×－	45	37←36　37←溝01
07	円形	191 × 178	19	07→06	38	円形	78 × 73	27	
08	円形	150 × 150	4		39	円形	113 × 98	19	不明 39－40
09	円形	174 × 162	13		40	円形	102 × 86	6	不明 40－39
10	円形	137 × 128	2.5		41	円形	98 × 94	14	
11	円形	163 × 146	14.5	11←土坑02	42	円形	176 ×115	26	42→43
12	円形	182 × 171	11	12←土坑03	43	円形	157 ×127	13	43←42　43→44
13	円形	122 × 114	22	不明 13 － 溝01	44	円形	95 × 93	29	44←43・45
14	円形	73 × 70	16	14→溝01	45	円形	197 ×174	22	45←47　45→44
15	円形	165 ×(140)	10	15←16	46	方形	157 × 78	49	不明 46－47
16	円形	153 × 118	12	16→15　16←17	47	円形	125 × 96	19	不明 47←48　47－46
17	円形	161 × 160	16	17→16・18・19	48	円形	127×(110)	7	48→47
18	方形	160 × 90	6	18←17　18→19・21	49	円形	134 ×119	18	49→45
19	円形	(142) × －	8	19←18・20　19←21	50	円形	123 ×117	20	
20	円形	131 × 115	10	20→19　20←21	51	円形	112 ×108	21	51→溝01
21	円形	157 × 148	12	21→19・20　21←18	52	円形	130 ×119	8	52→53
22	円形	205 × 183	16	22→23・24	53	円形	167 ×－	8	
23	円形	120 × 114	13	23←22・24	54	円形	102 ×100	4	
24	円形	－ × －	12	24→23　24←22	55	円形	95 × 94	5	
25	円形	132 × 125	27		56	円形	100 × 91	6	56→溝01
26	円形	92 × 91	39	26←27	57	円形	－ ×－	18	57→溝01
27	円形	152 × 150	15	27→26	58	円形	100 × 92	25	
28	円形	142 × 125	13		59	円形	96 × 84	9	
29	円形	93 × 78	15	29→30	60	円形	112 ×106	26	
30	円形	75 × －	12	30←29	61	方形	94 ×－	39	
31	円形	151 × 137	23	31→32・33	62	方形	102 ×－	26	

図－4　遺構全体図－1


C-4
D-2
D-3
D-4
D-5
D-6
E-2
E-3
E-4
E-5
E-6
大型土坑01
大型土坑02
大型土坑03
土坑01
土坑02
土坑03
道01
道02
溝01
溝02
0
10m

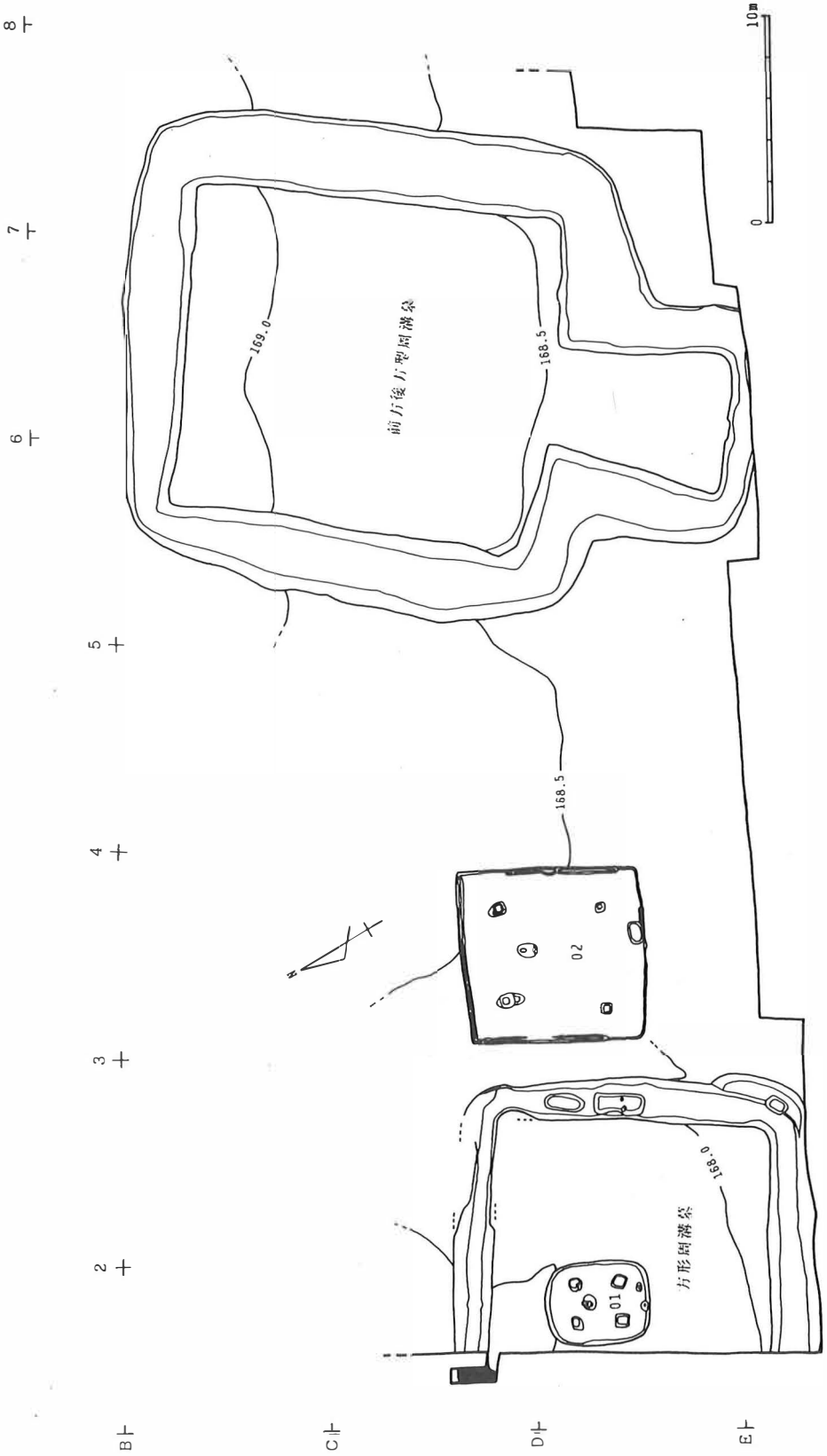


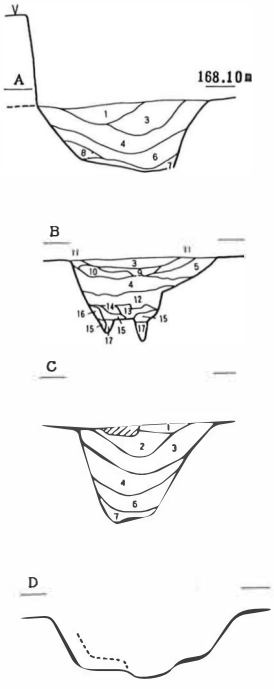




1方眼＝1尋(≒160cm)

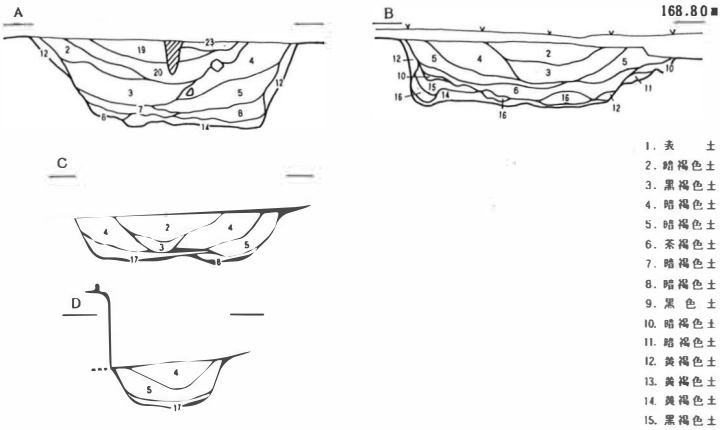
図－5　遺構全体図－2



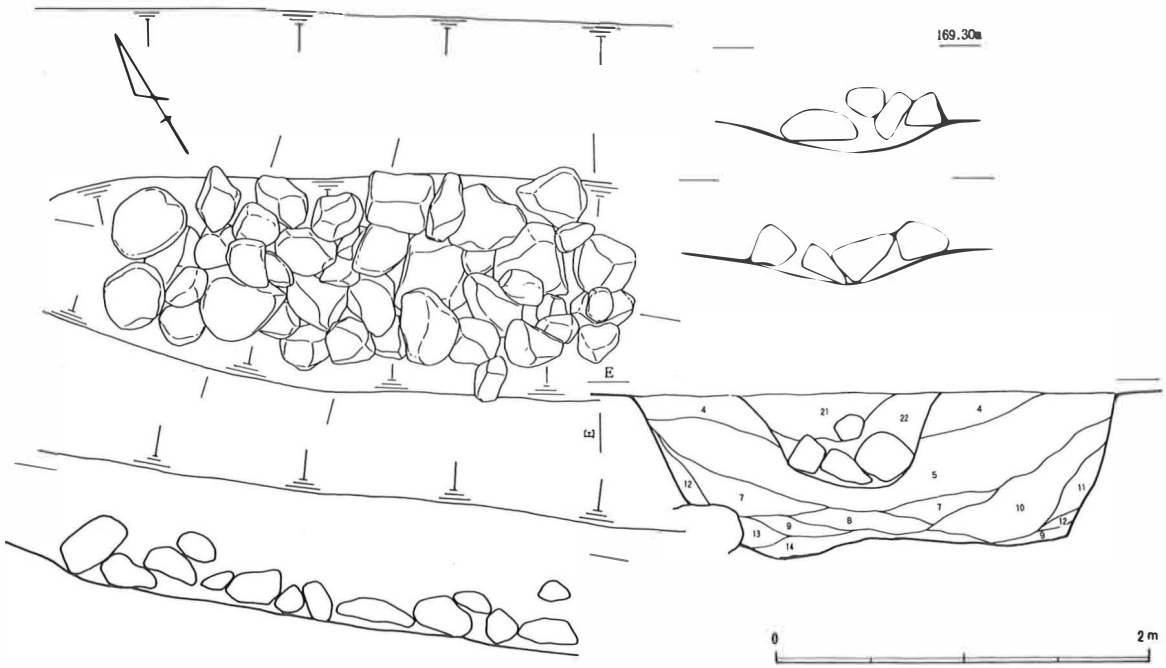


1．暗褐色土 （白色スコリア，橙色スコリア，粒子が細かい）
2．暗褐色土 （白色スコリア，橙色スコリア，φ5㎜の黒色スコリア，粒子粗い
3．暗褐色土 （橙色スコリアが多い，粒子は粗い）
4．暗褐色土 （栗色土ブロック，スコリアブロック）
5．暗褐色土 （橙色スコリア，黒色スコリア，少量の栗色土）
6．暗褐色土 （黒色土ブロック，橙色スコリア，φ1～2㎝のスコリア粒）
7．黄褐色土 （栗色土，ロームブロック，少量の黒色土ブロック）
8．暗褐色土 （φ5㎜の黒色スコリア，しまりは弱い）
9．黄褐色土 （黄褐色ロームが多い，粒子は粗い）
10．黄褐色土 （黄褐色ロームが多い，粒子は粗い）
11．褐 色 土 （9．10に類似，ロームの混入が減る）
12．黄褐色土 （黄褐色ロームブロック，粒子は粗い）
13．褐 色 土 （少量の橙色スコリア，黒色スコリア，粒子は粗い）
14．栗色土ブロック
15．黄褐色土 （黄褐色ロームブロック）
16．黄褐色ロームブロック
17．黄褐色土 （黄褐色ローム，褐色土，粒子は粗かい）

図－6　方形周溝墓実測図



1. 表　　土（耕作土）
2. 暗 褐 色 土（橙色スコリアを少量含む）
3. 黒 褐 色 土（橙色スコリア、黒色スコリア）
4. 暗 褐 色 土（スコリアの混入が多い、しまりが強い）
5. 暗 褐 色 土（スコリアの混入が非常に多い、ローム・ブロック）
6. 茶 褐 色 土（スコリアの混入が多い、粒子が細い、黒色土ブロック）
7. 暗 褐 色 土（スコリアの混入が少ない、しまりが弱い）
8. 暗 褐 色 土（スコリア、黄褐色ローム・ブロック）
9. 黒　色　土（黄褐色ローム・ブロック、炭化物）
10. 暗 褐 色 土（スコリアの混入が多い、しまりが弱い）
11. 暗 褐 色 土（スコリア、黄褐色ローム）
12. 黄 褐 色 土（黄褐色ローム、黒色土ブロック）
13. 黄 褐 色 土（黄褐色ローム、しまりが強い）
14. 黄 褐 色 土（黄褐色ローム・ブロック、しまりが弱い）
15. 黒 褐 色 土（黒褐色土、黄褐色ローム・ブロック、スコリア）
16. 灰黄褐色土（黄褐色ローム・ブロック、橙色スコリア、黒色土ブロック）
17. 暗 褐 色 土（黒褐色土ブロック、橙色スコリア）
18. 暗 褐 色 土（スコリアブロック、褐色土ブロック）
19. 黒 褐 色 土（橙色スコリア、粒子が細かい）
20. 黒 褐 色 土（橙色スコリア、粒子が細かい）
21. 黒 褐 色 土（黒色スコリア、橙色スコリア、粒子が細い）
22. 暗 褐 色 土（黒色スコリア、橙色スコリア、炭化物）
23. 褐　色　土（橙色スコリア少量、しまりが弱い）※中世遺構覆土



礫床実測図

図－7　前方後方型周溝墓実測図

図－8　竪穴住居跡01,02実測図

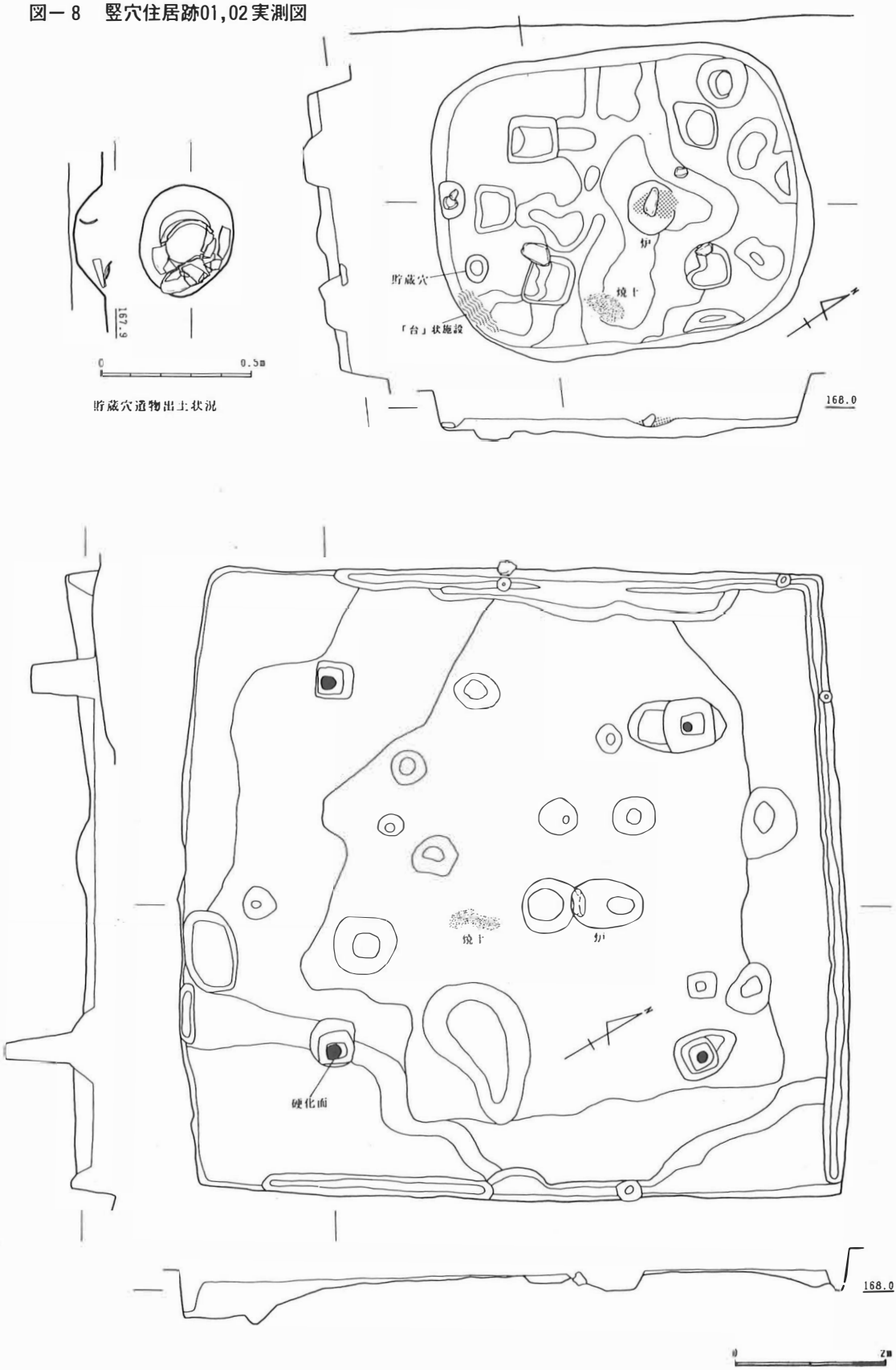


表4

番号	出土地点	器種 器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
1	竪穴住居跡01貯蔵穴	広頸壺 Eb	18.2 (7.1) —	胎土　細粒子、石英、長石を少量含む 色調　にぶい褐色 焼成　普通	外面　ハケメ調整→ヨコヘラナデ 内面　ヨコハケメ→ヨコヘラナデ 赤彩	口縁部全周、外面スス付着 転用土器
2	竪穴住居跡01	高　坏	— (3.8) 5.1	胎土　細粒子、石英、長石を少量含む 色調　外面赤褐色、内面(脚台部) 灰黄褐色 焼成　普通	外面　タテヘラミガキ（赤彩） 内面　ヨコハケメ（9本／cm） 坏部　赤彩	脚台部　1／3存
3	竪穴住居跡02	壺	— (14.3) —	胎土　黒色砂粒が目立つ、 長石を少量含む 色調　外面黄橙色～淡橙色、 内面橙色～にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ→ヘラミガキ？ 文様　列点文＋縄文（ℓ）＋S字状結節文 円形貼付文（2×3） 内面　ヨコハケメ　指頭押え	頸部全周
4	竪穴住居跡02	壺	— (13.5) —	胎土　黒色砂粒が目立つ、 長石を少量含む 色調　外面赤褐色～にぶい黄橙色 内面にぶい黄橙色、 焼成　普通	外面　ハケメ→ヘラミガキ（赤彩） 文様　擬縄文（12本／cm）＋縄文（L R） 横線文、S字状結節文 内面　ヨコハケメ（12本／cm）指頭押え 頸部　赤彩	胴部　1／4存
5	竪穴住居跡02柱穴内	壺	— (3.1) 7.3	胎土　石英、長石、 φ2～3㎜の小石を少量含む 色調　橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ　→　ヨコヘラミガキ 底部　一定方向のハケメ（12本／cm） 内面　ヨコナデ	底部　完存 内面摩耗
6	竪穴住居跡02	壺	— (19.8) —	胎土　長石少量、黒色砂粒を多く含む 色調　外面橙色～褐灰色、 内面にぶい黄褐色～灰黄褐色 焼成　普通	外面　ハケメ　→　ヨコヘラミガキ？ 内面　指頭押え　ヨコナデ 下位　ヨコハケメ→タテハケメ （12本／cm）	胴部　2／3存
7	竪穴住居跡02	壺	— (4.3) 8.0	胎土　石英、長石、砂粒が目立つ 色調　外面橙色、内面灰黄褐色 焼成　普通	外面　ヨコナデ、ヨコミガキ？ 底部　木葉痕 内面　ヘラナデ	底部完存
8	竪穴住居跡02	壺	— (5.9) 10.4	胎土　石英、長石、 砂粒が多い、きめが粗い 色調　橙色 焼成　普通	外面　ヨコヘラミガキ 底部　木葉痕 内面　ヨコハケメ（7本／cm）	底部　1／2存 外面　スス付着
9	竪穴住居跡02	台付 甕D	13.1 22.8 9.4	胎土　砂粒、長石を含みきめが粗い 色調　にぶい褐色～黒褐色、 焼成　普通	外面　口縁部　ヨコナデ 胴部　上位タテハケメ→ 中位ヨコハケメ←下位タテハケメ 脚台部　タテハケメ→ナデ 内面　口縁部　ヨコハケメ 胴部上位ハケメ→ヨコナデ下位 ヨコハケメ、タテハケメ 脚台部　ヨコハケメ（7~9本／cm）	完存 外面　1部スス付着
10	竪穴住居跡02	台付 甕D	15.4 (16.0) —	胎土　長石、砂粒、きめが粗い 色調　外面赤褐色 ～にぶい黄橙色、内面明褐色 焼成　普通	外面　口縁部　タテハケメ →胴部ヨコ、ナナメハケメ 内面　ヨコハケメ　胴部下位 タテハケメ→ヨコハケメ （9本／cm）	甕部　1／2存 外面　スス付着
11	竪穴住居跡02	台付甕	— (14.2) —	胎土　長石、砂粒、きめが粗い 色調　外面　灰褐色～褐色、 内面灰褐色 焼成　やや悪い	外面　タテハケメ　接合部　ヨコナデ（指頭） 内面　ヨコハケメ　（6本／cm）	甕部　下半部存 外面　スス付着
12	竪穴住居跡02	台付甕	— (10.3) —	胎土　長石の混入が多い　きめが粗い 色調　外面灰褐色 ～褐灰色、内面灰褐色～黒褐色 焼成　やや悪い	外面　ヨコ、ナナメハケメ（5本／cm） 内面　表面摩耗	甕部　1／3存

図－9　土器実測図－1

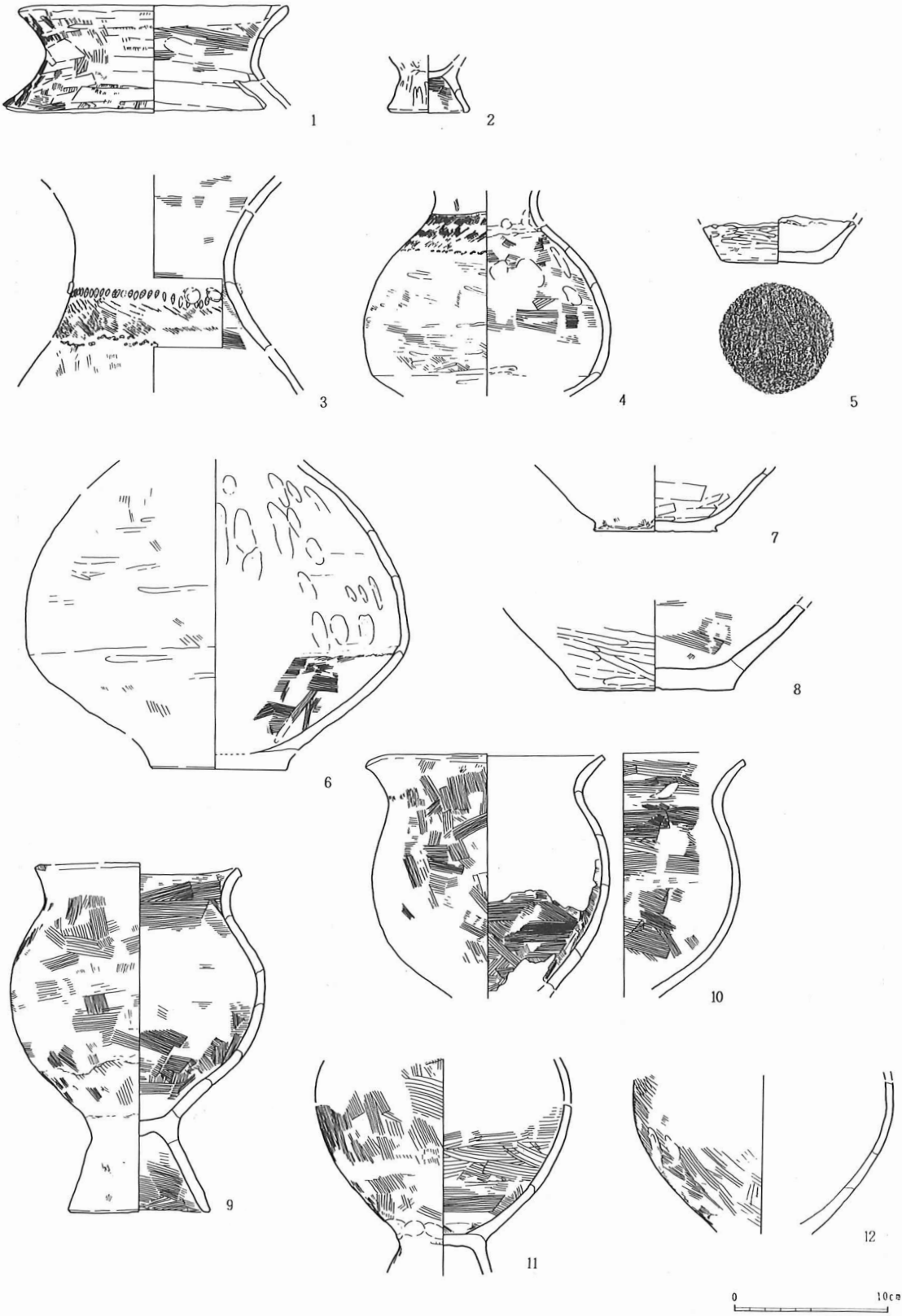


表5

番号	出土地点	器種 器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
13	竪穴住居跡02	台付甕	－ （7.7） －	胎土　石英、長石、砂を含む 色調　橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ　接合部　ヨコナデ 内面　（脚台部）　ヨコハケメ（7本／cm）	脚台部　1／3存
14	竪穴住居跡02	台付甕	－ （6.7） －	胎土　石英、長石を含む 色調　外面明黄褐色　内面にぶい橙色 焼成　やや悪い	外面　タテハケメ 内面　ヨコハケメ（5本／cm）	脚台部　1／3存 甕部内面タール状付着物
15	竪穴住居跡02	台付甕	－ （4.1） －	胎土　長石、石英を少量含む 色調　外面灰黄褐色、内面にぶい褐色 焼成　普通	外面　ナデ　脚台部　タテハケメ 内面　ナデ（ヘラ、指頭）脚台部　ヨコハケメ（7本／cm）	
16	竪穴住居跡02	台付甕A	－ （3.3） －	胎土　石英、長石、金雲母の混入が顕著、きめが粗い 色調　にぶい黄橙色 焼成　良好	外面　粗いナナメハケメ（5本／cm） 内面　ナデ（指頭）	
17	竪穴住居跡02	台付甕	－ （4.4） 7.6	胎土　石英、長石を含む、やややきめが粗い 色調　外面にぶい黄褐色、内面にぶい橙色 焼成　普通	外面　ハケメ→　ナデ 内面　ヨコ、ナナメ、ハケメ（8本／cm）	脚台部完存 外面　スス付着
18	竪穴住居跡02	（台付甕）	－ （6.3） 8.6	胎土　φ2～3mmの小石が目立つ、石英、長石を少量含む 色調　外面にぶい黄橙色～黒褐色、内面にぶい赤褐色 焼成　普通	外面　ヨコナデ 内面　ヨコハケメ　→　ヨコナデ	脚台部　1／2存 外面　赤彩
19	竪穴住居跡02	台付甕	－ （8.6） 12.4	胎土　石英、長石、砂を含む、きめがやや粗い 色調　外面にぶい褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ（12本／cm）接合部ヨコナデ 内面　ヨコナデ	脚台部　1／3存
20	竪穴住居跡02	台付甕	－ （9.5） 13.2	胎土　石英、長石を含む、きめが細かい 色調　外面にぶい黄橙色～灰黄褐色、内面灰褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ→ナデ 内面　ヨコハケメ（8本／cm） 脚台部ヨコヘラナデ	脚台部　ほぼ完存 脚台端部　粘土紐付加
21	竪穴住居跡02 前方後方型周溝墓 東くびれ部	高坏A	－ （9.1） －	胎土　石英、長石を含む、金雲母を少量含む 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　タテヘラミガキ　脚台部、横線文、円孔 内面　表面摩耗	
22	竪穴住居跡02	高坏E	20.0 （6.6） －	胎土　砂粒を含む、きめは細かい 色調　橙色 焼成　良好	外面　タテヘラミガキ 内面　タテヘラミガキ	坏部　1／4存
23	竪穴住居跡02 貯蔵穴	高　坏	（5.9） 12.7	胎土　砂粒を少量含む、きめは細かい 色調　にぶい橙色 焼成　良好	外面　ヨコヘラミガキ、タテヘラミガキ＋横線文 円孔(3) 内面　ヨコナデ	脚台部ほぼ完存
24	竪穴住居跡02	高　坏	－ （5.5） 11.8	胎土　黒色砂粒を含む、きめは細かい 色調　にぶい黄橙色～橙色 焼成　普通	外面　タテヘラミガキ→ヨコヘラミガキ　円孔(4) 内面　ヨコヘラミガキ	脚台部　2／3存
25	竪穴住居跡02	高坏D	15.5 （2.4） －	胎土　緻密できめが細かい 色調　明赤褐色 焼成　良好	外面　タテヘラミガキ 内面　ナナメヘラミガキ	26と同一個体
26	竪穴住居跡02	高坏D	－ （2.6） 12.6	胎土　緻密できめが細かい 色調　明赤褐色 焼成　良好	外面　タテヘラミガキ、円孔 内面　ヨコハケメ（5本／cm）→ヨコナデ	25と同一個体
27	竪穴住居跡02 貯蔵穴 方形周溝墓東溝	小型 高坏	－ （2.6） 16.8	胎土　石英、長石を少量含む 色調　外面明黄褐色、内面明褐色 焼成　良好	外面　タテヘラミガキ横線文＋刺突文 円孔(4) 内面　ヨコハケメ（15本／cm）＋ヨコナデ	脚台部　1／3存
28	竪穴住居跡02 貯蔵穴	小型 高坏	－ （2.5） 17.0	胎土　石英、長石を少量含む、きめは細かい 色調　明褐色 焼成　良好	外面　タテヘラミガキ横線文＋刺突文 円孔 内面　ヨコハケメ＋ヨコナデ	
29	竪穴住居跡02	小　型 高坏Aa	9.6 － －	胎土　石英、長石を少量含み、きめは細かい 色調　にぶい黄褐色～橙色 焼成　普通	外面　横線文　円孔(4) 内面　坏部　ヘラミガキ	接合部完存
30	竪穴住居跡02	高　坏	－ （6.8） 9.8	胎土　石英、長石を含む、きめは細かい 色調　にぶい橙色～橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ→タテミガキ、円孔(3) 内面　ヨコハケメ　（8本／cm）→粗いナデ	脚台部ほぼ完存
31	竪穴住居跡02	高　坏	－ （4.5） 11.2	胎土　石英、長石を含む、きめは細かい 色調　橙色 焼成　良好	外面　タテヘラミガキ　円孔 内面ヨコハケメ（6本／cm）→ヨコナデ	
32	竪穴住居跡02	高坏?	－ （7.0） 20.0	胎土　細かい石英、長石、砂を含む 色調　外面にぶい褐色、内面にぶい赤褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ→粗いナデ？ 内面　ヨコハケメ　（7～9本/cm）	

図－10　土器実測図－２

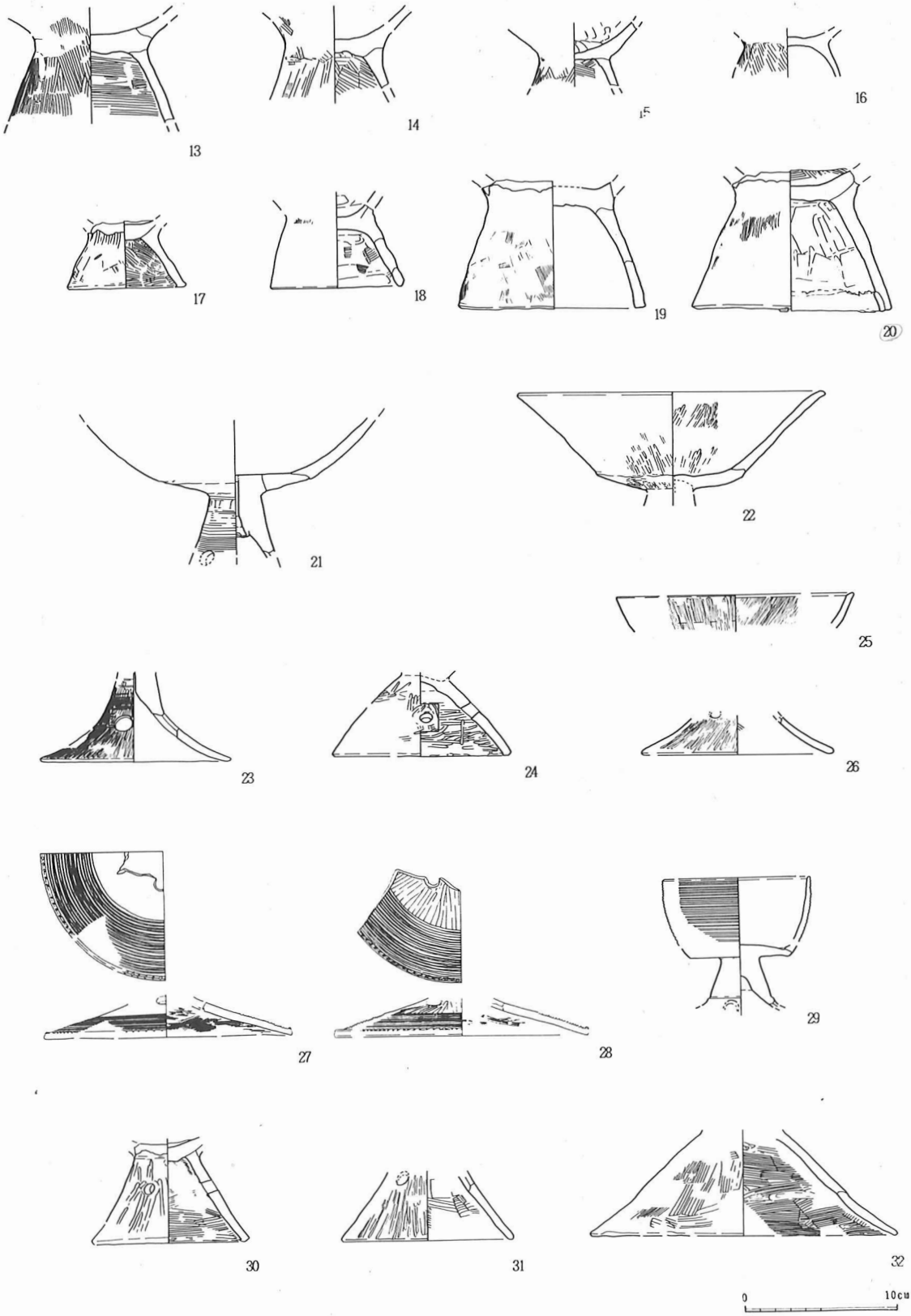


表6

番号	出土地点	器種 器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
33	竪穴住居跡02	平底甕 F	13.7 15.4 2.5	胎土　φ1～2㎜の石英、長石を多く含み、金雲母を含む 色調　褐色 焼成　普通	外面　口縁部　ヨコナデ 胴部　浅いタテハケメ 内面　口縁部　ヨコナデ 胴部　ヨコ、ナナメヘラケヅリ	1／3存
34	竪穴住居跡02 貯蔵穴	壺	－ 1.6 －	胎土　長石の混入が目立つ石英を少量含む 色調　外面橙色、内面にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　横線文＋波線文 内面　指頭押え	
35	竪穴住居跡02	平底甕 E	－ (4.5) 4.3	胎土　φ1～2㎜の石英を多く含む 色調　浅黄橙色 焼成　普通	外面　タタキ（左下り） 内面　ヨコナデ	底部完存 外面　1部スス付着 76と同一個体
36	竪穴住居跡02	手捏ね 土器？ (高坏)	－ (5.9) －	胎土　長石、細砂粒の多く含む 色調　橙色 焼成　普通	外面　粗いタテヘラミガキ	
37	竪穴住居跡02	手捏ね 土器	－ (1.7) 2.0	胎土　石英、長石を含む 色調　外面にぶい黄橙色、内面暗赤褐色 焼成　普通	外面　指頭押え　ナデ　凹み底 内面　赤彩	
38	竪穴住居跡02	壺	－ (2.1) 4.9	胎土　長石、細砂粒を含む 色調　外面橙色、内面にぶい赤褐色 焼成　普通	外面　ヨコナデ＋指頭押え 内面　ナデ	底部完存
39	竪穴住居跡02	小型 土器	－ (1.4) 3.5	胎土　石英、長石を少量含む 色調　外面橙色　内面黒褐色 焼成　普通	外面　ナデ（指頭）　凹み底 内面　ヘラナデ？	底部完存
40	竪穴住居跡02	台付 甕？	－ (3.1) 4.1	胎土　石英、長石を含む、砂を少量含む 色調　橙色 焼成　普通	外面　ナデ（指頭）→タテハケメ（8本／㎝） 内面　ナデ（指頭）	脚台部完存
41	竪穴住居跡02	鉢E	9.2 7.8 3.2	胎土　石英、長石を少量含む きめは粗い 色調　外面灰黄褐色～黒色、内面灰褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ（5本／㎝）口縁部　ヨコナデ 文様　ヨコナデ→波線文、凹み底 内面　口縁部　ヨコナデ 胴部　ナナメナデ←下位ヘラケヅリ	1／2存
42	竪穴住居跡02	平底甕 (鉢)	－ (5.1) 4.8	胎土　細かい石英、長石の混入が多い 色調　外面黒褐色～褐色、内面にぶい褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ（8本／㎝） 内面　ヨコナデ	底部　1／2存 外面　スス付着
43	竪穴住居跡02	平底甕 (鉢)	－ (2.1) 4.4	胎土　長石、細砂粒を多く含む 色調　外面にぶい褐色、内面橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ（7～8本／㎝） 内面　ナデ	
44	竪穴住居跡02 方形周溝墓南東屈曲部	手焙形 土器	17.4 (10.5) －	胎土　石英、長石を少量含む きめは細かい 色調　外面褐色～にぶい橙色、内面にぶい褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ（7本／㎝）突帯文＋刺突文 内面　ヨコヘラナデ	蔵部　1／3存
45	方形周溝墓南溝	壺Ａｂ	16.4 (4.2) －	胎土　黒色砂粒を多く含む、きめが細かい 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　タテヘラミガキ 内面　タテヘラミガキ	46と同一個体
46	方形周溝墓南溝	壺	－ (11.6) 11.7	胎土　黒色砂粒を含む 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　ヘラミガキ　赤彩　底部木葉痕 内面　上位　ヨコナデ　下位　ヨコハケメ（7本／㎝）	底部　2／3存 外面　スス付着 45と同一個体
47	方形周溝墓北溝	壺D	16.3 (3.7) －	胎土　黒色砂粒、砂を含む、きめは細かい 色調　外面橙色、内面にぶい橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ　口唇部ヨコハケメ指頭押え 内面　ヨコハケメ（7本／㎝）	
48	方形周溝墓南溝	壺Ｅａ	14.3 (4.3) －	胎土　黒色砂粒の混入が目立つ、きめは細かい 色調　橙色 焼成　普通	外面　タテヘラミガキ 内面　ヨコハケメ（6～8本／㎝）→粗いナデ	
49	方形周溝墓北溝	壺	－ (2.3) 7.4	胎土　黒色砂粒の混入が多い、きめが粗い 色調　外面橙色、内面にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　タテヘラミガキ 底部木葉痕→ヘラミガキ 内面　ヨコハケメ→ナデ（指頭）	1／4存 底部
50	方形周溝墓南溝	壺	－ (1.7) 5.7	胎土　石英、長石を含む、粒子が粗い 色調　外面にぶい黄褐色～にぶい黄橙色、内面にぶい褐色 焼成　普通	外面　ナデ＋指頭押え　凹み底 内面　ナデ	
51	方形周溝墓南東屈曲部	壺G？	－ (1.6) 3.0	胎土　やや粗い石英、長石を含む 色調　外面にぶい橙色、内面にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　ヘラミガキ？　凹み底 内面　ナデ（指頭）	
52	方形周溝墓南溝	台付甕 D	9.2 (4.1) －	胎土　砂粒の混入が目立つ、きめが粗い 色調　にぶい橙色 焼成　やや悪い	外面　口縁部タテハケメ→ナデ　胴部ヨコハケメ（9本/㎝） 内面　口縁部ヨコナデ 頸部ヨコハケメ　胴部ナデ（指頭）	底部完存

図－11　土器実測図－3

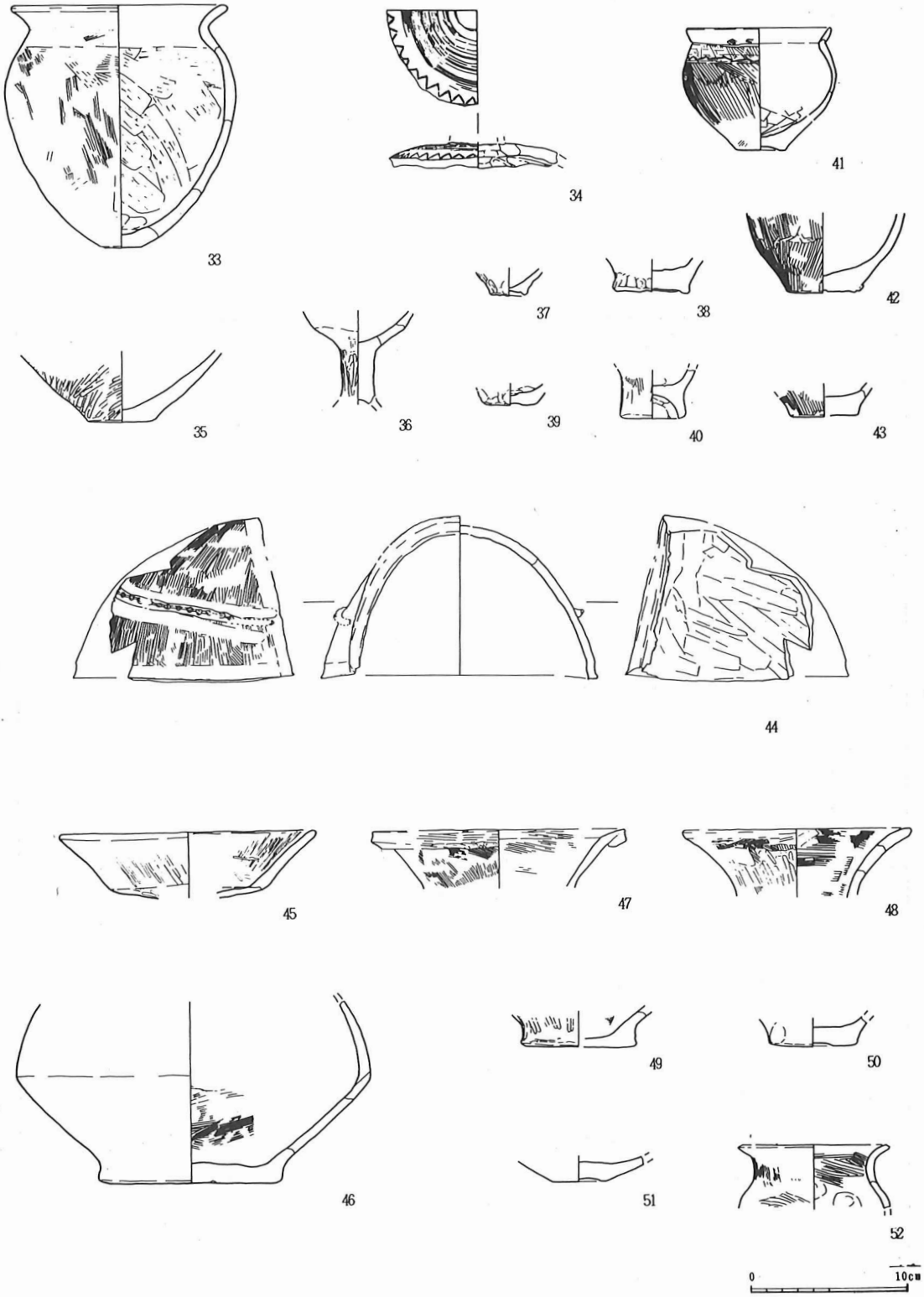
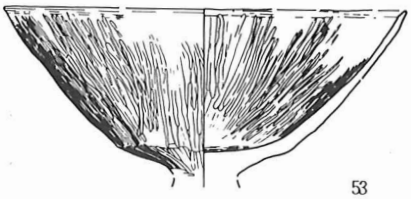
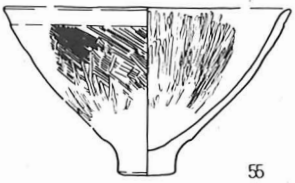


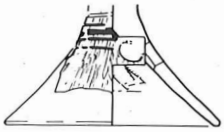
表7

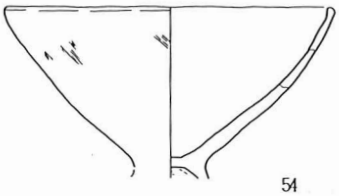
番号	出土地点	器種 器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
53	前方後方型周溝墓 前方部南東屈曲部	高坏A	21.8 (8.9) -	胎土　石英、長石を含み、 きめがやや粗い 色調　赤褐色 焼成　やや悪い	外面　ハケメ→丁寧なタテヘラミガキ（赤彩） 内面　ハケメ→丁寧なタテヘラミガキ 底部一方向のヘラミガキ（赤彩）	坏部完存
54	前方後方型周溝墓 前方部南東屈曲部	高坏F	17.1 (8.9) -	胎土　小石の混入が多い 色調　黄褐色 焼成　やや悪い	外面　ハケメ→ヘラミガキ 内面　ハケメ→ヘラミガキ（赤彩）	坏部完存
55	前方後方型周溝墓 前方部南東屈曲部	鉢　F	15.2 8.9 3.1	胎土　φ1㎜の小石を多く含む 色調　橙色 焼成　普通	外面　ナナメハケメ（8本／㎝） →タテヘラミガキ口唇部ヨコナデ 内面　タテミガキ（赤彩）	1／3存
56	前方後方型周溝墓 前方部南東屈曲部	高　坏	- (6.4) 11.4	胎土　小石、長石の混入が目立つ 色調　赤褐色 焼成　普通	外面　ハケメ→タテヘラミガキ　横線文　円孔(3) 内面　ヨコナデ	1／4存
57	前方後方型周溝墓 前方部南東屈曲部	高　坏	- (3.5) 17.8	胎土　緻密でφ1～2㎜の小石を含む 色調　橙色 焼成　普通	外面　タテヘラミガキ（赤彩） 内面　ヨコハケメ（8本／㎝）→ナデ	脚台部　1／3存
58	前方後方型周溝墓 前方部南東屈曲部	高　坏	- (4.0) 9.7	胎土　砂粒の混入が目立つ 色調　赤褐色 焼成　やや悪い	外面　ハケメ→タテヘラミガキ　円孔 内面　ヨコハケメ（6~7本／㎝）→粗いナデ	1／4存
59	前方後方型周溝墓 西溝	壺Ｅｅ	16.7 (6.5) -	胎土　砂粒、角閃石の細粒を含む 色調　橙色 焼成　良好	外面　口縁部　ナデ　胴部　ヨコヘラミガキ 突帯文＋刺突文 内面　ナデ　接合痕	
60	前方後方型周溝墓 西くびれ部	小壷Ｂ	- (8.5) 6.0	胎土　小石の混入が目立つ 色調　黄褐色～赤褐色、、 焼成　普通	外面　ハケメ→赤彩 内面　ヨコハケメ（8本／㎝） →ヨコナデ、巻き上げ痕	口縁部欠損 胴部　穿孔
61	前方後方型周溝墓 西溝	高　坏	- (7.5) 10.4	胎土　小石の混入が目立ち、 きめが粗い 色調　黄褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ（14本／㎝）→タテミガキ 内面　ヨコハケメ　→　ナナメヘラナデ	脚台部完存
62	前方後方型周溝墓 西溝	小型 土器F	9.3 (4.8) -	胎土　砂粒を少量含み緻密 色調　外面黄橙色～黄褐色、内面黄橙色 焼成　普通	外面　口縁部ヨコナデ→刺突文 胴部ナナメハケメ（5本／4㎝）ヨコハケメ 内面　ナナメヘラナデ	87と同一個体
63	前方後方型周溝墓 西溝	受口系 口縁甕	14.6 (1.8) -	胎土　石英、長石、砂粒の混入が多い 色調　褐色 焼成　普通	外面　ヨコナデ　→　刺突文 内面　ヨコナデ	
64	前方後方型周溝墓 西溝	手捏ね 土器	- (1.6) 3.2	胎土　石英、長石の混入が目立つ 色調　外面黒褐色、内面橙色 焼成　普通	外面　粗いナデ 内面　ナデ（指頭）	底部　1／4存
65	前方後方型周溝墓 東溝	壺G	- (12.1) -	胎土　φ1～2㎜の小石を多く含む 色調　外面橙色～赤褐色、内面橙色 焼成　悪い	外面　波線文＋横線文 内面　部分的にハケメ、指頭押えが残る	胴部完存　89と同一個体 底部穿孔 内外面の摩耗が著しい
66	前方後方型周溝墓 東溝	広頸壺 Ｅａ	- (7.2) -	胎土　石英、長石を含む、きめは細かい 色調　外面橙色、内面橙色～黒褐色 焼成　普通	外面　タテヘラミガキ 内面　ヨコハケメ（7本／㎝）ナデ（指頭） 口縁部　タテヘラミガキ	
67	前方後方型周溝墓 東溝	高　坏	- (4.4) -	胎土　砂粒を含み、ややきめが粗い 色調　灰褐色～にぶい橙色 焼成　やや悪い	外面　横線文	
68	前方後方型周溝墓 東溝	高　坏	- (4.0) -	胎土　長石を少量含み緻密 色調　にぶい橙色 焼成　普通	外面　タテヘラミガキ 内面　ハケメ　→　ナデ	
69	前方後方型周溝墓 東溝	台付甕	- 3.8 -	胎土　砂粒を含む　きめが細かい 色調　外面にぶい橙色、 内面にぶい橙色～赤灰色 焼成　やや悪い	外面　ナデ？ 内面　ナデ	

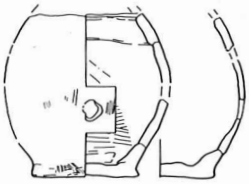
図ー12　土器実測図ー4

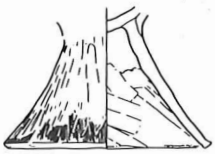


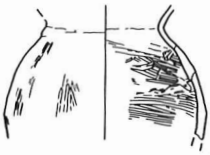












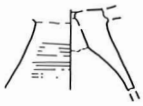
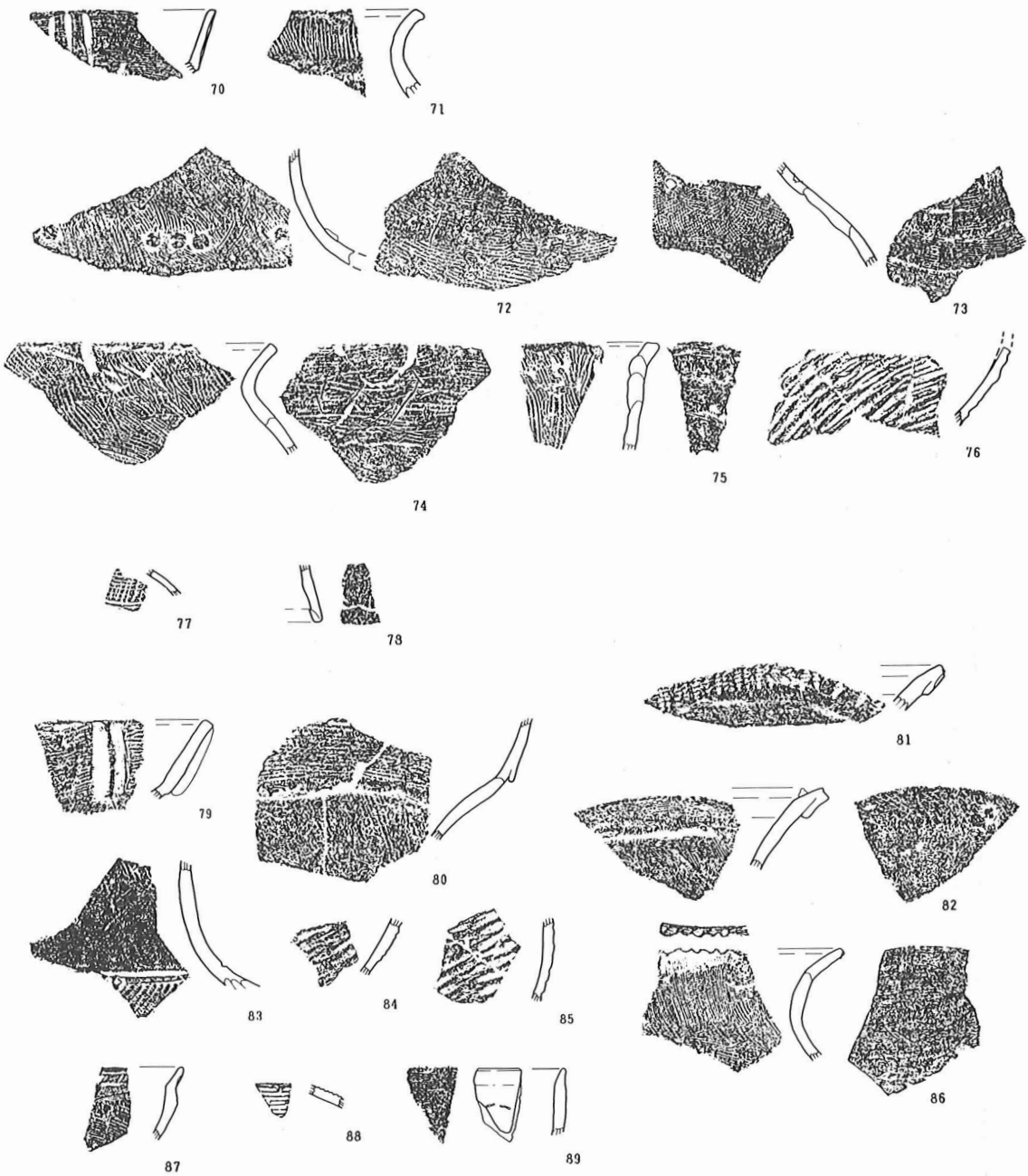


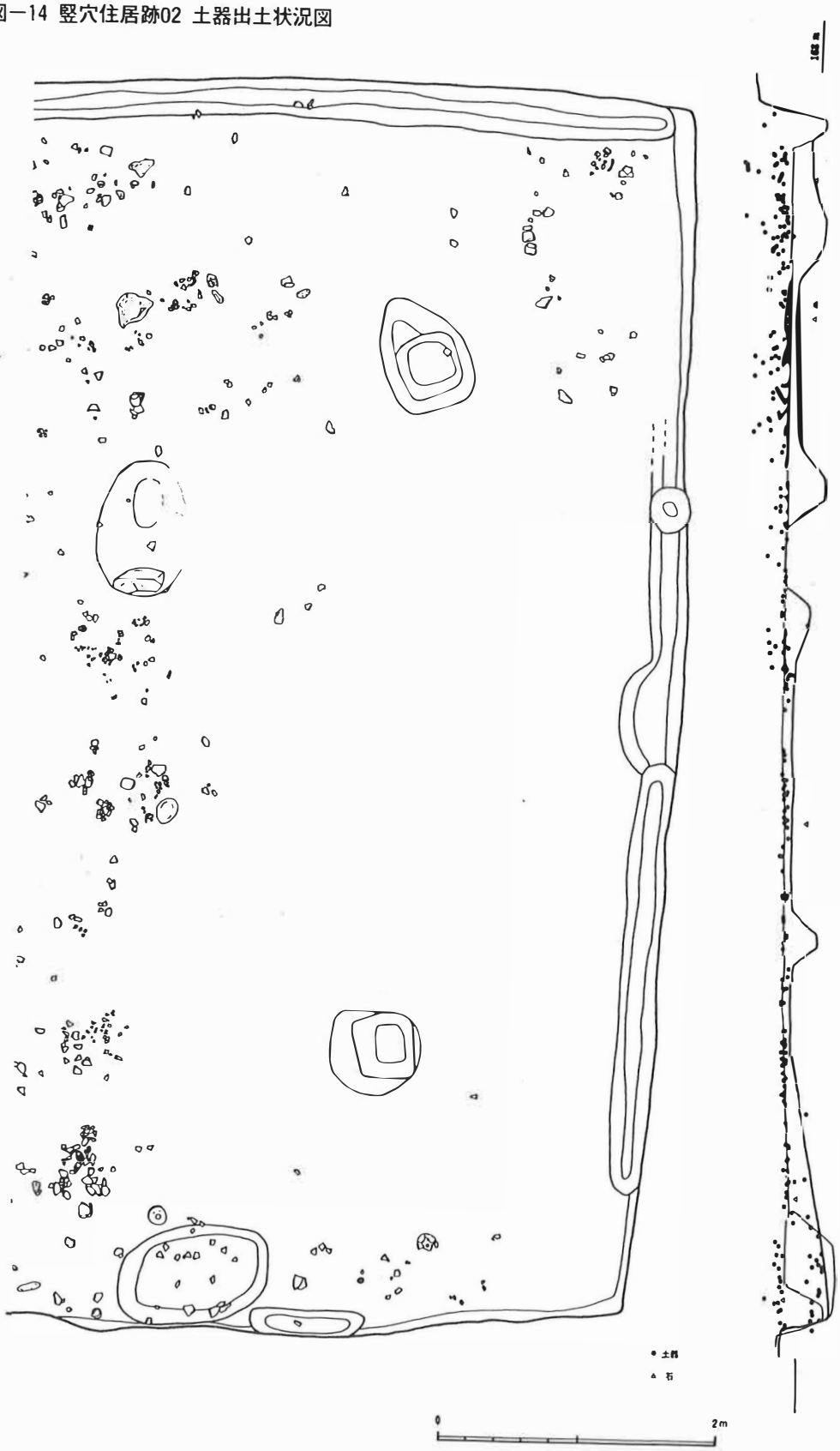
表8

番号	出土地点	器種 器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
70	竪穴住居跡01	壺B		胎土　石英、長石を含む、きめが細かい 色調　にぶい橙色 焼成　普通	外面　ヨコナデ　＋　刺突文 内面　赤彩	
71	竪穴住居跡01	甕D		胎土　砂粒を含み、緻密 色調　外面にぶい橙色　内面褐灰色 焼成　普通	外面　タテハケメ（6本／cm）→　ヨコナデ 内面　ヨコヘラミガキ	
72	竪穴住居跡02	壺		胎土　黒色砂粒を中心として砂の混入が多い 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　ハケメ→タテヘラミガキ（赤彩）貼付文（3×） 内面　ヨコハケメ（6本／cm）上位赤彩	
73	竪穴住居跡02	壺		胎土　長石を少量含む　きめは細かい 色調　外面にぶい黄橙色 内面にぶい橙色 焼成　普通	外面　ヘラミガキ　文様、縄文（LR）刺突文 内面　ヨコハケメ（11本／cm） 巻き上げ痕を残す	
74	竪穴住居跡02	甕D		胎土　石英、長石、黒色砂粒を含む 色調　外面黒褐色、内面褐色 焼成　普通	外面　タテ、ナナメハケメ（6本／cm） 内面　ヨコハケメ→ヨコナデ 口縁部ヨコハケメ→ヨコナデ	
75	竪穴住居跡02	手捏ね土器？		胎土　石英、長石を含む、きめは粗い 色調　外面にぶい黄褐色、 内面灰黄褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ（7本／cm） 内面　ナデ　巻き上げ痕を残す	
76	竪穴住居跡02	平底甕 E		胎土　φ1㎜の石英の混入が目立つ 色調　外面浅黄橙色、内面淡黄色 焼成　普通	外面　タタキ 内面　ナデ	35と同一個体 外面　スス付着
77	方形周溝墓北溝	台付甕 A		胎土　長石、石英、金雲母を含む 色調　橙色 焼成　良好	外面　タテハケメ→ヨコハケメ（6本／cm） 内面　ナデ	
78	方形周溝墓北溝	台付甕 A		胎土　長石、石英、金雲母を含む 色調　外面明褐色、内面明赤褐色 焼成　良好	外面　ナデ 内面　ナデ	
79	前方後方型周溝墓 西溝	壺B		胎土　石英、長石、小石を含む 色調　にぶい橙色 焼成　普通	外面　ヨコハケメ（8本／cm）→貼付文 内面　赤彩	
80	前方後方型周溝墓 西溝	壺B		胎土　φ2～3㎜の小石の混入が目立つ 色調　橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ　口唇部　ヨコハケメ（6本／cm） 内面　ヨコハケメ　→　ヘラミガキ？	
81	前方後方型周溝墓 西溝	壺D		胎土　石英、小石を含む、きめは粗い 色調　橙色 焼成　普通	外面　赤彩　刺突文 内面　赤彩　一部ハケメが残る	
82	前方後方型周溝墓 西溝	壺D		胎土　砂粒を含みきめがやや粗い 色調　橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ 口唇部ヨコハケメ（8本／cm） 内面　赤彩・口唇部 縄文（RL）＋貼付文	
83	前方後方型周溝墓 西溝	壺		胎土　黒色砂粒の混入が目立つ 色調　橙色 焼成　普通	外面　横線文＋縄文（LR）貼付文	
84	前方後方型周溝墓 東溝	平底甕 E		胎土　φ1㎜の石英の混入が目立つ 色調　外面浅黄橙色、内面淡黄色 焼成　普通	外面　タタキ 内面　ナデ	85と同一個体
85	前方後方型周溝墓 東溝	平底甕 E		胎土　φ1㎜の石英の混入が目立つ 色調　外面浅黄橙色、内面淡黄色 焼成　普通	外面　タタキ 内面　ナデ	84と同一個体
86	前方後方型周溝墓 東溝	甕D		胎土　石英、長石を含む　きめは粗い 色調　外面橙色～にぶい黄橙色、 内面赤褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ（11本／cm）口唇部　刺突文 内面　ヨコヘラミガキ	外面　スス付着
87	前方後方型周溝墓 東くびれ部	小型 土器F		胎土　長石、砂粒を含む 色調　外面にぶい橙色、内面橙色 焼成　普通	外面　ナナメハケメ→ヨコハケメ（5本/4㎜） 口縁部　ヨコナデ→刺突文 内面　ナデ	62と同一個体
88	前方後方型周溝墓 西溝	小型 高坏		胎土　石英、長石を少量含む 粒子は細かい 色調　外面明赤褐色、内面明褐色 焼成　良好	外面　横線文 内面　細かいハケメ＋ナデ	
89	前方後方型周溝墓 東溝	壺G		胎土　φ1～2㎜の小石を多く含む 色調　橙色 焼成　悪い	外面　波線文	65と同一個体

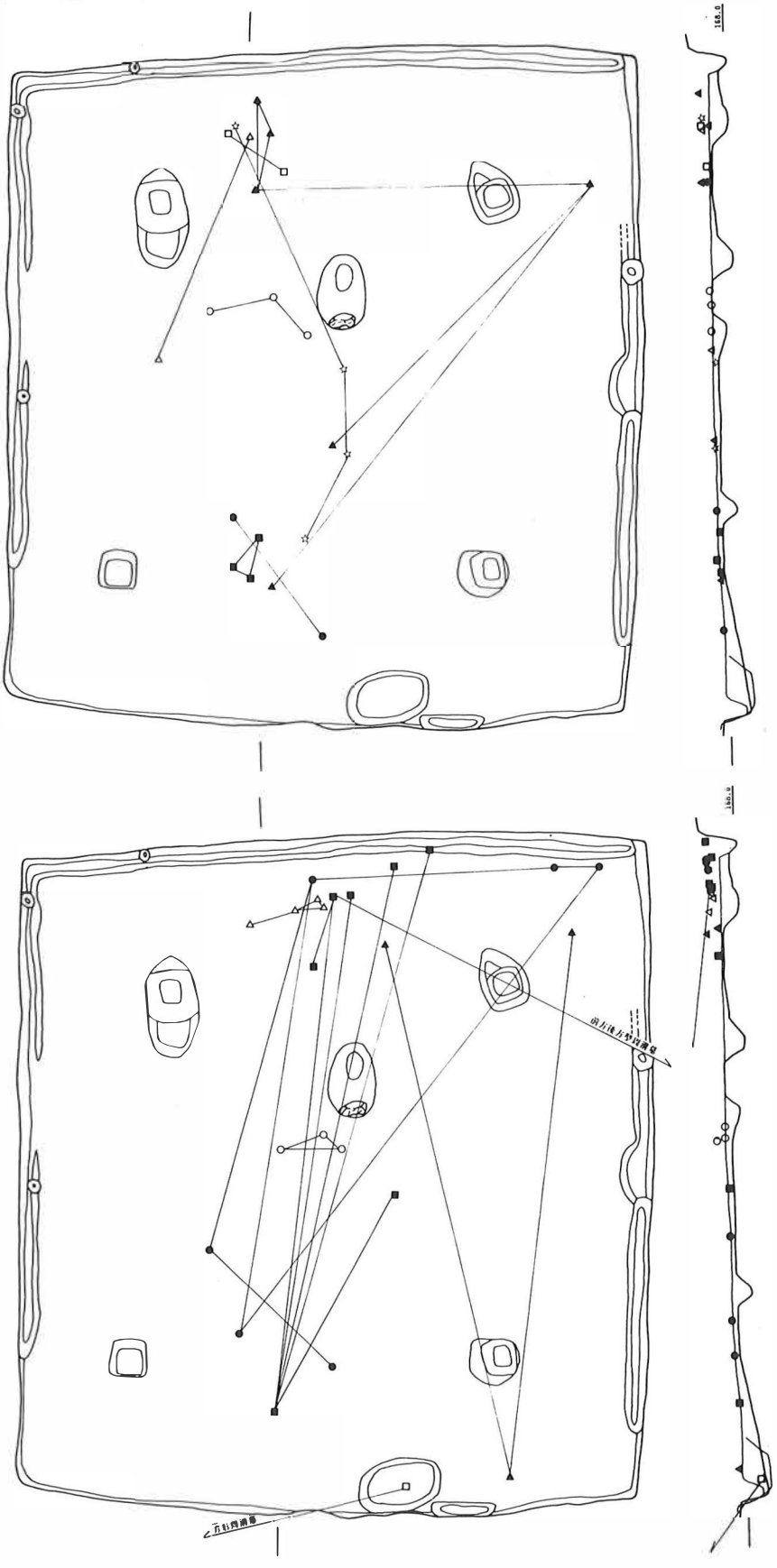
図－13　土器拓影図

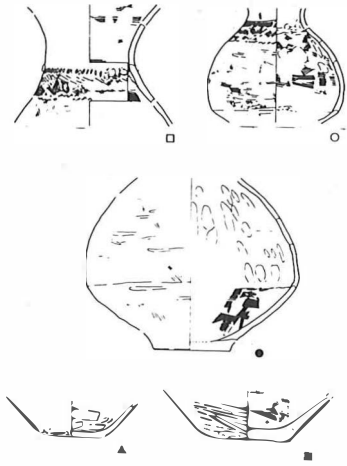


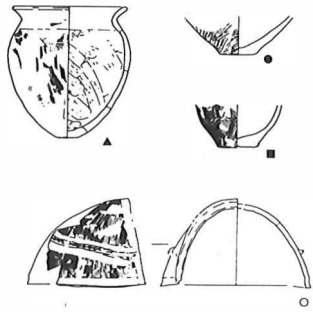
図ー14 竪穴住居跡02 土器出土状況図



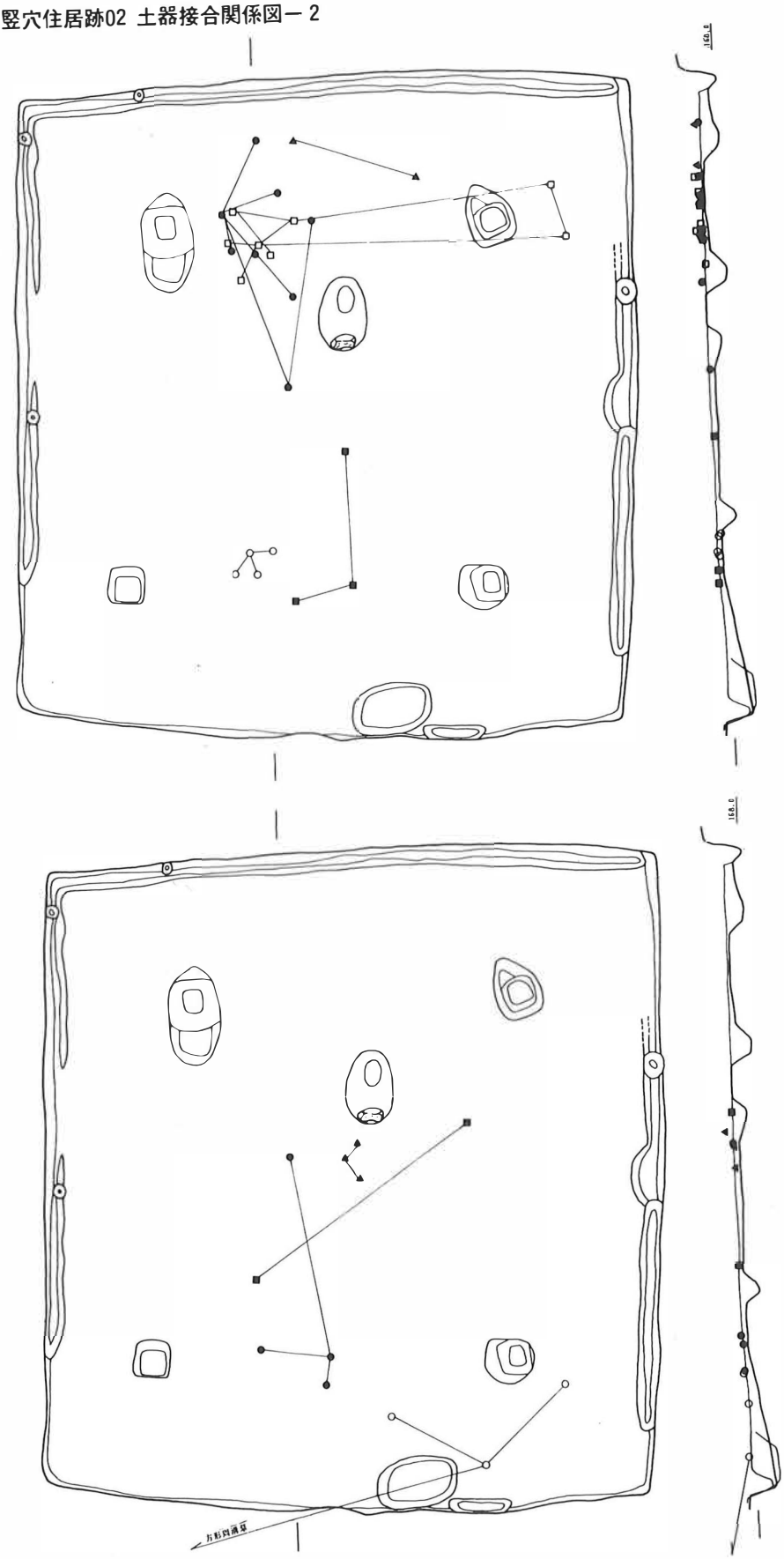
図－15　竪穴住居跡02 土器接合関係図－1

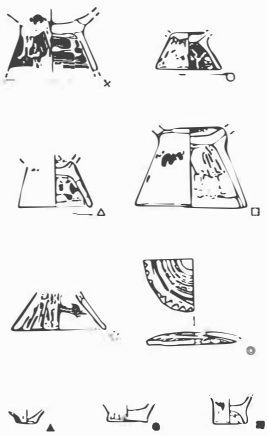


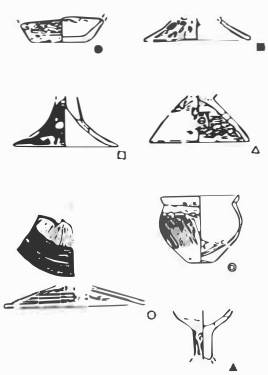




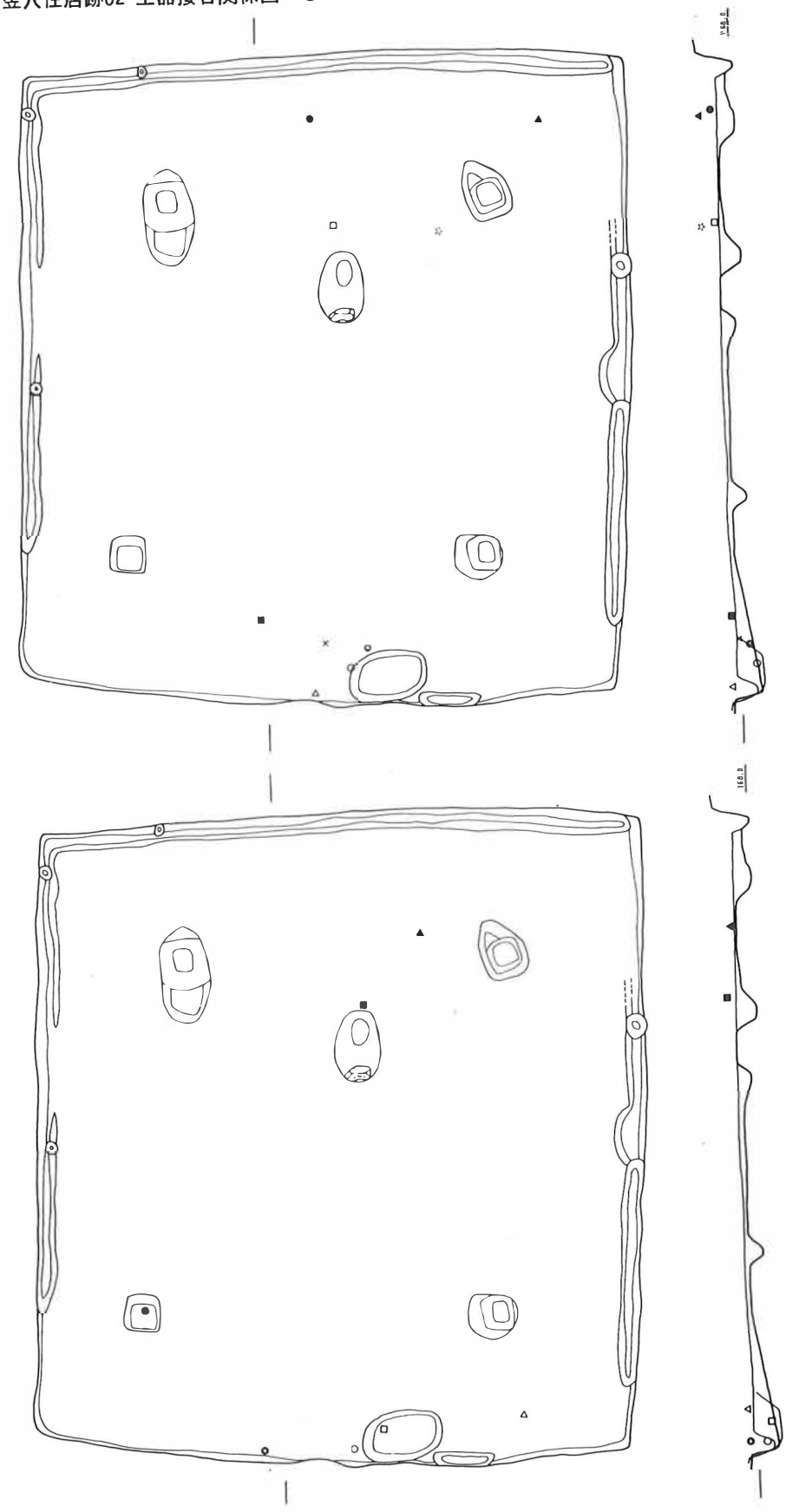
図－16　竪穴住居跡02 土器接合関係図－2

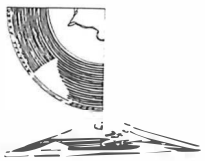




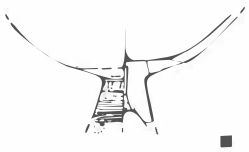


図－17　竪穴住居跡02 土器接合関係図－3

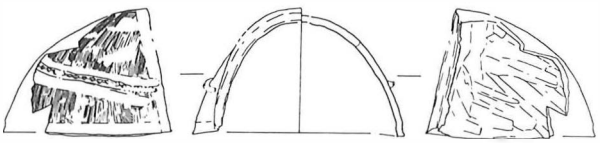




□

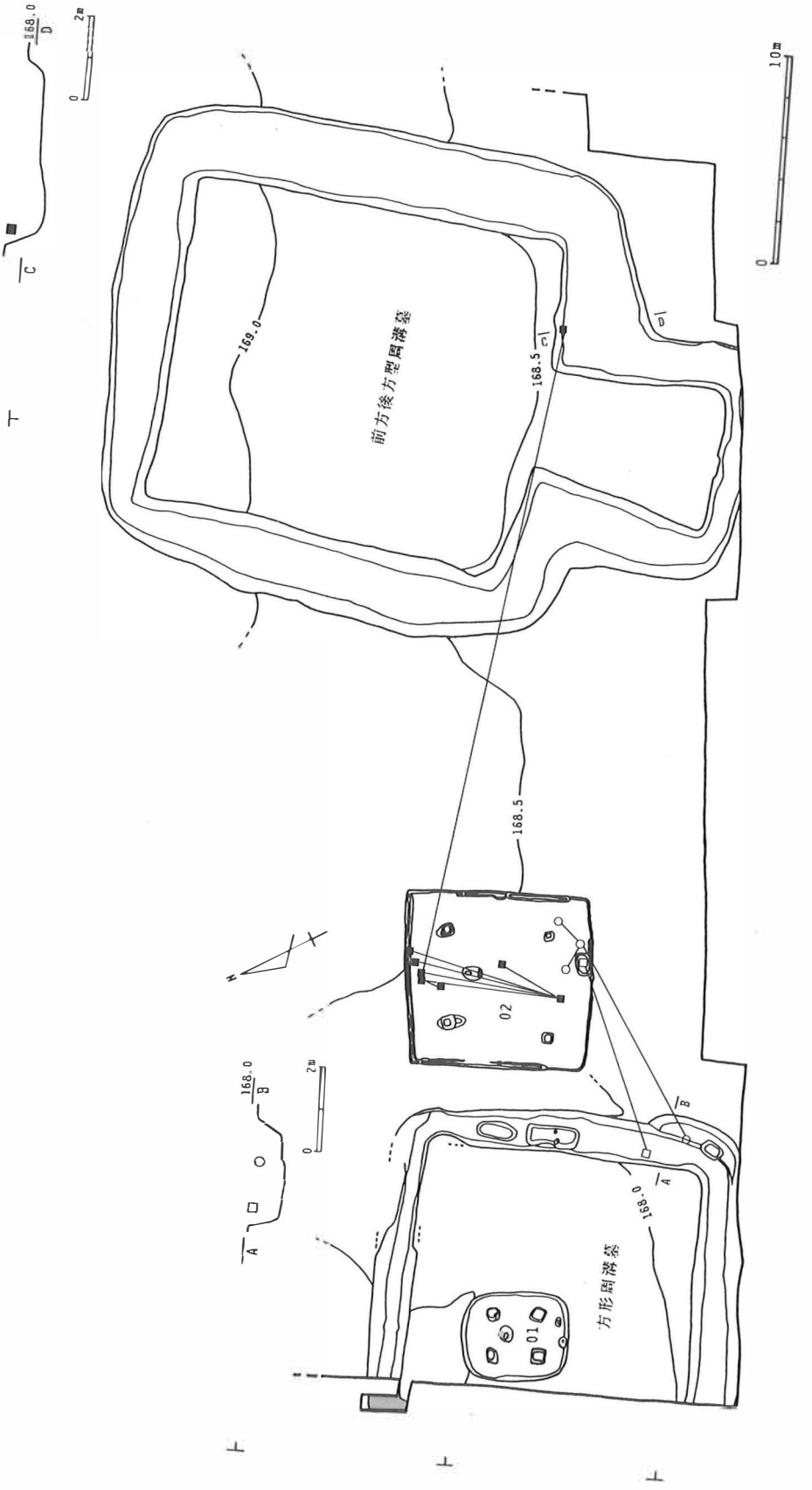


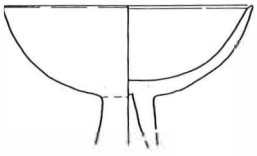
■



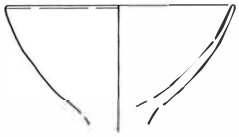
○

図−18　遺物内土器接合関係図





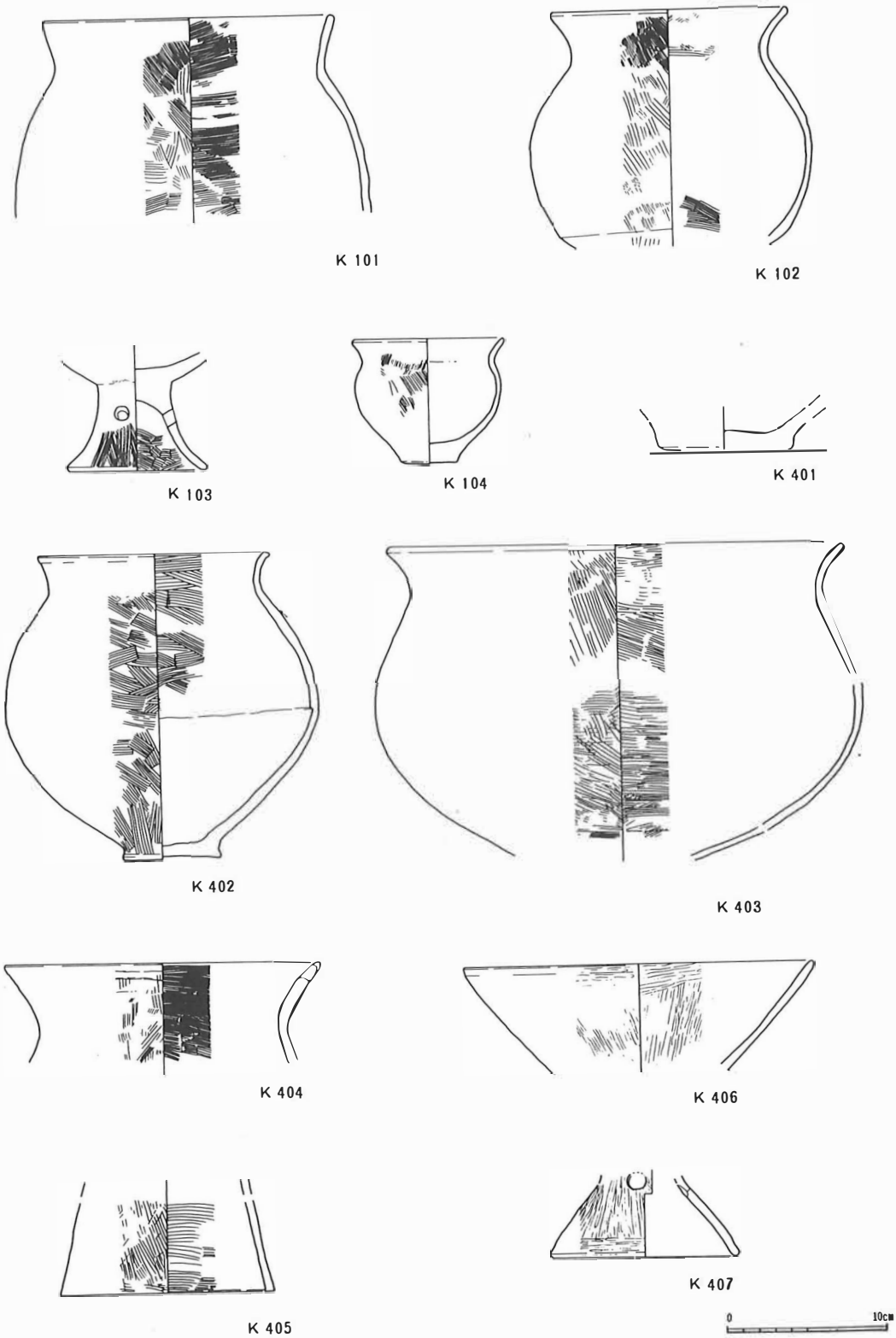
K 408



K 409

K 410

図－19　上石敷遺跡Ｋ－１、Ｋ－４号竪穴住居跡出土土器実測図



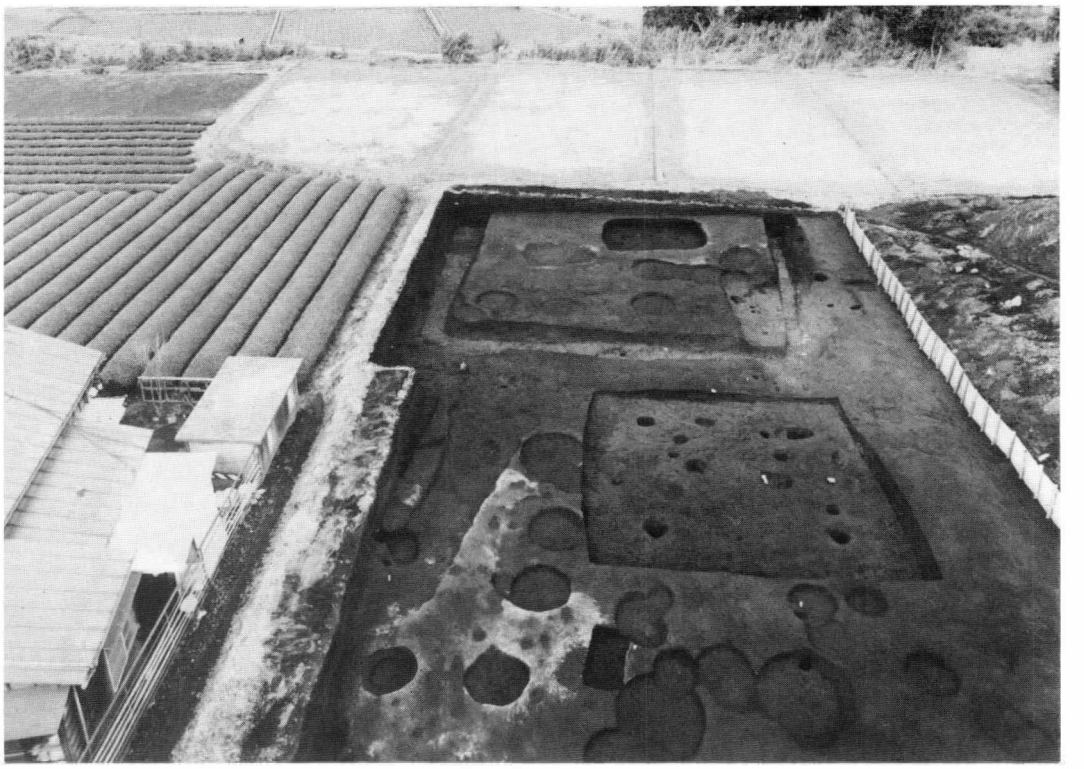
図版－１

丸ケ谷戸遺跡前方後方型周溝墓全景－１

図版－２

丸ケ谷戸遺跡全景

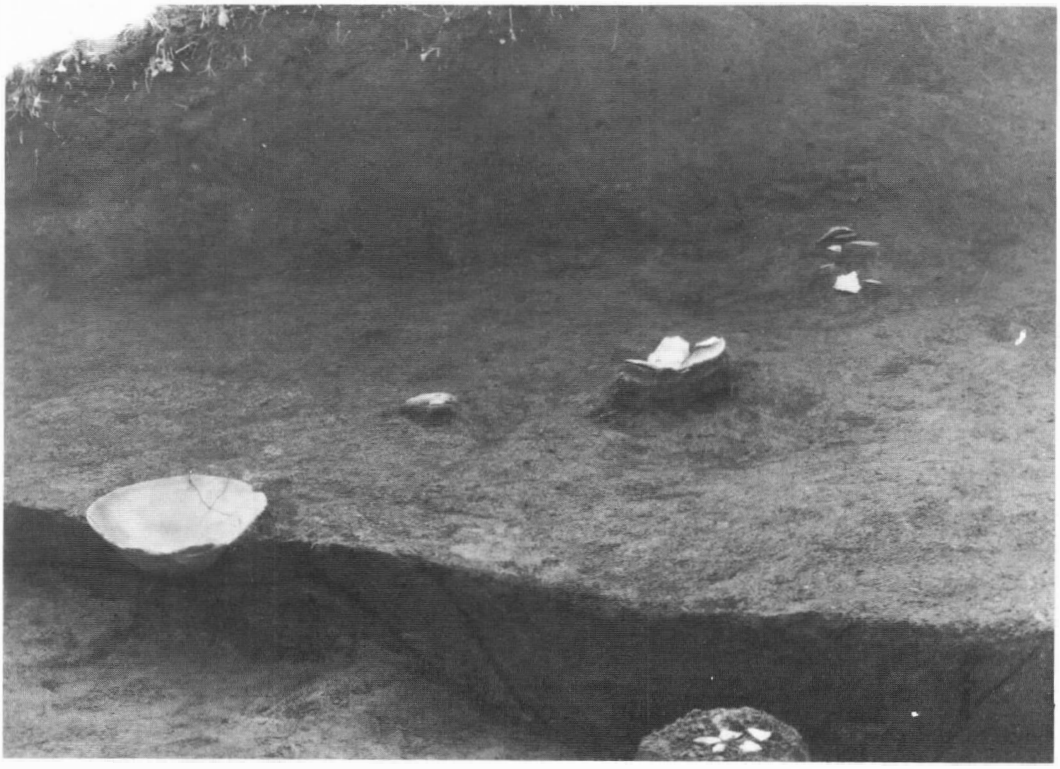
図版－3



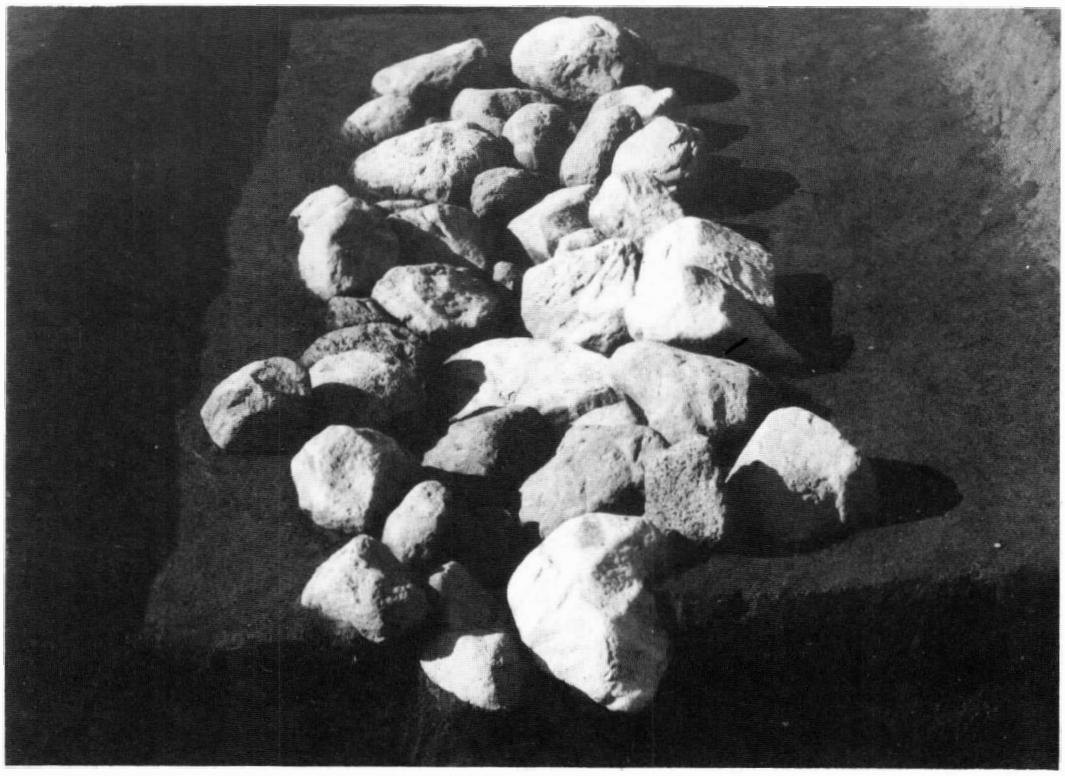
a．前方後方型周溝墓全景－2

b．方形周溝墓・竪穴住居跡01,02(手前)全景－1

図版－4



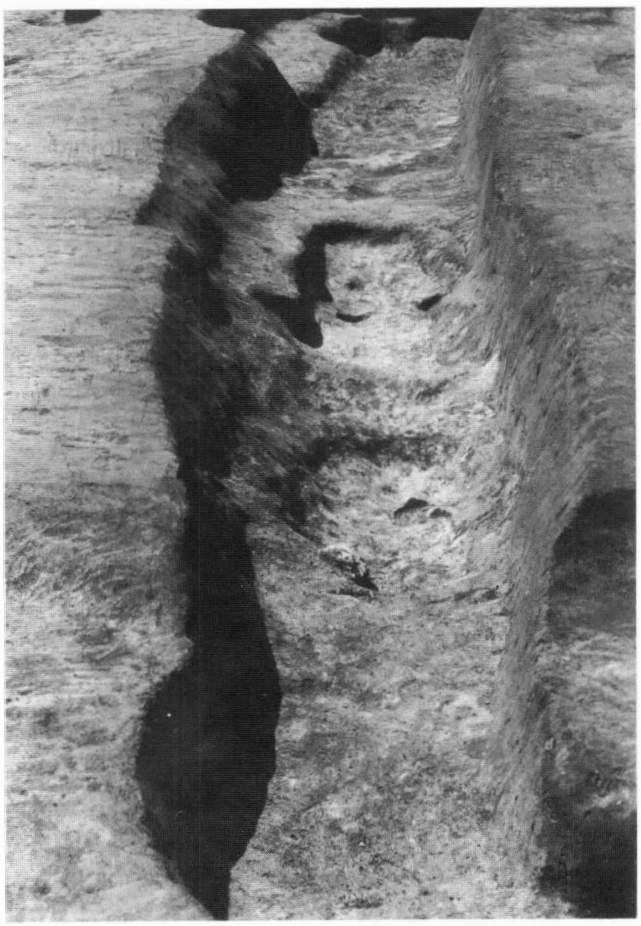
a．前方後方型周溝墓土器出土状況



b．前方後方型周溝墓溝内礫床全景

図版－5

a．方形周溝墓・竪穴住居跡01全景－2



b．方形周溝墓溝内土坑01,02全景

図版－6

a．竪穴住居跡01埋土状況

b．竪穴住居跡01床面状況

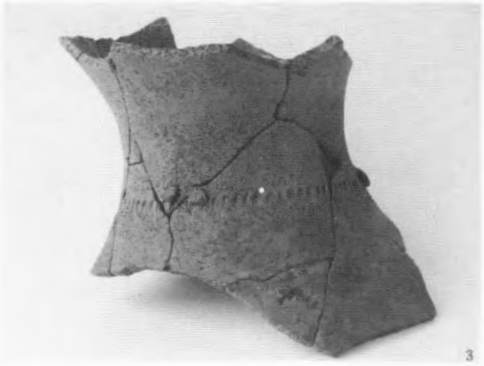
图版－7

a．竪穴住居跡02床面状況

b．竪穴住居跡02 遺物出土状況

図版－8

1


3

4

6

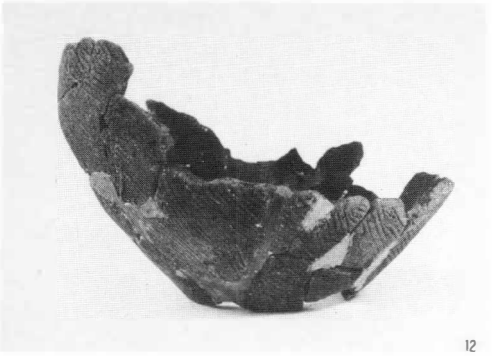
10

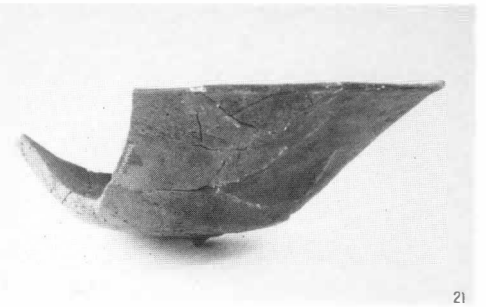
9

11

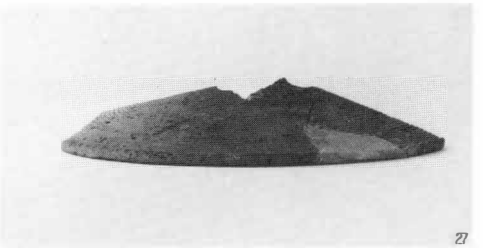
土器－1

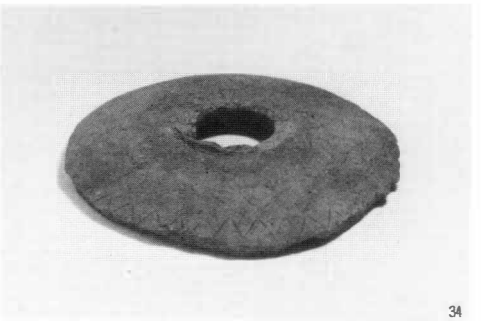
図版－9

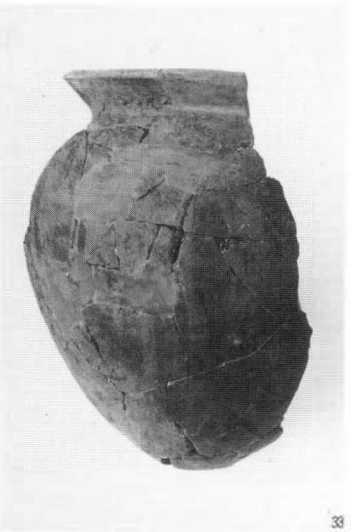

12


21

22


27


34


33

44

図版－10

46

55

54

56

57

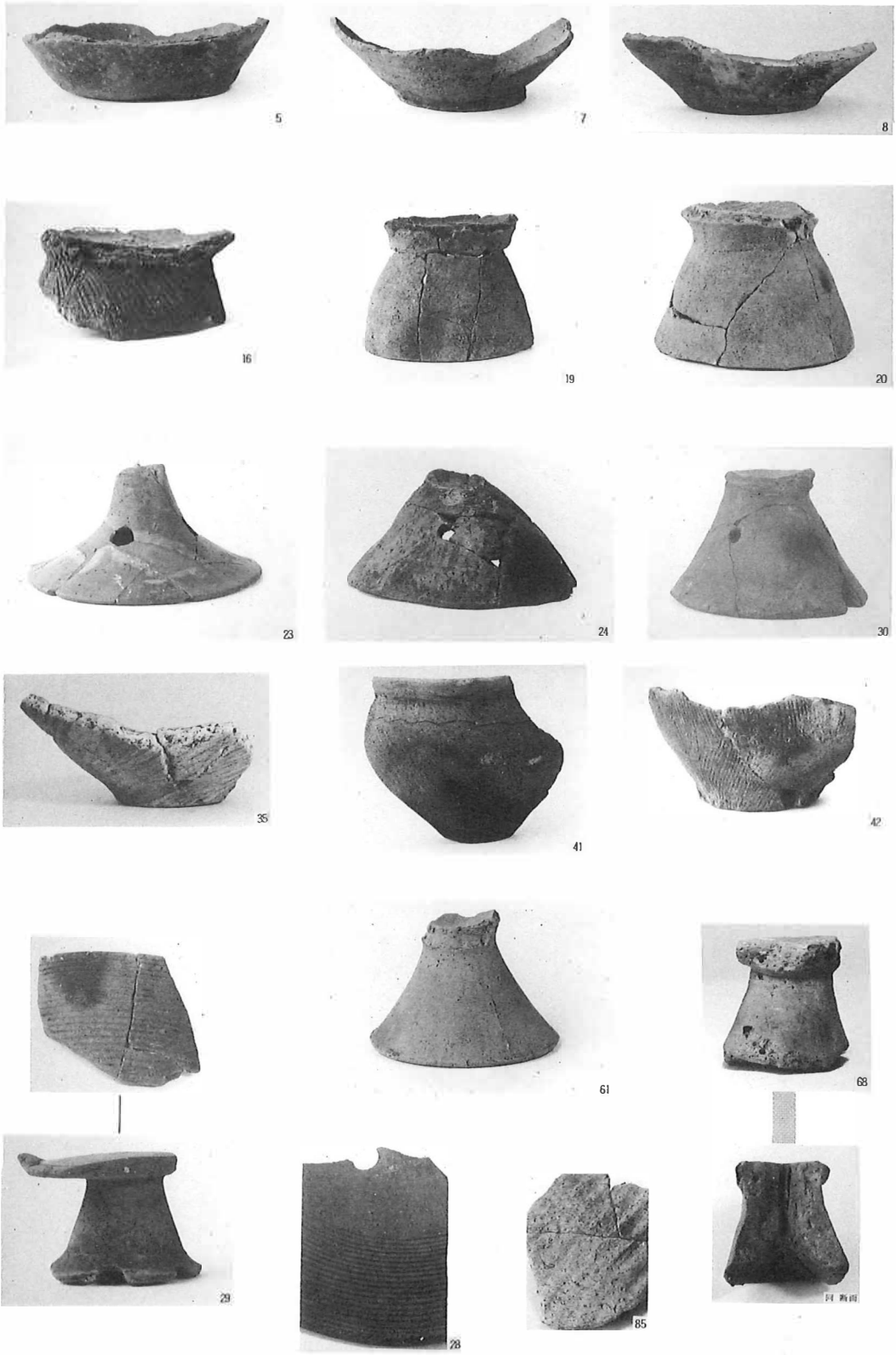
60

65

66

土器－3

図版－11



土器－4

富士宮市文化財調査報告書第14集

丸ヶ谷戸遺跡

平成３年３月２０日
編集　静岡県富士宮市教育委員会
発行　静岡県富士宮市教育委員会
〒418　静岡県富士宮市元城町１番１号
(0544) 27－３１１１(代)
印刷　㈱　緑　星　社